

福島縣の古代文化

福島縣文化財叢書第二集



(大沼郡小和羅出土土偶)

福島縣文化財叢書第二集

福島縣の古代文化

福島縣教育委員會社會教育課文化財係編



史跡指定地 小川具掘全長



同上 具層と遺物出土状況



爐のある住居跡—榎ノ岡遺跡



土器を利用し石で囲んだ爐—大沢遺跡

繩文式土器



前期 (西郷)



中期 (杉田)



後期 (松沢)



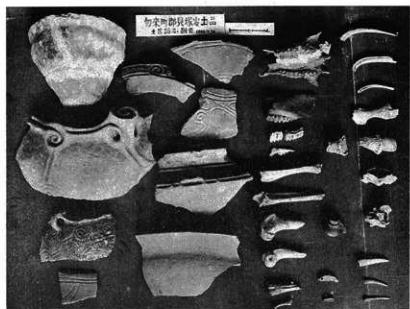
後期 (渡利)



後期 (川西)



晩期 (川前)

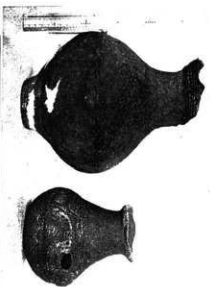


具塚出土品——郡具塚（加賀利B平行）



早期の土器——常世式（田戸式平行）

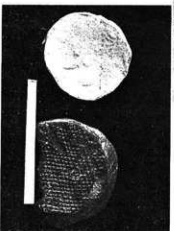
新 生 式 土 器



突玉山田土



比呂登用土



土器底面の痕痕(骨による痕)と植物跡



新式土器の出土状況(所蔵地)

土 偶



(大沼郡 小和原出土)

石

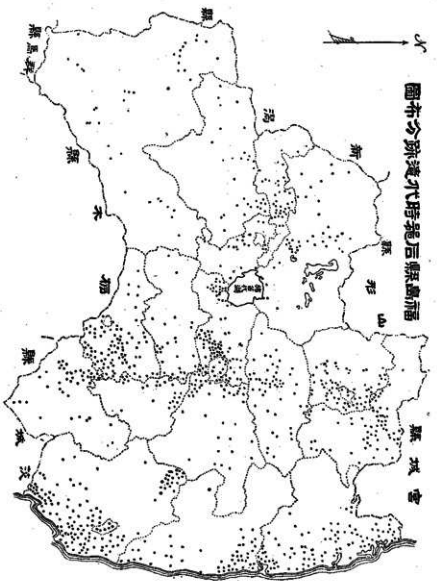
偶 (石城郡人面形石土)



(伊豫郡出土 土偶之類)



福島縣後期冰河時代分布圖



目次

序

この本の読み方

はじめに

——東北地方の古代史は書きかえなければならない——

先史時代の文化

遺跡

遺跡と遺物

遺跡の分布

遺跡の種類

遺物の研究

1、住居遺跡

a 環の阿遺跡

c 大沢遺跡

敷石遺跡

2、貝塚

a 小川貝塚

b 大畑貝塚

d 矢細工遺跡

b 東原金山遺跡

3、其の他の遺跡

古代の部落分布と地形

- a 吐川の泥炭遺跡
- b 遺下の礫地遺跡
- c 洞穴遺跡
- d 遺物包含地と矢の痕跡

- 1、海岸にある遺跡（藤原川流域）
- 2、盆地にある遺跡（一）（福島附近）
- 3、盆地にある遺跡（二）（会津地方）
- 4、阿武隈川上流の遺跡（白河附近）
- 5、湖畔の遺跡（猪苗代湖周辺）
- 6、高冷地帯の遺跡（石城郡川前村）
- 7、丘陵にある遺跡（二本松附近）
- 8、山間奥地にある遺跡（奥会津）

縄文式文化

遺物

(一) 縄文式土器

- a 土器の作り方
- b 土器の形
- c 土器の文様

縄文土器の新舊（編年的研究）

- 1、福島県の古式縄文土器
- 2、晩期の縄文土器
- 3、中期後期の土器

(二) 土製品

- 1、土偶 石偶
- 2、土版と土面
- 3、土版 その他の土製品

(三) 石器

- 1、古式の石器
- 2、狩や戦いに使われた石器
 - 一、石の鏃
 - 二、石やり
 - 三、石へら
 - 四、石鏃
- 3、日常生活に使われた石器
 - 一、石きり
 - 二、石さじ
 - 三、石斧
 - 四、環状石斧
 - 五、独鈷石
 - 六、石棒
 - 七、石皿、石臼とたたき石
 - 八、凹石
 - 九、石おもりと磨石のうき
 - 一〇、石冠と石鏃
 - 一一、三角石鏃
 - 一二、助懸車
 - 一三、まが玉と耳飾

(四) 骨角器

(五) 木製品と自然物

彌生式文化

(一) 彌生式土器

- a 彌生式土器の特徴
- b 彌生式土器の編年

(二) 東北地方の彌生式土器

- 1、樹形明式
- 2、南御山式
- 3、天王山式

(三) 福島県の彌生式遺跡

- 1、南御山遺跡
- 2、津尻遺跡
- 3、天王山遺跡

- 4、棚倉比丘尾倉遺跡
5、針生遺跡
6、鎌田の館遺跡
7、金原田遺跡
8、後田遺跡
9、北神谷遺跡
10、櫻井遺跡

(四) 彌生式文化の石器

- 1、縄文式文化時代からの石器
2、彌生式特有の石器
石廬丁
片刃石斧
紡錘車
玉類

(五) 彌生式文化の金屬器

彌生式文化と大陸

先史時代の生活

(一) 住居について

100

(二) 衣服と飾り

- 1、着物
2、髪とかぶりもの
3、飾りもの

100

(三) 先史時代の食物

- 1、縄文式文化の食物
2、彌生式文化の食物

103

(四) 先史時代の生業

- 1、縄文式文化人の生活
2、彌生式文化人の生活

105

東北地方の農業はいつ頃始まつたか

106

- 1、寒冷地の稲作
2、稲作をしめす遺物と遺跡

(附) 河沼郡八幡村釜見の榎付土製品について

(五) 先史時代の信仰

- 1、祭祀遺跡
2、先史時代の墓

109

(六) 先史時代の人類

- 1、古代人種の研究史
2、縄文式文化時代の人
3、彌生式文化時代の人

113

- 4、大陸の影響
5、東北地方の先史時代の人

【附録】

福島縣先史時代文化遺跡地名表

116

挿圖 目次

寫 真

第一圖 小川貝塚全景(史跡指定) 同貝層と随物出土状況

第二圖 竪のある住居跡(竪の阿波跡) 土器を利用し石で

囲んだ竪(大沢遺跡)

第三圖 縄文式土器(磐城) 杉田、塩沢、渡利、川西、川

前村(発見)

第四圖 貝塚出土品(郡貝塚) 早期の土器(常世式)

第五圖 彌生式土器(天王山) 鎌倉、南御山、土器産部の

竪痕と稲物)

第六圖 土偶(大沼郡、伊達郡、石城郡)

第七圖 福島縣先史遺跡分布圖

凸 版

第一圖	海中の貝をとる手長明神	(一〇)
第二圖	美しい縄文	(九)
第三圖	磐穴裏遺跡	(八)
第四圖	蝦ノ岡遺跡	(七)
第五圖	埴と磯石	(六)
第六圖	石かごみの埴	(五)
第七圖	小川貝塚	(四)
第八圖	鹿原川流域	(三)
第九圖	福島地方の遺跡	(二)
第十圖	聖苗代湖附近	(一)
第十一圖	廣合澤の遺跡	(一〇)
第十二圖	土器の彩	(九)
第十三圖	福島縣の縄文土器集成圖	(八)
第十四圖	古式縄文の拓本	(七)
第十五圖	前期縄文の拓本	(六)
第十六圖	中期縄文の拓本	(五)
第十七圖	土 偶	(四)
第十八圖	土 版	(三)
第十九圖	動物土偶	(二)
第二十圖	局部磨製石斧	(一)
第二二圖	石 錮	(一〇)
第二三圖	石 槍	(九)
第二四圖	大形石器と石へら	(八)
第二五圖	石 鏃	(七)
第二六圖	石きり	(六)

第二六圖 石 七

第二六圖	打撈石斧	(一三)
第二七圖	磨製石斧	(一二)
第二八圖	石 環	(一一)
第二九圖	磨石	(一〇)
第三〇圖	磨石石	(九)
第三一圖	石 槌、石錘	(八)
第三二圖	石皿と石うす	(七)
第三三圖	くぼみ石	(六)
第三四圖	おもりとろしき	(五)
第三五圖	冠 石	(四)
第三六圖	石錮とすり切石器	(三)
第三七圖	三角石器	(二)
第三八圖	動植物形立体土製品	(一)
第三九圖	玉類と兵輪	(一〇)
第四〇圖	骨角器と貝輪	(九)
第四一圖	こしき	(八)
同	天土山尾跡地蔵状況	(七)
第四二圖	縄生式土器拓本	(六)
第四三圖	福島縣の縄生式土器集成圖	(五)
第四四圖	天土山遺跡	(四)
第四五圖	同A號地出土状況	(三)
第四六圖	石 盾、丁	(二)
第四七圖	片刃石斧	(一)
第四八圖	鏡麻石	(一〇)
第四九圖	たて穴	(九)

序

文化財叢書發刊について

人は物事の由來や、そのうつりかわりを知りたがるものである。ことに何かの事件がおきてふと自分の過去をふりかえつて反省し、新しい出発の基とする。これは國の場合にもあてはまることである。

敗戦という現実にあつて、ゆがめ教えたこまれた歴史に、痛烈な批判と憎惡の目をむけ、或はその汚れた過去をきらつて虚脱な生活に入り、進む道を失つた若い人々もあつたが、次第に落着と反省が加えられて、この頃では未來に対して明るい希望をもつて、苦しい日々の生活にたえて祖國再建にはげむようになつてきたのは喜ぶべきことである。

日本歴史や、地域社会の過去を知ろうとする聲が大きくなつたのもそのあらわれの一つである。新しい歴史は廣く、数多い史料を科学的に吟味し、系統づけ、組織たてて眞實の姿をうつし出すことにある。自分の身近な地域社会の歴史もそのである。福島縣には小規模な歴史が一、二あるがまとまつたくわしい歴史書はない。東北型という限られた風土に育つた歴史的事象、氣候地勢などの自然條件から、いくつかのプロトクに分れて発達した東北地方の歴史を、総合的にまとめ上げた歴史書も見当らない。福島縣では戦争前の昭和十五年に福島縣史編纂部がおかれて修史事業をはじめ、中世期末まで編集して中止されてしまつた。しかも戦争中の修史である爲に現在ふりかえつてみると修正すべき点があり、その後の新発見や、増補すべき資料があらわれて縣史稿はここに筆を加え考を改める必要に迫られてきた。

一方新教育においては歴史教育が復活し、また社会科という新しいカリキュラムができて、生活している環境の姿、その

成立、変遷をしらべる項目が生れて、小学生も郷土の文化遺産や生活の歴史を調べることになつてゐる。ところが折角プログラムをたててもかんじんの資料がなく、研究に困難をきたしその実が上らないように見受けられる。ここに歴史編纂の責任をうけつてゐる編者は、郷の文化財の調査保存の公務にたすきわる余暇に、本書の編集を企図した次第である。

歴史といへば廣義の史学であるが、考古学、社会経済史、民俗学等の人文科学に更に自然科学に属する戸外文化財も含めて廣い立場から郷民の生活史と生活の環境を、あらゆる角度から見極めて、郷島歴史、古文化、民俗、自然史、天然資源の各般にわたつて平易に記述し、視覚に訴ふるに寫眞挿絵を多くして郷民各自の座右に贈るのが本書発刊の趣旨である。勿論編者一人で出来る事ではないので、郷が囑託してゐる文化財の調査委員をはじめ各研究家と大同團結の力によつて次のような命題を計画してゐるのである。

- | | | | | |
|-----|-----------|-------|------|------------|
| 第一集 | 郷島の文化財 | (既刊) | 第十一集 | 郷島の習俗と迷信 |
| 第二集 | 郷島の古代文化 | (本書) | 第十二集 | 郷島の玩具と民謡 |
| 第三集 | 郷島の古墳文化 | (編集中) | 第十三集 | 郷島の史蹟と名勝 |
| 第四集 | 郷島の傳説と昔話 | (同) | 第十四集 | 郷島の天然資源と自然 |
| 第五集 | 郷島の年中行事 | | 第十五集 | 郷島の地名辞典 |
| 第六集 | 郷島の民謡と舞踊 | | | |
| 第七集 | 郷島の村祭と御祭日 | | | |
| 第八集 | 郷島の佛教文化 | | | |
| 第九集 | 郷島の農民史 | | | |
| 第十集 | 郷島郷人物誌 | | | |
- 昭和二十五年十月
郷島縣教育委員会事務局社会教育課
文化財係 梅 富 茂
以上続刊

この本の読み方

- 一、この本は郷島縣文化財叢書第二集「郷島の古代文化」と題して、郷島縣を中心とする東北地方の先史時代の文化について書いたもので、われわれ祖先の最も古い時代の生活を考古学の上からのべたものである。
- 二、この本は終極熱心な研究を積つてゐる郷下の高等学校、郷島大学等の若い学生の研究グループと、筆者と志を同じくする人々の調査した最も新しい資料、代表的なものを選んでのせたものであるが、中には重要な資料を脱落し、或は考え違へしているかもしれないが、その点は是非御教示願つて将来訂正致します。
- 三、この本は小学生でも、考古学の知識のない人でもすぐ理解できるようにやさしく説明してゐるから、読物としてむづいかな氣楽な氣持で始から終まで読んで下さい。しかし専門的な研究をしようとする人には物足りないかもしれないが、その爲には註記に典拠や参考書、研究者名を紹介し、又末尾に索引をつけてあるからそれによつて研究して下さい。なお専門家のためには教育委員会社会教育課では別に年刊報告書「郷島縣文化財調査報告書」を毎年二月に刊行するから併せて御参照下さい。

- 四、考古学の勉強は本を読むだけでは理解されないで、実物を見、遺跡に行つてしらべなければなりません。それは実証史学といわれる考古学の研究には最もよい方法ですが、そのために田畑を荒し、大事な遺跡や遺物をこわすことがあります。遺跡は或は自分の土地であつても縣教育委員会を通じて文部省の文化財保護委員会の許可を得ないで発掘すると罰せられます。この本は二つとない遠い祖先の遺産を保護するのが一番の目的で書かれたものであるから、一片の土器、一塊の石器にも深い関心と愛情を持つて下さるようお願い致します。
- 五、遺跡や遺物の発見は偶然の場合が多いので、日本古代史の研究は学者の手によるのみでなく、一般の人々の関心によ

るものが多いのであるから、折角掘り出された好標本や貴重な資料をこわしたり勝手に処分しないで警察署を通じて縣教育委員会に報告しなければなりません。これは前記の無届発掘と共に文化財保護法の規定により五千円以下の罰金をかせられます。

六、先史時代の遺跡遺物の研究法、分類、考証は種々意見が分かれておりますが、御指導を願つております左記の先生方の直接間接に或は著書による御教示を基と致しました。なお陛下の研究家の資料を数多く引用させて頂きましたので末尾で失禮ですが併せて感謝の言葉をさせていただきます。

東北大学	伊東信雄先生
東京大学	長谷部晋人先生
同	山内清男先生
文部省	齋藤忠先生
国立博物館	八幡一郎先生
国学院大学	大場磐雄先生
明治大学	後藤守一先生
同	杉原莊介先生
慶應大学	清水潤三先生
同	江坂輝彌先生
京都大学	清野謙次先生

(順序不同)

はじめに

——東北地方の古代史は書きかえなければならぬ——

この土地にはじめて人間が住むようになったのは何時頃で、どんな人々が、どういふ風な生活を営んでいたであろう。今までの日本書紀や古事記を中心としていた歴史によると、紀元元年頃崇神天皇は大津命と武甕槌名川別命の親子を「えぞ」の國につかわした。二人は日本海岸と東國方面から福島縣に入り、金津で丹金されたことを最初の歴史として、それから百年後の旅行天皇の時竹内宿禰が視察し後に日本武命が征伐にきた。その当時の東北地方の様子は「東夷の中に蝦夷」といふ蛮族がすくっていた未開の土地で、それ以來平安時代の中頃まで大和朝廷の征伐や、えぞ同志の戦が續けられていた」と記録されている。

また考古学の旧説をかりていふ人は、明治から大正に行われた旧説をそのまま信じていて、太古の蛮族は先住民族といふ、アイヌ式土器を使い、石器をもち、エゾ穴にすくつていたと考え、これらの東北地方のえぞは度々の征伐によつて平げられ、或は北方に追いつめられそのあとを占領したのが、われわれ大和民族の祖先であつたと説明しているが、これが眞実の東北地方の古代史であろうか。

古事記や日本書紀はわが國で最も古い記録であるが、七世紀から八世紀にかけて書かれたこれらの文献は、大部分神話伝説を中心としたものであるから、すぐそのまま歴史と考へることはできない。しかし神話や伝説はどこの國でもあることで、当時の人々は人智の及ばないものはすべて神の業だと信じていたので、歴史でないから價值がないといふのではな

い。三代實録や続日本後紀という本には紀元九百年頃秋田縣の海岸に雷雨があつたが、晴れた後に氣がついてみると、海岸に石鏡が降つてゐた。その色は白、黒、赤など種々であつたので、人々は大いに驚きおそれ、どうしたらよいかと都に報告した。都では陰陽寮に占わしめた後土地の神社に幣を奉じて不吉のことがないように祈つたということが三代も記録されてゐる。



第一圖 郡中の具をとる手長明神

また相馬郡新地村の小川貝塚については「昔手の長い神様が、がろう山に住んでいて、長い手をのばしては海中の貝をとつて食つてゐた。その捨てた殻がつもつて丘となつてゐる。この神を手長明神とうやまつた」ということが奥羽觀瀾聞老誌(1)という本にかいてあるが、同じ伝説は七世紀に作られた常陸風土記にも書いてある有名な伝説であるこれによると平安時代の中頃(九世紀)にはもう石鏡は誰が作つたのか一向知らなく神様が射た矢であらうと考え、奈良時代(七世紀)の人々は貝塚が何であるかを忘れて人間以外の巨人のしわざであると神秘的に考へてゐた。これをもつてしても東北地方の先史時代がどんなに古いかが想像される。

石器や貝塚が人々に注意され、記録にでてるようになってしたのは四百年程前からで、その頃は石鏡をふ守とし、他

の石器を雷斧、雷鏡、神杖、天狗の飯匙などといひ、石棒や石皿は神様の御神体になつて拜まれてゐた。人間が使つたものだと考えられるようになったのは徳川時代も末の頃で、琵琶湖畔の人、木内石尊という人の仲間によつて次第に明かにされたもので、それでも殆どの頃は石鏡は東北地方に限られたものと信じられてゐた。その頃金津藩士に田村三省という人がいた。當時流行した珍石集めを行つてゐたが、他の愛石家とちがつて、實地に採集を行つたので石器類には特に興味をもち「金津石譜」上下二巻を著わしてゐる。この中の「石鏡」の項に「諸記録ニ神軍ノ石鏡ノ降リシナリト云ヘリ又天然ノ物ナリトモ異説紛々アリ誠ニ今ノ人今日ノ心ヲ以テ上古ノ事計ルベカラズ(中略)今大金津ノ中石鏡ヲ産スル地ヘ心ス鳥古瓦ノ缺(土器の破片のこと)アリ其ノナキ地ヨリ出ル事ヲ未ダ聞カズ然レバ上古ノ鏡ヲナクテ石鏡トスルナリ頃日蝦夷ノ矢ヲ見ルニ角ノ鏡ナリ鏡少キ故ナラン」とのべて石器と土器は必ず伴出するもので上古の人間の使つたものであることを論じ、金津の遺跡地名を数多く紹介してゐる。いわば現在の先史考古学の遺物調査の始祖であり、十八世紀の頃にしては偉大な考古学者であつた。

考古学は遺跡と遺物によつて日本人の古代の生活、過去の文化をしらべる學問である。東北の古代史はこの考古学と、その足りないところを補う人類学、民俗学などの學問によつて書かれないところの歴史を明にするものである。

東北地方の古代史は再吟味を要する。——東北の古代史は決してえぞ穴に住んでゐたアイヌの祖先が征伐ばかりされて北方に退いてしまつたのではない。世界に誇るすぐれた縄文土器を作り、新石器時代相當の文化をもつたわれわれ日本人の祖先(日本石器時代人)が悠々の昔から住んでゐたのである。日本人は人類がこの島に住むようになった時から生活してゐたのである。日本人種の故郷は初めから日本國であり、東北はアイヌの祖先のみの住居地ではなく、われわれ祖先の住居地で、またその故郷であつたわけである。

註 (一) 黒羽遺蹟開老志(享保四年、佐久間義和撰)

「任時有神山 常靈聖原白狼相神 其安響不可並焉 附北山頭邊龜亦有年 又好拾貝得其子而棄於新地村焉

新敷原々國致朽真地々加丘 海皇呼神手長明神 號丘貝塚」

先史時代の文化

古代ということ

暖い日にはビクニツクや散歩に野山を歩くときが多い。また何かのついでに海にほど遠くない岡や、小川にのぞむなだらかな丘陵のすそや田畑のへりに出たら、ちよつと立止つてあたりの地面や崖をごらんさない。明るくもえ出た草や、真新しい地肌のあるわれに残雪のように真白な貝殻が散らばり、七輪のかけらのような赤穂きの土器片がころがっていたらまず腰をすえてあたりをさがすとよい。もし大霜の朝や、強い夕立の後であるなら異様な形の石かけが落ちてくるにちがいない。そこはわれわれの遠い祖先の残した貝塚であろうし、遺物の包含されている住居の跡なのである。

古代文化は、まず足もとに落ちてゐる石を拾つてそれを打ちかいて器具を作つた、いわゆる石器時代からはじまる。古代という言葉はこくばくぜんとしてゐる言葉であるが、専門の学者間では、日本歴史のはじまる前を「有史以前」とか「史前時代」、「先史時代」と呼んでいる。これは「日本が正しく國家としての歴史をもつに至つた時代より前の時代」という意味である。一般に古代というと、歴史がはじまつてから後の、そのいくばくかの歴史時代をも含めてゐるのであるが、それは既に歴史がはじまつてゐるのであるから、むしろ「上古」といつた方がよいので、本書で使つてゐる古代とい

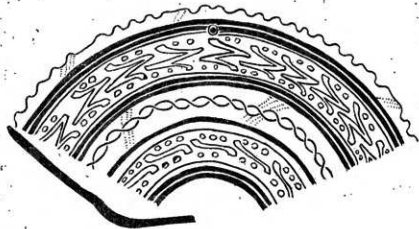
う語は主として日本歴史のはじまる前のことをい表わしてゐるのである。つまり考古学上の「先史時代」即ち石器時代と金石併用時代であることを承知して下され。

日本の先史時代文化

人類文化の発達のあとをたずねると、まず旧石器時代、次が新石器時代(この間に中石器時代を考ふる学者もある)から青銅器時代をへて鉄器時代となるのが普通の順序である。日本の附近についてみると、中国や北アジアの地には、旧石器時代の人々が生生活してゐたことが明になつてゐる。したがつて我が國にも旧石器時代の文化があつてよいはずである。これまで発見されなかつたが、最近になつて群馬縣新田郡笠懸村の関東第一層(沖積重初頭の相当古い所に遺跡があり旧石器が発見されて、これを「岩宿文化」といつて研究中であり(1)関東地方の某石灰洞からは旧石器時代人の化石が発見されたといわれる。又新石器時代の中に、ヨーロッパで旧石器時代のものと同みられてゐるものもまじつてゐる。それは日本は島國であるために、新旧の文化が入り混つてゐると考ふるのが、わが國の新石器時代文化の本當の姿でありましよう。日本の石器時代の文化をみると、まず縄文式土器文化(略して縄文式文化といふ)が発達し、後にはこれと並んで彌生式土器文化(彌生式文化)が西日本に行われ、それがわが東北地方にまで移つて、縄文式文化とおきかえられ、或は直ちに次の鉄器時代の古墳文化時代にうつり變つてゐる。

縄文式文化

縄文式土器といふのは、遺物のところどころでくわしく説明してゐるが縄や席の目のような文様が土器の表面につけられ、そのほか粘土を盛り上げてつた模様や、何かの物を押しつけ、ほり下げた直線や曲線の圖案を土器の表面に描いてある一



第二圖 美しい縄文式 福島県下発見の晩期(大洞式)

群の土器をさすので世界廣しといえども藝術的優秀さにおいて縄文式土器と肩をならべる原始土器はないといわれるほど立派なものが多し。

それでは一体この縄文式文化は何時頃、どこから渡つてきたものであるかということが問題にされるが、この問題は古くは多くの學者によつて盛に議論されたが、最近の學者はあまりこの問題にはふれていない。それは最近の學者はこれを忘れたのではなく、もつと基礎的な調査を行い、十分な資料を求めてから再出発しようとして、心深い研究をしているのである。今のところ縄文式文化の発生した所も、何千年前に渡つてきたのかも明でない。よく石器時代といへば三千年前ということがいわれるが、これは關東地方の貝塚の分布から当時の東京湾の海岸線を想定し、これが一年間に少しずつ上昇して現在の海岸に到つた割合を計算して求めた概算から生じた想像である。しかもその貝塚は縄文式土器の晩期に屬するので、今かりにこの説を基とすると縄文式文化はさらに、中期、前期と古いものがあるから三千年よりもつと古いものが多くあるわけである。また縄文式早期の稻荷台式の遺物が、 μ 層の相當深い所から発見され、これを地学的にみて約一万年前だと発表した學者があり、それ

よりもつと古い旧石器時代があれば決して古過ぎはしないとしても果して一万年が正しいとは決していられない。しかもこれらの説は關東地方の土器を規準としているのもつてきて、東北地方の縄文式時代も三千年と考へるのもどうかと思われ。従つて平凡な言葉であるが、縄文式土器は悠遠な昔に大陸から渡つてきて、その終りは次の彌生式文化に接続していたと考へるべきであらう。

縄文式文化は一時日本全土を支配し、東日本がその中心のように考えられる。東北地方はとくに縄文式文化が長く榮え龜ヶ岡式といわれる一群の土器は特殊な発達をして、優秀な木製器も発見され、既に鐵器を使用していたのではないかと想像される。縄文式文化の発達のあとは前期、中期、後期と分け、前期の先に早期、後期の後に晩期という五つの時代に區別し、更にいくつかの文化内容に細く分けられ、關東地方では二十數型、東北地方では三十數型に分けて研究している學者がある。それ程東北地方の縄文文化は古く長かつたわけである。

彌生式文化

明治十七年のこと、今の東京大学のとなり彌生町の貝塚から、みないない赤色の文様のない土器が発見された。最初はあまり注意されていなかったが明治十六年に同じ型式の土器が発見され、翌年にはわが福島縣からも同じような土器が出土していることが報ぜられて、縄文式文化時代とは別の文化をもつものであることが明にされ、発見の名にちなんで彌生式土器と名づけられた。この彌生式土器の行われた時代は、西暦紀元前一・二世紀から四・五世紀までのみじかい時代であつたといわれる。ところによつては(東北地方のごときは)もつとおくれ、一・二世紀から四・五世紀までであつたようであるが、おぼろげによつてわれわれ日本人が、今から約二千年前のこの彌生式文化時代から、今日と同じように稲をつくり、米を食へる生活がはじめられていたので、いわばわが國の文化のあけぼのに相當するわけで、三月の名である彌

生は「春はあけぼの」といつた意味でまことにふさわしい名前ではありませんか。この彌生式土器の分布から考えると、最も古い彌生式土器は北九州が古い、近畿地方のも古いので、彌生式文化は近畿地方ではじまったのか、北九州から起つたのかまだその点はつきりしてない。しかし最近の学説では近畿の方が本家であるように考えられるふしがあるが、また研究は十分でないのでまだと断定することは出来ない。その上日本の周囲には朝鮮にも滿州にも中国のどこにも彌生式文化の原型になるものは今のところ発見されていない。しかし土器や銅鐸など彌生式文化の中心となる遺物以外のものや同時に鐵器や農具が伝つてきていることから考えると、大陸との交通が行われ、深い関係があることは明である。

彌生式文化時代は土器の型式によりいくつかに区分されているが、日本も新石器時代の後期で、繩文式からの石器の外に彌生式特有の石器もあり、又金屬も使っているので金石併用時代ともいわれ、繩文式文化の後である。彌生式文化は數百年の短い時期で、その末期には石器はすたれ鐵器が盛んに使用され、土師器や須惠器を使う古墳文化時代に移つて、始めて歴史とのつながりか生じてきた。

東北地方は長く繩文式文化が栄えていたから、ようやく入つてきた彌生式文化は西日本とはおおよそ懸つたものになつたが、それでも予想以上早く移つたと見えてその遺跡や遺物は相当広く分布しているが、多くは繩文式文化との接融や古墳時代の遺物と混つて発見され、彌生式特有な石器も少く、青銅器文化はついに入らないで古墳文化に移つてしまつた。

(1) 一九四九年晩春発見、明治大学文学部考古学研究所助教授杉原介氏ら試掘調査

(2) 後藤守一著私たちの考古学（先史時代編）

(3) 日本考古学入門（吉川弘文館）彌生式文化時代 駒井和登

遺跡

(一) 遺跡と遺物

考古学研究は、遺物並に遺跡により過去の生活文化を研究する学問である。前に述べたが、実は遺物と遺跡の区別はやさしいようでむずかしいもので、ことに歴史時代のものになると判断がつかないことがある。かたんにいうと、遺跡とは昔の人類の生活したあとで、具体的にいうと古代の人がつくり、用いた物が（遺物）である深さの土中に埋つている「遺物包含地」や遺物が地表に散らばつている「遺物散布地」などを遺跡という。遺物と遺跡とは遺物の積層のような関係で、遺跡が発見されても、そこに何らの遺物がなくては、その時代も文化もわからないし、発見地不明の土器や石器があつてもそれは単に先史時代の道具である以外に大して学問的には價値のないものである。そこで私たちの考古学研究の第一歩は遺跡から調べなければならぬ。

(二) 遺跡の種類

先史時代の遺跡には、お墓、お祭したあと、住居遺跡があり、貝塚や泥炭遺跡のようなごみ捨場もある。また居住したことをばくぜん示す遺物包含地もある。この中最も多いのは居住地で、お墓も祭祀地もごみ捨場も広い意味では居住地であるから、遺跡はすべて古代の人々の村のあととみてよい。

遺跡がすべて居住地であり、村であるとするには住むに適した条件があるはずである。当時の生活は今とはちがつているので、時には思いがけない高い山や、狭い不便な所にある場合があるが、多くは生活に都合のよい地形である。

河の流域や入江のある海岸の丘、泉に近い谷口扇状地などの南に面した日当たりのよい、風の少ない、それから土地の乾いた
或る程度見通のきくゆるい斜面のはしだがそうである。なれた学者になると地形を遠くから眺め、地図をみて遺跡のあ
ることを想定することができる。

古い縄文式の遺跡は丘陵や山に近い比較的高地に分布しているが、末期になると次第に低地へ進んで、洪積層と沖積層
とのつながる所——丘から平野に移らうとする舌状地が選ばれて、遺物包含や散布も廣く物が多くなる。彌生式になると
新生の沖積平野に下り、水に便利な、時には沼沢地のような低過地に分布がみられ、いわゆる低地性遺跡をなしているの
は、水田耕作と結びつけて考えられる重要な条件である。

これと同時に山の多い地方、ことに奥会津や阿武隈高原では縄文末期になると、かえつて山に向つて奥へ奥へと開拓の
手をのばし、時には意外な深山に遺跡が発見される事実も見がせない。これは低地に下つたのと生活の様式がちがつて
いるためと考えられる。

(三) 遺跡の分布

先單の研究家や筆者のグループが調査した先史時代の遺跡地名表は後に出してまいだが、寫眞七の分布図を概観すると
およそ現在の村の分布と平行するほどの地名があげられていることに氣づくであらう。しかしくわしくみると遺跡の多い
ところと少ない地方があり、こんなところと思ふ奥地や山岳地帯にも分布して當然早く文化が開けたと思われる現在の郡会
地附近が案外少いことに氣づく。これは遺跡は文化移入のしやすい地理的條件やまた當時の生活に適する地形によつて左
右される外先史時代の研究の盛んな所や、遺物が発見される機会が多い開拓の新局面、多少にもよるので、終戦後急激に地
名表が増加したのはこのためである。

遺跡分布の考察はさらにもう一步すすめて、その分布が地域的に、どのような自然環境に左右されているかをみることに
である。寫眞七は地名表を基にした福島縣の遺跡分布図であるが、第一に氣付くことは、河の流域が原始人の生活に大き
い関係があるという事実である。河は交通を助けるばかりでなく、生活文化支持の一つの重要なものであつた。河につい
て分布の多いのは海岸線で、とくに灣入のある土地である。二〇頁の貝塚地名表とあわせて考えれば一そう明なもので、
洪積台地が平凡に海岸に迫つている双葉郡は灣入が乏しいので浪が荒いから僅しかみられないのは注目すべきことである

遺跡の研究

1 住居遺跡

日本書紀の蝦夷の記事に「冬は穴にね、夏は木の巢に住む」とあることから古代の人は穴居していたと思つて、
各地にある横穴古墳や、発掘した円墳の石室を「えぞ穴」と稱して、古代人の家と考えている人が今なおいるよう
である。ヨーロッパの旧石器時代の人はほら穴に住み、また日本にもその例があるが、えぞは穴居生活はしていな
かつた。第一えぞは石器時代の人ではないから、この記載から先史時代の人の家を考えることはあまりである。
石器時代の住居遺跡には竪穴、敷石住居、洞穴遺跡、水上住居等があるが、福島縣の例で説明しよう。

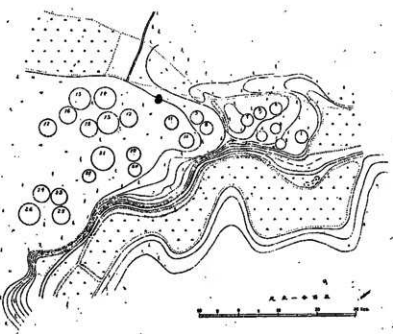
竪穴 (たてあな)

大昔の建物は地面を少しほりくぼめ、つまり竪穴をほり、柱をたて、中央に炬をきつて草の屋根をふいたのを「竪穴家」

といっている。この家がくさつていつしか埋つて穴がふさがり周囲の土と同じ高さになるとその堅穴跡の発見はむずかしくなるので、そうたくさん発見されていない。まれに土木工事や開墾により掘り取られた断面に堅穴のあとが偶然に発見されたり、石で固んだ炉が出て木炭、灰が発見されてはじめて住居遺跡であることが氣付く時もあり、研究家が計画的に遺跡地を調査して発見する場合もある。

ところが北海道や東北地方には、石器時代の末、古墳時代の新しい堅穴があり、すつかり埋つてしまわないで、浅いくぼみになっているので、この種の堅穴の発見は樂である。相馬郡の小川貝塚、真野古墳の附近、大野村にも最近発見された。大野の堅穴は昭和二十三年の夏相馬高等学校で調査したが、土師、須賀の土器や金屬のかすが発見されたので、すでに金屬使用の時代に入ったものであることが知られる。

図 111 阿武隈原の堅穴遺跡の平面図
阿武隈原の堅穴遺跡の平面図

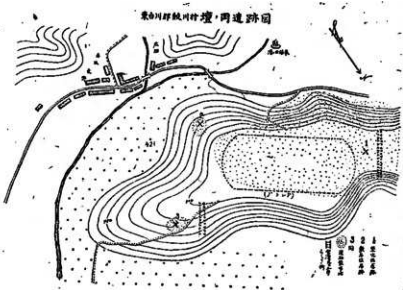


(第三圖) 111

古い縄文式の堅穴住居の跡は、関東地方のようにローム土の層植土の下にロームという赤土の層がある。のある地方は発見される場合が多いが、福島縣のように腐植土層の深い所での堅穴調査は困難で、中には堅穴が平地居住か区別がつかない。しかし次の五か所は完全に住居跡であることが明にされた。

a 【墳の調査跡】 東白川郡鮫川村赤坂中野

阿武隈原の中央にある鮫川村は、太平洋に注ぐ鮫川の上流で久慈川にも縁の遠い山間の小部落から成り立っている山村である。村の中央に「墳の岡公園」という海拔五〇〇米の舌状にのびた丘陵の東端に村の運動場がある。地名の通り周囲は中世紀の館のような階段状で、東の末端と西方の麓部に僅かながら土手があつて空堀らしいのが残つていて、その中央の運動場から縄文中期から後期にかけての縄文土器が多く出土している。地形から考えてチャシのようである。チャシというのはアイヌ語で壑寨という字をあてはめているが、山城または非常に備える見張場に当り、主として北海道や東北の北部に多く見られる普通山頂を切りとり、堀や土壘を三重三重にめぐらすといわれ



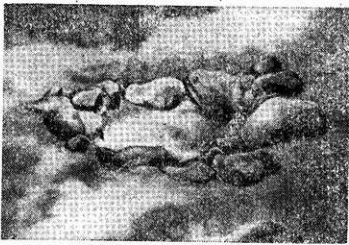
る。埋の岡道跡は南の山麓の奥附近から山腹にも数箇所 residence があり、東北と、東南の中段にはそれぞれ数石住居跡が最近の開墾で発見され、中央の平なところは、先年グラブ掘工中におびたらしい土器片と配石が発見されたという四方の谷場近くは旧壁のまゝ残っていたので筆者は昭和二十四年五月調査について完全な居住跡を発見した。(前頁二の上)

約三〇センチから五〇センチの腐植土中には若干の土器、有柄石、磨製石斧、石皿及び石棒破片が出土し、底部にも石をしきつめた石固の炉(A)が発見され、近くの焼土灰層の上に大小二個の鉢型土器があり、又竈火器といわれる凹石があつた。

そこで床面を追つて掘りすすめると直径一四センチの柱穴一箇があり、角丸のプランが現われたが、土質の關係からプランの大きさはついに見極めることが出来なかつた。柱跡も他にもう一か所の疑わしい点があつた外、竈穴が平地住居かの別も明にされなかつた。

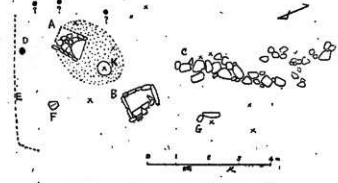
その上炉(A)の傍にある大土器と対照的の地点に長方形の石固かまど(B)があり、中からは少量の土器破片と木炭が発見された。炉(A)との關係をみると、各炉を中心とする二つのプランとしてはあまりに小さく近距離にあり、或は一竈穴に二個の炉が存在したのか、または一箇は住居の外にあつたのか大きな疑問が生じている。また注意すべきは炉(B)より北一〇度の方面に径三〇センチ内外の不整形な平石が長さ六メートルにわたつて水平に並列している配石があつた。中途の配石の中に石皿の破片があり鉢型の中程度の土器が斜に埋没しているのも確認された。時間の都合で以上の所で調査は打ち切られたが、その後東南端の斜面から竈石住居跡が開墾により偶然発見されたことが報せられたが、再調査しないうちに現状は破壊されてしまつた。

(註) この調査には岡久津村長はじめ村長局及び小瀬中学校長以下中学生諸君の應援にまつ所が多い。



第六圖 石かこみの窟(矢細工遺跡 中期)

b 【矢細工遺跡】 信夫郡藤坂村 福島市の西方三キロ、奥羽本線が奥羽山脈の第一トンネルに入るあたりの山麓を、阿武隈川の支流松川が流れている。現在松川の河床は深い溪谷をなしているが、その断崖にのぞむ松や樺木林と、りんご園のある一帯が遺跡地である。近くに小山隠という所があつて織川信長の遺蹟がかかれて住んでいて矢を細工していたという傳説があるが、石皿の発見は古く、或は矢細工の地名はこれによつたのかもれない。松川の古い河床と推定される断崖下のリンゴ畑は早く開墾されて多くの遺物を出し、某大学生により試掘されたことがある。今も表面からは大木78、加竹利Eにみるような立体把手のつけられた厚手の土器、石皿、石皿が採集される。昭和二十四年六月福島縣学生考古学会の助力によつて一部発掘を試みた。幾つかの



第七圖 窟と敷石 東白川郡敷川村蟹の岡道
(A)(B)石固みの窟 Aは一部破損 (C)敷石 (D)柱穴 一ヶは確實他は不明 (E)土層の変化により住居跡のプランか (F)凹石 (G)窟の一部 K大形の鉢型土器 ×印は土器出土地 点線内は焼土分布

ピットによつて遺物包含状況を確かめた後四ヶ所にトレンチを掘り調査した。土器片はかなり豊富で、復原可能な土器は二箇あり、厚手の大木78相当の大きいキャリパー型がある。石器としては狀穴耳飾、輕石製うき、石じ、磨製石斧、石皿が見された。Aトレンチからは地下三五センチの所に手頃の河原石で圍んだ内徑三五センチ程の円形の炉跡が見されたが、この地は最深八〇センチの深い腐植土であるために際穴か平地家屋か、プランの大きさも明にすることが出来なかつたが、炉より約二米の地点に多くの河原石が不規則に堆積していたのが注意された。B地点からは最深八〇センチのところに炭化した木質と土器片若干が見され、又C地点では腐植土中に河砂が少量層をなし、D地点には大きな河原石が埋没している。後世自然変化が加えられた居住遺跡と考えられる。

(註) この遺跡は地主の阿部氏及び山田中学校長、縣北学生考古学会員の助力によつたことを附記する。

c 【大澤遺跡】安達郡杉田村大字南杉田字稻荷山

安達郡二本松附近は小丘陵が起伏して複雑な地形をなして遺跡が多い。中でも杉田村の南杉田は落合の礫石、膽中野、分前、菅田及び郡山台、長者宮附近にかなり多くの遺跡がある。長者宮は原史時代の古墳もあり、奈良時代の古寺院跡で著名な虎丸長者傳説がある。集古十種所載の「預守之印」の銅印が見された所で、同村小学校には附近出土の中期土器が所蔵されている。字稻荷山の火谷地は長者宮の南、国道より大沢部落にいたる道路が二つの淺丘に入る北側の丘陵斜面にある。附近は道路工事や畑耕作で石棒土器が度々出土しているが、昭和二十五年七月安達高等学校生徒が調査したその結果は次の通り。道路の断崖に土器片、石塊が見えるので附近の雜木林内にトレンチを入れた、表土から三五センチの腐植土の下が土器片の包含層で、八五センチの地山から口縁部破損した土器の周囲を石で圍んだ炉が見され(竝算第一下参照)更に後一五センチの柱穴二箇所を檢出したが、居住跡の約半分は崖の爲にけけり取られて全姿を見ることが出来ず、銅盤も完全に復原出来なかつたが、恐らく竪穴住居跡でプランは角丸の長方形、二つの柱間は二・五八メートル、炉はほぼ中央に位していたものであつたらう。なお柱間の等距離に二箇の平石が置かれてあつたが支柱の土台石の如き家屋の構造を示すものであつたらう。土器は縄文末期完全なものもなかつたが割製近くに破片として相当数があり、外に凹石、石線等が出土している。

この居住跡で最も重要なものは炉の構造である。炉は発見された二つの柱孔からは約二・四〇メートルの等距離にあるのでプランの中心にあつたと考えられるが、地表より八〇センチの地山に位し、中央に短徑二九・五センチ、長徑三一・五センチ、深さ約四二センチ、底部六センチの口縁部を缺いた縄文式末期の火竈の周囲を手頃の石で二列又は三列に圍む石圍みの大きさは長徑七〇センチ、短徑六五センチ、角丸のほぼ長方形の極めて特殊な優れた炉を形成し、なおその一端にはゆうに火竈を覆うことの出来る大きな一枚の平石が発見された。

土器をもつて火竈とする例は二三の報告があるが、最も人に知られている姥山貝塚の竪穴住居跡の炉に勝るとも劣らぬ構造であることを特筆したい。

この遺跡に程近い南下村大字原瀬字火畑にも炉の発見された居住跡がある。原瀬分教場附近は、原瀬川に臨む丘陵で中世期の館跡になつていてが約二町歩にわたつて畑、学校敷地内に遺物が散乱しているが、学校裏は雜木林として遺跡は乱されていない。こゝより馬形に石を敷き並べた簡單な炉が発見されたが、居住跡のプランは明でない。こゝは遺物が多く加賀利E相当の厚手から中期に及ぶ土器、土偶、大きな石臼、石棒、その他各種の石器が発見されている。遺物の大部分は原瀬分教場安達高等学校に保存されている。

(註) この項は安達高等学校考古學部の調査による。

d 【東原並に金山遺跡】 耶麻郡山都町

木幡村の東、山都町に通ずる道際の東方は一ノ戸川の溪谷が断崖となつてゐるが、この一帯は古くから知られた遺跡で明治初年の三條公金洋運蔵の節、石屨數個を發つた記録がある。昭和七年頃桑の植換中に敷石住居跡が完全露出、土器、石器が多量に発見されたが、遺跡は破壊されて記録にも残されていない。

敷石遺跡

敷石には二通りある。一は手頃な平石を単に一列に並べたものと、家の床に平石を一面に敷き並べた場合、すなわち敷石住居とがある。敷石住居は關東地方では縄文中期の南關東地方に限られた家の構造であるが、福島縣にも一、三の例が知られている。河沼郡川西村袋原、耶麻郡木幡村東原は前から知られてゐるが、最近では東白川郡敷川村埴の岡遺跡に一つの敷石住居が発見された。いづれも偶然発見であり、農夫により破壊されてプランの詳細は明でないが、発見当時の見学者の記憶を總合すると、中央に炉が切られ二メートル四方小型の角丸のプランのようであつた。

又平石を一例に並べた例は第五團の通り前記の埴の岡遺跡で、ほぼ南北にわたつて約三十個の平石が幅約八〇センチ、長さ約六メートルにわたつて水平に並列してゐたが、北端は戦時中壕を掘つた爲に破壊されて明でない。この敷石は長方形のかまど附近から起り、一個の土器が敷石の傍に斜に埋没してあり、敷石の中には石皿の破片が使用されてゐた。

ついでに記して置くが、安藝郡で土偶の周囲に石を並べた例があつたが、これは信仰に關係ある遺跡の例である。

2 貝塚

貝塚伝説については、頁で説明したが、わが福島縣には伝説としても、考古學上の價值からいつても著名な、文部省指定史跡小川貝塚がある。

貝塚といふのは大昔の人が食べた貝殻食物のくずや余り物、それに生活に使つた物で使用されなくなつた物を捨てたごみ捨て場といふので、貝殻がとくに人目につくほど残つてゐるので、この名があるが、常陸風土記や、奥羽報跡聞老誌に記されてゐる通りに、貝殻が所によつては二メートル以上もきつしり積つてゐる場合と、案内貝殻が浅かつたり土がかなりまじつてゐる所もある。これを純貝塚、混土貝塚といふ名で分けてゐる。普通の貝塚は三〇センチ内外が多い貝殻の厚さ、廣さ、堆積の状況の變つてゐるのは貝塚の出来次第の村落の數や人口、住んでゐた年數に關係がある。が、いして古い時代の貝塚は規模が小さく、新しくなるにつれて大きくなる傾向がある。貝殻は食物のかすの一つで一種の遺物であるが、この貝殻は雨水等にとって炭酸カルシウムを出すので、この成分によつて鰐類、鳥、魚の骨や角の類時には人骨がくまらなで残り、石器や土器も勿論交つてゐるので、この方面の調査には大事な遺跡である。

貝塚の調査で注意しなければならぬのはこの外に、この貝塚が何という貝であり、それは海水産か、淡水(ま水)のものであるかによつて、この貝塚がつくれた当時、近くに海があつたか、沼か川かであつたかを知り、昔の海が現在とどう變つてゐるかによつて、土地の隆起、沈降つまり海岸線の退歩進歩など、当時の地勢が考えられる重要なかぎとなる。また遺物によつて當時の生物の種類をしらべることが出来る。貝の種類の中にはアカガイに似た「ハイガイ」という二枚貝が成る時期の貝塚に多いが、この貝は暖い地方の海にすむもので、今では四國、九州から琉球地方など日本南部に繁殖してゐるのであるが、東北地方の貝塚からも沢山発掘されるので、この貝塚を作つた縄文式文化の団には日本の北より今までハイガイが繁殖してゐた事実がわかり、これによつて當時の氣候が、今よりも暖であつたことが知られる。これは二例であるが、このように貝塚は大事な先史時代の遺蹟であるが、海岸という分布の上から、地方的に制限される。

全國の貝塚の分布をみると、海濱の浪が荒く湾入に乏しい日本海沿岸は少く、海岸線の出入のある地方に多い。それは

波靜かで、岩石が多くない浅瀬のところは貝類が多く、魚等をとるに便利であるので、こうした海岸から程遠からぬ狭
 台地の上や斜面が生活に適しているので貝塚が分布している。全国的にみて貝塚の多いのは東京湾周辺から、常陸霞ヶ浦
 附近の南側伊勢湾附近特に渡妻桑島、備中兒島湾附近、九州有明湾附近と東北地方の松島湾、氣仙沼附近があげられる。
 わが福島縣は霞ヶ浦と、松島湾の中間にあつて、現在の海岸線は湾入に乏しいが、古代には小湾入が多かつたと見えて
 次(二七)ヶ所が貝塚とみられ、中には学界に著名なところも多い。

福島縣の貝塚地名表

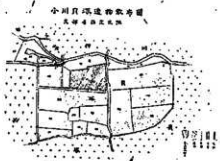
郡貝塚	石城郡勿来町大高字郡	馬目貝塚	葦野村馬目字原高谷
大畑貝塚	同 泉村下川字大畑	長友貝塚	大浦村長友字濟戸
馬玉貝塚	同 磐梯村馬玉字久保	羅山貝塚	双葉郡新山町羅山
四埜貝塚	同 同 西埜字金山	合ノ館貝塚	相馬郡藤村浦尻字台ノ前
合曹子貝塚	同 同 鹿島村御代字合曹子	女埜貝塚	同 同 字西向
若宮貝塚	同 同 若宮台	角部内貝塚	同 同 角部内字南台
調訪後貝塚	同 同 江名町調訪	龍谷地貝塚	同 同 龍谷地
南宮岡貝塚	同 同 小名浜町寺島	片草貝塚	同 同 小高町片草
大原貝塚	同 同 南宮岡字並石	村上貝塚	同 同 高平村上高平字村上
住吉貝塚	同 同 同	磯部村磯部	同 同 磯部村磯部
下大越貝塚(大崎坊)	同 同 字南作	三貫地貝塚	同 同 駒ヶ牧村高田字三貫地
片密貝塚	同 同 神谷村下片密字立坂	小川貝塚	同 同 新地村小川字原西

次に貝塚の代表的な例として小川貝塚と大畑貝塚を説明する。

a (小) 川 貝 塚

相馬郡新地村大字小川字原西

常磐線新地駅の西南二キロ半、国道の四方約四百米にある。阿武隈山脈の小丘腹の先端が太平洋岸に延びた海拔十二米
 の細長い舌状台地で、現在の太平洋海岸からは四方約二キロの地点で北縁は下の小川より三メートル、南縁は下の水田より
 約一米の地形で、地質は海成段丘、第三期水成泥板岩上に僅に沖積腐植土がある。大部分畑地で人家が二戸あり、いわ



ゆる貝塚層で、西南に伝説地手長明神社跡の森があり、円錐形の形よび鹿狼山は西
 方遠くそびえている。貝殻土器片の散布しているのは約一町八段に及び、大正十三年
 五月一日から八日まで福島縣は当時東京帝國大学人類学教室の小金井良精、松村睦爾
 博士及柴田常恵、八幡一郎、山内清男の諸氏に委嘱して発掘調査を行い、昭和五年二
 月二十八日文部省告示第四〇号をもって史跡として指定された。

七、貝層は一メートル内外で、出土品の量は頗る多い。土器は関東地方の加曾利B式に
 相當する後期の部乎(小川式又は新地式と命名され、室ヶ峰下層と亀ヶ岡の中間に位
 するもの)と、亀ヶ岡式及び彌生式の一部に須恵器も出土している。石製品は打製磨
 製石斧、石匕、石錐、石劍、石棒、凹石、石槍、石鏃、有孔石、紡錘石及び磨製刀
 子等、骨角器には鉾、釣針、浮袋口、弓筈、具輪、その他の裝飾品があり、学界に知
 られる珍貴なものも多く、この貝塚のもつ一特色として重要なものがある。(1)この外
 に土偶、土板が多く、又、牛、猪、鳥、魚の骨及び鹿角の外に人骨も発掘されている。貝類は、ハマグリ、シジミ、アサ
 リ、アマガイ、ツンボカイ、マテガイ、ホツキ、カキ、ドブカイ、タカラガイ、アワビ、ムシ、ホラカイ等十九種が検出
 された。(附附近の長清水の窟穴(第三回参照)からは土師器、フイゴの口及び金屑、襦織を入れた土器等が発見されてい

る。野城南部の貝塚の多くは縄文前期の色彩が濃厚であるが、この小川貝塚は隣村の駒ヶ嶺村三貫地貝塚と共に縄文式時代の後期より歴史時代に及んで形成されたものである。なお伝説の手長明神はもと鹿野山の頂にあつたのが谷地小屋に移り、その末社が史跡指定地内にある外、山上村大字山上の手長神社及び、石神村大字牛越の手長神社にもまた貝塚大人の伝説が語られ、手長様と稱して心願するものはお禮に年令の數程の貝殻を奉納するので境内には貝が多い。

(註) 1. 骨片については人類学雜誌第四十卷第九號八篇一應野城國小川貝塚発見の骨片論
2. 文部省発行史蹟調査報告第五號及び人類学雜誌三九、四、五、六號山内游男

b 【大 畑 貝 塚】 石城郡泉村大字下川字大畑

小名濱湾の西端、植田町から泉村へ通ずる劍崎台と、標高四〇メートル、海岸に沿つた丘陵にあり、總面積約二町歩、台地には遺物が散佈し、東端海岸に面した二十度程の傾斜面の一部が貝塚をなし、貝層は頂部十數坪が露出している。

貝類はイモガイ、モガイ、サザエ、エツチウバイ、ルイシ、カキ、ナミノコガイ、シヨ、ハマグリ等で、鰹骨、魚骨各種あつて中に家畜「犬」の骨片があつたのは注目すべきである。石器としては石鏃、磨製石斧、一尺三寸のスレート質の石劍、長さ九分強の綠色碧玉質の小型石斧が出土している。土器は厚手が多く中に彩文土器があり、類品として阿玉台、加竹利式に相当するものとして注目され、また破片には自在陶風に朱書したものがあつた。

本貝塚は一九二五年冬(大正十四年)藤が松村博士及び八橋一郎、甲野勇氏等に依頼して調査を行つてゐる。この貝塚にも伝説がある。貝塚の東方字柳作中の谷の台地に筋筋があるが、ここに貝塚の朝日夕日長者という者がいた。海岸に料理場を作つて多くの男女に貝料理をさせた。その貝殻が積つて塚になつたものであると物語つてゐる。又この大畑には一對の閃んだ畑があるが、これについては、昔タイヤクボウという巨人がいて、湯殿に塚をかけて大海で足を洗つたが、居直うらうとして雨ひざをついた所が凹んでしまつた。その時雨方のたもとに居た王砂を海中より拾つたものが二つの島となつた。今島の一つは崩尖したが他の一つは天然記念物鶴の棲息地として指定されている鳥島である。

この二つの伝説のうち前者は貝塚大人伝説が長者伝説に結びついており、後者は貝塚のある地面の凹溝を指しているが地層上の裂目で伝説「だいだらばう」の系統に属するが共にこの大畑貝塚に関係ある貝塚伝説として興味がある。

(註) 人類学雜誌四二ノ九、桂山貝塚発見の彩文土器(八橋一郎)

3 其の他の遺跡

泥炭層と濕性遺跡

植物質のものが湿地の中に長い間埋つて半は炭化した所に遺物があつてゐることがある。泥炭層とならなくとも、しじゆう土地が通つて水氣の絶えない湿地は遺物が最もよく保存している。亀ヶ岡土器の名の出た青森縣西津輕郡亀ヶ岡や、三戸郡の是川遺跡は、古くから知られているが、増玉羅の真福寺や奈良羅の唐古、靜岡縣の登呂もみな湿地遺跡のよい例である。

本縣には幾つかの湿地遺跡と考えられる例が報告されているが、また學術的な調査はなされてゐない。東白川郡飯川村に美しい石椀が水田の下から発見され、附近には家の柱と思はれる丸木が幾本か適當な間隔をおいて埋つてゐるといわれるが、これが事實なら平地住居か或は高床住居かもしれない。又猪苗代湖の湖水中から古代の葦が発見されたことが新編会津風土記に書いてあるが、その発見地は不明で、この土器が先史時代のものであるかどうかとも明ではない。長野縣の諏訪湖や、琵琶湖中から石椀などが発見されて、スイスのような湖上住居ではないかと問題にされたことがあつたが、その後の調査で湖岸の遺跡から湖中に入つたことが明になつた。

次に本縣の湿地遺跡の二例をあげて説明しよう。

a 【社川の泥炭遺跡】 東白川郡社川村一色

阿武隈川上流の一支流である社川流域は白河市の東方約十キロに發達した小平野であるが、メアングーして東流している大字一色字太夫内に亜炭層がある。昭和十七年太夫内の早稻田附近の亜炭採取中に土器の破片が地下二メートル余の深所から発見されたことがある。この附近は社川の沖積平原で、耕土を含めて約一メートルは腐植土、砂壤でその下に約一五センチ程の薄い砂礫層がある。これは第三次の社川氾濫による河床とみられ、その下に四五センチ程の小石を交えた黒褐色の砂土層、次は一五センチ程の第二次生成になる炭層がある。更にその下層に六〇センチ程の亜炭層があつて岩盤にいたる。遺物包含層は下部の二條の亜炭層にはさまれた砂岩状の間層で、無文の縄文土器破片に交つて炭化した胡桃が発見され、附近に焚火をしたらしい木炭もあつたといわれるが、戦時中であるために遺跡は破壊されてしまつた。

地下二メートル余の深所にあるのは一應疑問であるが、附近の地勢からみて、社川は數度にわたつて氾濫して、流域が変化しているので、あり得べき遺跡とも考えられるので、報告のまゝ紹介して將來の調査の參考とする。

(註) この遺跡は岡村堤の長尾寺住職社川村書記中野良高氏の報告による。

b 【道下の湿地遺跡】 福島市泉字道下

福島市の北部にある信夫山の西麓、東北本線と飯坂電車交錯点附近の小川に臨む低い水田帯がある。試掘によると地下二〇センチから一メートル余の砂礫層の間層は、また腐蝕しない芥などの温性植物が若干の砂礫に交つている形成途中の泥炭層で、これが遺物包含層である。上層は埋没状態が乱れているが、磨石石斧、石包丁、石錘、石じ等少量の石器と共に大洲式の精粗二種の土器片が多く出土し、最下部の砂層の上には平行條痕文のある鉢形の大きな晩期の縄文土器が発見された。水田下であり排水の設備をしないと調査不能であるので詳細は明でないが、クルミ、柿の実が発見されているので、他の湿地遺跡のように植物質の遺物が発見される可能性がある。又伊達郡堰木村東前にも水田下一メートル余に大洲式が発見された。

洞 穴 遺 跡

田村郡滝根村の旧鐘乳洞は大橋駅の泉穴といわれて、坂上田村麿に亡ぼされた「えぞ」のかしら忍路王の住んだ穴だといわれるが、この鐘乳洞には古代の人の住んだあとは何も発見されていない。若松市外の北会津郡門田村石峰には洞穴があつてえぞがすんでいたと記録されている。えぞは四道將軍大津命が征伐にきたので、大石を積み重ねて官軍を防いだが地中から火がもえて穴が崩れてえぞは皆死んでしまつた。その時焼崩れた石が今も山下五町ばかりに紫色の巨石が轉つているという。こうした話によそにも語られているが、えぞ穴、えぞ窟といわれるものは、横穴古墳や、横穴式古墳の石室である場合が多い。

今も古墳を古代の人が住んだ穴居跡だと誤つた考をもつ人々が、穴居人類、穴居時代の名を口にするが、進歩した新しい考古学では、これらの横穴は歴史時代の墓場である事を明にしている。ヨーロッパでは數十年という大昔から數万年前という時代に、洞穴を住居としていたとみえて、大きい洞穴の中から石器土器などの遺物や、壁圖が発見されている。わが國の先史時代というのは、ヨーロッパの洞穴生活していた時代にくらべるとずつと後である。時には洞穴をさがして住んでいた人々もあつたが、その例は少く一時的の便宜から住んだ特殊な場合のようである。富山縣や高知縣に例があり、東北では岩手縣東磐井郡、宮城縣氣仙郡にいくつかの例が報告されている。

洞穴遺跡として認められるのは、必ず穴の中から石器や土器、人骨、獸骨などが普通の遺物包含層のように埋没している。福島縣では石城郡勿來町の大字丸面字二浦溝の海岸にある洞穴の中から鹿の角と石棒が洞穴の砂の下六〇センチ程の

層から発見された例が報告されている外に、確かな洞穴遺跡はまた発見されていない。

遺物包含地と矢の根塚

遺物がいくらかの深さの土中に埋つているところを遺物包含地というが、他に遺物包含層、遺物散布地という名稱もある。遺物包含地のうち、矢の根塚、土器塚、かわらけ塚と特別の名で呼ばれているところがある。

【福島市瀬上】青柳神社の東北一キロ程水田と櫻桃畑の間に小さな塚がある。これは近世になつて開墾の際田畑にあつた石や土器片を積み集めた所で、こんな例は開墾地の遺跡では多くみられ、考古学上遺跡としての価値は少い。

【富田村の矢の根石塚】郡山市の西方、富田村の「ヒトネウチ」といわれた所であるが、附近は早くから知られた遺跡で多くの遺物を出し、特に石籠が多量に発見されたので、この名で呼ばれている。

【北山村の矢の根塚】喜多方町の東北大蘆川の北岸にあつて、標高二八〇メートル、川をへだてて堰の上の遺跡地があり、石質形状の美しい獨石石、石槍、石劍、石斧などを多く出すが、とくに石籠は、めづる、オパール、水晶、石英でつくつた精巧なものが多し。(1)

(註) 一、二版沿革「会津における石器時代」

古代の部落分布と地形

野山をかけて狩をし、河や海で魚をとり、自然にある植物をたべていた先史時代の人々が、一族とつれたつて村をつくるには、現在のような農業や商工業を営むのと異つて、最も生活のしやすい自然的条件のよい所を選んだという事は前章でも述べた。この場合水の得やすい、日当りのよい、風の少ないそして魚や狩場に程近い所といへば、しぜん山の麓の谷

口や、扇状地の末端、或は低い洪積層の丘のはしが利用される。しかしその当時の地形は現在とはすずいぶん異つてゐる所もあり、当時の氣候や、その地土地の事情によつては、必ずしも一般的な條件に合わない所にも村が作られてゐることもある。遺跡地の分布圖を作つてみると、古代の人々が地形をよく考え、その土地に合うように工夫して住んでゐたことがわかり、遺跡と地形との関係は極めて大切な問題であつた。海岸にある部落、低地の大川に近い遺跡、盆地にある遺跡、湖畔にある遺跡、丘陵にある遺跡、それからどうしてこんな不便な高所にすんだかと思われる高冷地の遺跡、さらに奥地の最近開かれたような山間部地にも先史時代の遺跡があることを例をあげて説明しよう。

1 海岸にある遺跡

藤原川流域の具塚分布

平市の南、石塚郡小名瀬町附近は、西に三崎、東に八崎の小半島にかこまれて小湾を形成し、その中央に藤原川及び支流の矢田川が南流して沖積平野を作つてゐる。その周辺の洪積台地末端には泉、渡辺、勢崎、湯本、鹿島、江名及び小名瀬の各町村に多くの先史遺物が分布している。その中には岡小名の台の上遺跡と鹿島の上矢田久保、飯田前、走熊に、遺物散布地がある外は、いづれも具塚である。具塚は海拔八メートル以上四〇メートルであつて、最も古い西郷具塚は現在の海岸より直線八キロの奥にある。

西郷貝塚 野崎村大字西郷半金山にある。阿武隈山系の湯敷の支脈が海岸に向つてのびた第三紀丘陵の海拔二〇メートルの小段丘の北斜面と南側の水蝕谷の二箇所に分布し、北側の散布地は五百平方メートル、只層一米、具種はイモカヒ、ツメタカヒ、モカヒ、イワチウバイ、アワビ、カキ、ハマグリ、ナミノカヒ、サザエ、ウチムラサキ、レイシナンコ、アサリ、ジャカヒ、ナガラシ、キセルカヒ、シジミ、スカヒ、トリコトビス屬等十九種が検出された。土器は岡崎式の前期縄文から後期に及ぶ。燒しり比較的堅く文様は渦巻文が特に目立ち、一見粗放のようで雄大な趣がみられる。



（第八區 薩原川流域）

海代貝塚 は支流矢田川が形

成した鹿島村地内の狭小な沖積原に臨む海抜二〇メートルの段丘の末端に約三百平方メートルにわたつて遺物散布し、貝塚三カ所、十個以内の竪穴跡が標高六、五メートルの高地にある。貝層は最深部一メートル五〇、散布面積五〇平方メートルで、貝種は西郷と同じく、土層は西郷に次ぎ中に彩文土層がある。

大畑貝塚、綱原貝塚 は小名浜湾の外角の丘陵上にあり、これにつぐ馬玉貝塚は標高五、五メートル、縄文中期より後期の遺物を出土している。これに対して寺脇貝塚、南宮岡貝塚共に標高四・五メートル）は後期より晩期にか

けでの貝塚であり、諏訪後貝塚、大原貝塚は彌生式土器及び土師器が出土し、貝種は五六種にすぎない。

以上の薩川流域の貝塚の分布をみると、最古の西郷貝塚は現在の海岸より八キロの奥地にあつて標高は一七・五メートルの丘陵にあり、最も新しい住吉、諏訪後及び大原貝塚は標高二・五メートル程の低い砂丘にあり、滝尻及び東下遺跡は貝塚を伴わない低地性の彌生式遺跡である。これによつて小名浜附近の海岸平野は、薩原川の堆積作用によつて沖積平野が拡大して現在となつたので、最古の西郷貝塚に古代人が住んでいた当時はこの附近まで太平洋が浸入して、南宮岡、馬玉の丘陵は海中に突出した半島であり、入江には魚介をとる古代人が生活していたことが想像される。

（註）この項は歴史跡調査員小此木忠七郎、八代義定氏の調査による。

2 盆地にある遺跡 (一)

阿武隈川下流にある福島市附近の遺跡

福島縣の北部、福島市を中心とする阿武隈川下流は、信達盆地（信達平野）といわれている。西に奥羽山脈、東に阿武隈山脈が縦走し、南北にその支脈がせまつて盆地をなして、中央を阿武隈川が貫流している。昔の信夫國で、後信夫郡と伊達郡に分けられたが、この地方では信達盆地はどろろみであつたと古くからいふ伝えられ、多くの地名伝説があるが、この盆地には先史時代から原史時代以降にかけて数多くの遺跡がある。人類出現以前は一時海底であり、海水産の魚介、動物の化石が多く産して地質学的には証明されているが、歴史時代に入つてからのどろろみ伝説は見直す必要がある。第八圖をみると遺跡の分布は山のもともが多いのは、先史時代の居住帯の一般的特徴で古い遺跡が分布している。

最も古い遺跡は、盆地の南方、信夫郡水原村字石内の泉籠寺遺には榎木上層式に相当する前期の遺跡があり、平田村の山間には前期末頃の土器や古式の土偶、玖状耳飾を用した比較的古い遺跡がある。福島市の西方、奥羽山脈の麓、荒井、佐

倉、水保、磨塚、磨坂、大笹生村附近には縄文中期の加曾利E式相當の厚手土器や後期のものが多い同じ傾向で、伊達郡藤田、大木戸、大枝村辺りにも比較的古い遺跡がある。阿武隈川の東岸渡利、岡山上原原、塚木、梁川辺りには末期のすぐれた遺跡が多くある。そして中央の阿武隈川（百河川の跡も含む）に近い低地や、その支流である松川、摺上川、広瀬川、町屋川の流域には、信天山附近、鎌田、湖上、余目、伊達崎、伊達崎、大田、塚木村等に末期から晩期にかけての新しい縄文遺跡と彌生式遺跡が見られる。中でも福島市泉の大沢式、町録田の彌生式、猪の土偶を出した飯坂町の穴田遺跡、大田金原田、伊達崎の下郡、梁川の町屋遺跡などは晩期及び彌生式遺跡として注目すべきところである。

これは狩獵の生活から、次の農業期に移つて生活の様式が變つて次第に低地に住むようになったことと物語つている。泉の道下遺跡のように福島市附近での低地である水田下さらに一メートルの地下に先

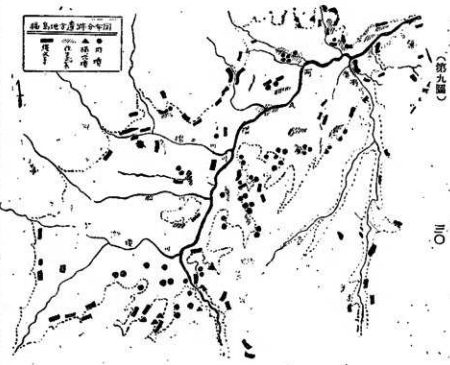
史遺跡があることより、また発見されない地方の水田帯や畑の底にはもつと多くの遺跡があることが想像されるから、信濃盆地のどうもみは事実上存在し得ないことになる。しかし中には最近まで耕地や住居にならない温地帯が残つていたことも事實であつた。

3 盆地にある遺跡(二)

— 会津盆地周辺の遺跡 —

会津盆地は地図である通り、ほぼ楕圓形で四周に山をめぐらしている。阿賀川は北によつてこれを横断し、大川、宮川はこれに対して南から縦断した形に注いでいる。会津という地名は、古事記に「相津」とあつて、四道將軍の大形命、武津川則命父子がこの地であつたのでその名があると説明しているが、言語学者は地形からみて、多くの河川が集つた意味であるとしている。先史時代の遺跡をみると最も低いのは海拔一七〇メートルの津尻遺跡（川西村）で、多くは二百メートルから三百メートルの山麓、丘陵に多いのは一般的要素であるが、特に多いのは耶麻郡下で、喜多方町の西北の岩月北山、熊倉、駒形村等の雄国山、高曾根山の麓野附近が多く、中でも駒形村常世字上ノ原には戸上層式相當の早期縄文遺跡がある。南部の一其、東山、門田、玉路及び西部の水井野、赤沢、新鶴、八幡附近は末期の縄文式から彌生式に及ぶものと重複した遺跡である。低地遺跡である金山、藤常は石器の少ない新しい縄文遺跡であり、津尻（川西）長内（喜多方駅構内）立石田（新鶴）は彌生式遺跡である。

低地に遺跡が少ないのは福島の道下遺跡の例のように、早く開発され、河川の氾濫により古く姿を消したのかもしれないが、先史時代文化が低地進出のはじめ頃に終りをつけて、次の古墳時代に変つたためとも考えられる。耶麻郡上三宮、加納、熱鹽の村々並に河沼郡の堂島、日橋村附近の遺跡が見当らないのは何か他に理由があるのかもしれない。龍崎氏は慶徳、加納、堂島、日橋方面は水に乏しく、或は西山一帯は古来から地祉が多いので生活の不安定の上、不便なため



(第九圖)

あろうと説明しているのは同意出来る。

(註) この稿は「新書第一金津に於ける石器時代」によると多し。

4 阿武隈川上流の遺跡

— 白河附近は関東色の濃い遺跡がある —

関東・東北を結ぶ古い交通路がどれであつたかは簡単に決定出来ない問題であるが、後世の中仙道の如く白河附近を通つたことは事実であり、関東色の濃い古代の遺跡が多いのもその一証であらう。先づ白河市内には加曾利五の中期土器を出す三十三間はじめ数ヶ所の遺跡があり、市の南方の白坂村、古岡村には土偶を出した内松の外に中期、後期の遺跡があり社川流域に接している。東方には球状耳飾を出した栃木の外に釜子、五箇、小野田、園平の各村から沢田、滑津と石川郡岩瀬郡に散見している。西方には那須山の麓である西郷村に数多くの遺跡があり、中には虫笠のキャン山に前期の槻木上層に類した古い遺跡、段の鼻には晩期の大洲Aの最も新しい縄文遺跡がある。市の北には小田川、中畑、懐夫の各村に続き中期の町屋東、晩期の桑ヶ原屋敷がある。湯本村に保は奥羽山脈中の小部落であるが、ここから宋銭「祥符通宝」を作出した遺跡があり、縄文文化の終末を知る重要な遺跡であるが、未だ学術的な調査が行われていないので承認しかねる。これから阿武隈川上流の遺跡には海式の最末期があるが、賑水程所謂亀ヶ岡式系が少く、中期後期には多分に関東縄文の傾向が強い。又白河地方で注目すべきは、市の北三キロ豆柄山にある天王山遺跡で、東北に入つた最古の農耕文化をもつ遺跡として今後の調査の結果が期待される。

(註) この項には湯沢次男、岩瀬二郎氏の報告になるものが多く、遺物は岡氏が所持している。

5 湖畔の遺跡

— 猪苗代湖周辺には魚撈をした遺跡がある —

猪苗代湖は湖海面海拔五一四メートル、面積一〇四方キロ、我が國第四位の大湖で、秀峯金津富士(磐梯山)の影をうつしている開立公園の勝景地である。

猪苗代湖の成因については、本日寺の縁起によると「大同元年(夜ニシテ)湖トナリ湖死スル者其數ヲ知ラザル也、今猪苗代湖也」とあり又、奥州金津領之内白砂郡湖水に相成候村數附」によると天長二年九月震動して四十九ヶ村が湖水となつたことが記し、一般に信じられているが、後世の偽書で地質学的にみて猪苗代湖の形成は古く、考古学的にもこの伝説的記録は信じられない。

猪苗代の北部周辺には先史遺跡が多い。磐梯神社境内から見福山の土津神託にかけて広い遺跡があり、澁谷に及んでいゝる。新篇金津風土記によると千里村段田及び稲良村の湖畔、湖中から土器が発見されたことが記されているが現在はまだない。舟島村村根の櫻川、西久保辺から石鏡が発見され、湖畔の蟹沢、長浜には縄文土器の破片と共に石斧石鏡があり、土鏡、石鏡が多く発見されるので、猪苗代湖にすむ魚を當時の人々が魚撈をした証拠である。(1)

湖岸南部で十六橋附近に彌生式の遺跡があり、漆村の小石濱、原、西田面、経沢、赤津村では上山田、堂ノ入、落合、楚立、福良村では長作、若宮、四十房、大栗生、大將地、片岸前、彌藤畑、馬入新田、大久保、伊福沢、和久、防戦、打越、稻荷下と数多くの遺跡があり、中には土偶十数個同時に発見された遺跡もある。月形村は舟津、鬼沼横沢のツブラ貝、館の笹屋、中野村では池田、三代村の御代に遺物が発見されている。更に湖岸には漆村、月形村の北部や月輪、千里辺にも発見される可能性がある。これら

猪苗代湖附近の先史時代遺跡分布図



の湖南の遺跡は、原川、常夏川、管川、津井川の細流や、湧泉地帯に分布しているが、いづれも海拔五四〇メートルの標高より若干高い所に分布しているのは注意すべきである。特に北部の壱沢遺跡より多くの土製石製の鏝が発見されていることは、先史時代に既に漁族がすんでいた猪苗代湖があつたことを示しているので、湖南の遺跡が五四〇メートルの線に期せずして存在しているのは、或は先史時代の猪苗代湖の汀線が更に上昇していたのではないかと想像が生ずる。しかしそれについては地質学的にまた若干の研究の余地があり、湖中、湖畔より土器が出たという新編風土記の記事もさらに吟味する必要がある。

(註) 一、池内儀八西尾島遺跡

二、この稿は須田良村長宗像彦壽氏の指示になることが多い

6 高冷地帯の遺跡

阿武隈高原の標高六百メートル以上の石城郡川前村にも遺跡が多い

阿武隈高原のうちには前記の東白川郡飯川村の段ノ岡遺跡のように標高五〇〇メートル以上の山上に遺跡があるのが多いが、石城郡川前村のように五四〇メートルより標高八百メートルの山岳重疊たる高冷地に、しかも一村内に四十に及ぶ多くの遺跡が分布している例は少かる。

▽大字小井 (猪戈、○鬼ヶ城山北麓、○幸丸)

▽大字上桶売 (○大平、○沢尻の経塚、○小午田、○板の橋)

▽大字下桶売 (○金古松、○矢田谷地の十三塚、○城木の御林、○殿林の川下、○石後前、○五味沢の桶売跡、○横地、○高橋の小屋の平、○下の平、○上屋敷、○塚崎平、○とまらさや沢、○菱平、○夕日、○鬼畑、

○志田名の伏平、○志田名の白平、○萩のクロヤボツケ、○吉岡田、○鬼ヶ城山南麓) 湖の沢

▽大字川前

○柳立、○外門の神樂山西麓、○五林、○宇根尻の館の山、○同そらの平、○中倉、○山下谷の台の畑

○榎木の藤橋、○五平

以上の箇所から土器が発見されるが、中でも大字川前の宇字根尻の館ノ山遺跡、鬼ヶ城山北麓、字志田名の白平遺跡からは尖底土器である田戸式系の早期繩文式土器が発見される。又海拔九六五メートルの矢大段山の八合目からも前期に屬する土器片が発見されている。大平遺跡等からは大洞式の巧妙な香爐形(竇貫三)、注口土器が出土し、石器時代勾玉、美しい独鈿石、石棒、土偶が発見され、更に夕日遺跡と神樂山麓、板の橋遺跡からは石包丁が出土しているのは注目すべきである。高城は、山岳重疊たる高冷地に早期の田戸式系をはじめ晩期の注口土器、石包丁と繩文式文化各期の遺物が発見されている。この村の研究を基準として阿武隈高原の諸遺跡の調査は新しい課題である。早くから長い長年月にわたつて特異な文化をもつている高冷な山村遺跡の特殊性を明にすることにより、古代人が山のソネ俤に交通していた先史時代文化の多面な性格を知るために重要な遺跡帯である。

(註) この遺跡は岡村孝平に住む日本人類学会員根本忠孝氏及び關原大学江智雄彌氏の調査による

7 丘陵にある遺跡

—— 小丘が起伏している二本松附近の遺跡 ——

地図を開くと二本松附近は信達平野と安積平野の中間にあつて丘陵重疊して複雑な地形をなしている。上古は阿武隈に屬し、後世は信太郎をさき安積郡の一部と合して安達郡がなされたのは紀元七八〇年頃で、従つて北安達の原史時代の遺跡は、杉田大平村附近以北にはみられない。大部分は安達太良山の山麓と同じく原野であつて農耕期に入るの他に比し

ておかれていたものであろう。所謂安堵ヶ原と云うのはこの状態であつたと思われる。しかし先史時代の文化はかなり長く築えていたと見えて多くの優れた遺跡がある。

分布をみると複雑した丘陵と川の配置から一定した分布圏をなさないで、單に生活に適合した小丘の末端、小河川辺に点々と分布し、阿武隈河畔に余り遺跡のみれないのは既に當時の阿武隈川の河床が深くなり、また沿岸は絶えずはらんの危険にさらされてきたためであろう。又この圏内には縄文式の各代の様式がみられるが、今までの調査では彌生式の遺跡がないのも一つは地理的な條件に左右されているとみてよい。

北部の信夫郡水原村には前期の古い遺跡があり、松川の下流の松川町、下川崎、上川崎村に後期の遺跡がある。油井村の金田には特殊な土偶を出した金田遺跡があり、油井川、拂川上流の鹽沢村上原、下小屋、田地岡には堀内式相当の新しい優れた遺跡がある。鑛川、六角川と羽石川流域には上流に永田、鎌磨石墓正法寺、安達高校の墓山があり、下流には野辺、八幡館の二所遺跡阿武隈川近く分布しているのは注目すべきである。原湖川、杉田川の上流には大畑、山崎、上ノ台があり、下流の南杉田の落合、熊中野、大沢谷地、分前、菅田、箕輪の宮路、薩摩堂等多く分布し、郡山台及び長春宮、鑛石附近が原史時代にも及ぶ複合遺跡で、大畑からは中期末、大沢からは後期の住居跡が発見された。

(註) この項は安達高等学校の考古学班の調査による

8 山間奥地にある遺跡

——奥会津の麓ヶ岳の麓にも先史遺跡がある——

奥会津というのは福島縣の西南隅の山岳地帯で、南会津及び大沼郡中西部をふくめての稱呼である。

國立公園尾瀬湖地方から流れた只見川は新海縣との境を流れて、伊北村から福島縣に入り、柳津町を通り阿賀川水流に合する。も一つは尾瀬の反対側、麓ヶ岳東側から出た物枝枝川は、中山峠方面から流れて猪川と大川川村で合して南会津西部の各村を貫流して、伊北村で只見川に合する。他の一つは中山峠の東側荒海山より発した大川は田島町を通り若松市附近を流れて阿賀川に注ぐ。これらの三つの川の流域を中心に僅かばかりの溪谷、沖積平野に村々が集つてゐる外は、山間奥地の小さな川べりに小部落が点在している。十一月初旬から雪が降り、五月一は積雪があり、産業が発達していないので、交通機関がなく、奥会津は文化にとり残された「山国」の代名詞のようにみられ、平家の落人や高倉官儀説等から、その開発は新しいものと思われて文化財の古いものは何もないように考えられていた。昭和二十四年六月と本年八月の二回にわたり筆者はこの地方の文化財調査を試みたが、以下はその時の調査報告書の抜き書きである。

奥会津の先史文化には二つの大きな系統があるように考えられる。一は柳津方面から只見をへて物枝枝川に添うたものと、他の一は田島の大川流域と同じものが中山峠を越した館岩村方面にのびたものがある。

一、【大川流域の遺跡】

若松市の南には東山村、門田村の根岸、黒岩、御山、大石村の上三寄に縄文末期から彌生式の遺跡がある。南会津に入ると江川村時代の鶴沼川流域である高しに大きな遺跡があり、楡原村では豊成字中井に縄文及び南御山式の彌生式文化があり支流龜川の上流安飯にも遺跡がある。田島には長野の向山に青銅器の模造を思わせる石銅を出した遺跡があり、中学校東の小段丘上には縄文中期後半の遺跡があり、小学校に遺物が保管されている。この遺跡は向山や豊成が彌生式の系統であるのに反して、一片も彌生式土器が発見されず、荒海村大字系原上ノ原と同じ系統である。上ノ原は荒海山の段丘に近い小川の両側にある大きな遺跡である。この地方の遺跡が日光街道に添うて山王峠から関東と連絡があるか否かは不明である。

二、【中山峠以西の遺跡】

前記の南会津東部の大川流域にある遺跡は、山王峠を越した北関東との関係が明でないので移入経路は明でないが、同

じ型式の影響を多分にみられる縄文土器はさらに中山山の両方にも分布している。中山山の麓、館岩川に面した大字八總



(第十一圖)

車器が発見されている。

宇居^{イイ}村地の二荒神社附近には約一町歩の傾斜した畑に遺物散布し、その奥である木地原^{キヂノハラ}の保城にも土器片が見られる。館岩川とその支流湯敷川の合流地である松戸原の学校うらには地下三〇センチ余に敷石遺跡があつたという包含層断面が露出傍にあつて、多くの遺物を出しこの附近中最大な遺跡である。ここから湯敷川を上つて湯の花温泉の上に岩間堂^{イワノマドウ}桔梗ヶ窪^{キツバガク}その他があり、一山越した大字木陵^{キノノ}の宮里附近には二三ヶ所の遺跡がある。なおこの方面で注意すべきは表面採集では晩期の大冢式を彌生式の土器が見られないが八總の分教場うらには底部一八メートルの方墳と方墳を中心とする散簡の小田墳群^{コノノ}があり、大字森戸からは須

三、【只見川、伊南川流域の遺跡】

a. 【宮下村附近】只見川が阿賀川本流を合する手喚村から高寺、新郷、片門と遺跡が分布し、それが柳津町では八坂野、飯谷があり、これを追跡すると宮下村には、楡原の小和瀬、川井の佐渡塚、宮ノ上、大谷木村などに優れた遺跡がある中でも全国に誇る雌雄の大土偶を出した小和瀬遺跡は只見川の左岸に位し、現河線より五〇メートルの所はかつて水害によつて、かくらんされたが地下約七十センチの厚い砂礫層の上部の腐植土層から厚手の土器及び大冢式など各種の石器が発見された。この系統は四方村の縄屋敷、麻生、沼沢村の中沢に連り、川口村の小栗山字堂平には第二段丘に中期特有の大きい立体的口縁部、把手のある縄文土器を出す遺跡があつて、その奥に玉梨の遺跡があり、さらに山間に入る傾向がある。なお本流域には本名村の寺岡、横田村の四十九院、大川、田代、滝沢に分布し、また昭和村の下中津川、大芦の矢ノ原という奥地に及んでいる。

b. 【只見伊南川合流地或附近】南会津郡に入つては伊北村大字湖生の秋の越遺跡がある。ここは窪沢と湖生部落の中間で、只見川が大きく蛇行する懸崖の上に薬師寺があり、背は山を負い前には川に臨む丘陵の末端で、恐らくチャンであつたらうと思われる。無数の石籠が多く石槍、石じ、石鏢などの石器を出している。

合流地の北辺、大字宮本の滝神社前には後期の縄文土器と共に、津及遺跡系に属する彌生式の漆が発見されて伊北小学校に保管されている。この遺跡は先史時代の末に屬し、有蓋器などの石器があるのみで、管玉が出土し、他にも古墳時代に属するものが出土しているが、古墳は勿論、須恵も土師器もまた発見されていない。

この遺跡に対して三角州の南岸、只見橋に近い館ノ川遺跡(朝日村)は渦巻の大きい耳を有する口縁部や半竹刺文もあるがまた彌生式の破片も採集される。石器も豊宮で独船石や小型の片刃石斧も出土し、石塚は無蓋が多い傾向である。又その対岸黒沢の曲尺淵は宮本と同じく古墳期の小玉、丸玉や石棒、独船石を出している。

c. 【伊南川流域遺跡】(1) 朝日村は遺跡が多い。館ノ川に近い大字橋戸の二荒神社境内は泉を中心に東南した山麓の小地城から燃糸文や、直線文、横目文があり、底部に銅代文があるものや、大洞式の土器や出し神堂に石棒を蔵する。唱時の金比羅神社附近は直線の沈線、渦巻文があり、又横目、波状、縞文の護手を出し、大洞式や彌生式土器も見られ、石環や打製の両頭石斧、獨石をだし石環は有草が多い。近くの長濱遺跡はこれに反して厚手の渦巻文の口縁部を出し、石神遺跡は前者に似て燃糸文もあるが大洞式を出す。その他この村には巖谷の天神山、田中からも遺物を出土している。

(2) 明和村の大字庄田は伊南川の南岸にある低地遺跡で、燃糸文、横目文が見られ、大洞や末期の護手を出し水田下に遺跡が発見された。附近の前沢口、対岸の小林の上原ヶ岡、坂田の戸石にも遺跡がある。巖の枝の二軒在家(俗稱見張小屋)の湧泉地の地下メートル三十センチの所から、細い隆起文の美しい唐草文をあらわした高杯形の完全なものが発見されている。(泉奉之助氏所蔵) 富田村の和泉字上ノ原にも遺跡があり、末期の縄文土器の外に銅生式土器の破片がみられる。

(3) 伊南村にも遺跡が多い。伊南村の西洋小巖の山神社麓には遺物散布地がある。その先の青柳字立字賀は大洞式の葦形土器が完全に近く発見され、石棒、横型石匕を伴出している。宮沢の熊野神社境内からも石環を出し、対岸の古町字多石からは磨製石斧、石棒、石冠が発見されている。又注目すべきは奥地の穂積開墾地は戦後入植した所であるが、この湧泉地の三〇センチの地下から沈線の縄文土器片が出土し、同時に古式の鐵製鍬先が出土している。

(註) この調査には朝日、明和、伊南各村の役場、小学校職員の手記によるものが多い。

四、【檜枝岐村の高冷地遺跡】

檜枝岐村は創作の出来ない著名な高冷地山村であるが、伊南川の上流である檜枝岐川をさかのぼった大字雄輝の大戸沢の、湧泉地からたて形の石匕が、荒海村木賊に通ずる遺分の見通からは土器片と石環が採取されている。それから更に登つた檜枝岐村本村は海拔九四〇メートルの高所にある泉源であるが、砂場附近の字ノ原には、沈線や出し神堂、直線文や牛竹刺文、突刺文が多く、横目文もあり、隆起文の全く見られない比較的古い海土器を多く出土する。本村より五キロの七入沢にも少量の土器片が出、巖岳の北麓ブナ平から石環が表面採集されている。更に只見川の上流、銀山平から一四キロの奥にある小沢開墾地の谷脇、バケモノ清水附近の地下三十センチの所から直線の沈線文を施した縄文土器片が発見され、かつ穂積開墾地と同じように鐵製の鍬先(里俗神代鍬という)が附近から発見されている。この開墾地はバケモノ清水という名稱があり古くから知られている所ではあるが、耕地として開墾されたのは昭和二十二年からで、今本村から十数戸の出小屋ができて開墾に従事している。

奥会津の先史遺跡は二つの系統があることは前述したが、中山峠以西の遺跡は口縁部が立体的な渦巻文をなしている中期土器で、瓜状文、突刺文の多い沈線、隆起文ともに存在しているが、中山以西には田島附近のように晩期の大洞式の系統が見られない。これに反して只見、伊南川流域は各種の文様のある護手で、大洞式に属するものや、彌生式土器も、古墳時代の玉類も出土している。檜枝岐村ノ原遺跡は、中山峠以西の文化が沈線を主とする土器を多く使った時期に移住したものと解するのは早計であらうか。しかも小沢開墾や穂積開墾地の如く戦後後入植開拓している密林地帯にすら土器が発見され、巖岳の山麓海拔二三〇〇メートルの高冷地にも石器を使つた人類が足跡を残している。小沢と穂積開墾地の土器と鐵鍬との関係は明ではないが、こうした奥地の山間僻地には既に鐵鍬を使用するようになってからもなお縄文土器を使つたのではないかと想定は、考古学者として強弁のきらいがあるであらうか。なおこの奥会津の先史遺跡は発掘による調査でなく、表面採集になつたものから焼納したのであるから、新資料の出現によつて決定すべきである。

(註) この調査には檜枝岐村長長敷之助氏の研究になるものが多い。

繩文式文化

遺物

昔の人々の生活に関係するもので、今日までのこつているのを遺物というが、実際には遺物と遺跡と區別するとは困難な場合がある。「昔の人の生活に関係がある」といつても路上の石や、森、丘、湖などの自然そのものではなく、心のはたらきが反映している物質であつて、時代をしめす。その時代の文化を反映するものでなければならぬ。考古学は遺跡や遺物を研究する學問であるから、遺物を研究するには、遺物を物質として研究するのではなく、その遺物を觀察して加工、成形、變化に注意して古代人の生活を明にする。つまり遺物の文化的な價値を研究するのが考古学目的である。一種類中の遺物を分類し、その様式を定め順序づけることも一つの研究法で、衣食住とか信仰、戦争というような生活様式に従つての分ける方法もあり、普通は人工的遺物と、自然的遺物とに分ける。先史時代の遺物の中、人工物には土器、石器、木器、骨角器、金属器などに分け、自然物としては食物に関係ある獣、鳥、魚の骨、植物の果実などがあげられる。

以下福島縣を中心とする東北地方の繩文式文化の遺物について説明する。

(一) 土器

先史時代の遺物が人々に注意されたのは徳川時代からであるが、その頃の人々は珍奇な石器のみに注意していた。明治以降考古学が新しい科学として生れても、地方の好事家は説つて石器を集めていて、土器の季節的な價値に氣のついた人は少かつた。

石にくらべて粘土では好きな形のものも比較的らくにつくられるし、文様もかけるので、作る人の好みも石器よりもよく表現される。しかし当時の人々の精神作用はそう複雑でなかつたので、一人の心は同時に一般的な共通した心だといつてもよく、今日程先史時代の人々の流行はそう目まぐるしく變らない上に、交通運輸が不便であつたので地方地方で生活のようすも變つてゐるが、文化の大勢は自ら一つの方向に向つて動いてゐる。文化の移り變りや、地方のようすを知るには、土器の研究は最もよい文化研究の目じるしで、地質学の標準化石のような役割をもつてゐる。

ヨーロッパでは今から七八千年前の人々が土器を使つてゐるが、わが國の先史時代の人々は、また日本に渡らない大陸のどこかにゐる時代に、石器も土器も使うことをおぼえていたのである。

1 土器の作り方

土器の作り方には次の四つの方法が考えられるが、實際の遺物をみると、表面はきれいにけずり取られて、文様がつけられてゐて明ではない。

(一) たくじり法 粘土を好きな形にこねあげてつくる。最も原始的でそれだけに大きいや變化に富んだものは作られる。

(二) 型ぬり法 植物などであらかじめ土器の型を作つて、それに粘土を塗つてやいたもの。

(三) 巻きあげ法 粘土を紐のようにひねり、それをぐるぐる重ねて巻き上げて土器の形をつくる。

(四) 輪積法 粘土でいくつもの輪をつくり、これをだんだん積み上げてつなぎ合わせる。

巻上げの時には、下の台板をぐるぐる廻すとつくりよい。はじめは手板の者が手で廻したのであるが、だだいに簡単な器械力で廻すようになったのを「ろくろ」といふ。今でも会津の本郷焼や、相馬焼では旧式な手廻しのろくろを使つて

いるところがある。先史時代の人がごろごろを使つたかは明でないが、彌生式土器にはもう見られる。

土器をつくる粘土は、住んでいた所の土を使つたのであろうが、古い土器は一般に石英や長石粒をふくみ、粗雑で中には早期、前期のものにはわざと植物の繊維を加え、中期の土器には雲母を交えたものもある。進歩してくると土を水こしたように良質の土を使っているが、同じ時代でも用途により、土地により粗末なるものと上等のものがある。

なまかわきの頃文様をつけ、乾燥させてから焼いたのであるが、特別なかまで焼いたのとは考えられない。今日までのところ、かまの遺跡が見られたことはないので、おそらく次の三つの方法がとられたものと考えられる。

a 野がま 野天で周りに薪を積んでやぐが、火力が四方に散るので、高い温度に昇らせることも出来ないし、また火が平等に廻らないので、土器をみると赤いところ黒いところが生ずる。

b 穴がま 土中に穴を掘つてその中で焼くので野がまよりも熱度を少し高めることができる。穴がまをさらに工夫して天井の半分を土でおおい、中央に煙出しをあけるように進歩したのは、彌生式の頃であるといわれる。

古墳時代になると須恵器は「上りがま」で焼かれ、その跡は窯内にも焼つて発見されている。先史時代の土器も、古墳時代になつても「うわ巻」は使つていない。実験した人の報告によると、縄文土器は六〇〇度から六五五度の温度でやかれたので、やき物としては最も原始的な質のものであつた。

2 土器の形

土器は主に食物飲物を入れるのに使つたのであろう。生活が複雑でない古い頃の食器は簡單なものであつたが、しだいに進歩してくると、食物を貯えておくもの、日常たべる食器、それに煮たき用の土器があらわれてくるようになった。それらの形の上からみると、最初のは底の尖つた深鉢で、ちようど砲彈のような形をしている。次には凹筒形に底をつけただよな土器が現われ、中頃になるとこの凹筒形の口が開いたり、胴がふくれたりして幾分形に変化が與えられたが、大部分のものは文の高い皿形を基としてゐる。時代が下るにつれて中頃に現われた形の変化が一段と劇的で、種々な形のが作られるようになった。例えば大けがまつて鉢、あん、皿などが突現し、胴が丸くふくらんで雲形になり、それに注ぎ口をつけて土瓶や急須が作られたりするようになった。底の形は最初のは尖底で、丸底の次に平底となり、平底になる前にそれが少し凹んだあげ底というものが作られ、高杯のように高台(脚ともいう)が出来たのはすつと後のことである。

土器の口のところは口縁と呼んでいる。普通のものは平縁と呼んでいるが、縄文土器には波状縁が最も多く行われてゐる。なお口縁に耳のように突き出している部分を「耳」とか「とつ手」といわれる。これには巧妙な彫刻があり、人間の顔であらわしたこともある。土器の形式は普通次のように分類してゐる。

- (一) かめ形土器 a 広口かめ形土器 b カリバー形土器
- (二) 壺形土器 c かめ形土器 d 凹筒形土器
- (三) 鉢形土器 a 平壺形土器 b 壺形土器
- (四) 鉢形土器 c 德利形土器 d 長くび壺形土器
- (五) 鉢形土器 a 浅鉢形土器 b 鉢形土器
- (六) 皿形土器 c 深鉢形土器
- (七) 皿形土器 a 椀四皿形土器 b 皿形土器
- (八) 注口土器 a 耳附注口土器 b 土瓶型注口土器
- (九) 注口土器 c 急須型注口土器 d 粗型注口土器
- (十) 注口土器 e 片口型注口土器



第十二圖 土器の形(上列は前期の尖底、凹筒式など。中列は中期のカリバー型等。下二列は後期)

(六) 片口型土器

(七) 台形土器

(八) 特異形土器

a 釣手形土器 b 香炉形土器 c 双口土器
これらの土器のうち、注口土器、香炉形土器は晩期で、縄文土器にのみみられる特殊の発達をとげたもので、最もすぐれたもののである。

3 土器の文様

【縄文と捺糸文】 先史時代の土器には縄か「むしろ」を押しつけたような文様が盛に使われているので、これを縄文と呼んでいる。縄文の発生は形を造っている時、粘土が急に乾くとひびが入るのを防ぐため、生乾きのものの表面を席で巻いたあとであるといわれていた。しかし山内清男氏等の研究によつて、粘土の表面の凸凹を均らし、内部に入れた繊維層と粘土とをびつたりつけるために、繊維の紐のように組んだものを土器の表面におしつけながら轉したあとであることが明にされた。縄のより方によつて色々の縄文が出来るので、一本の場合は單方向縄文、右よりと左よりの二本を合せると「羽状縄文」（複方向ともいう）が出来る。これを組み合せ、変化して美しい縄文となつたものである。

縄文に似たものに捺糸文と呼ぶのがある。捺糸を棒に巻きつけたものを土器面に縄文と同じように押しつけて廻轉すると、捺糸の巻きつけ方によつていろいろな面白い文様ができ、一定の間隔をおく平行の縄文や、網を押しつけたようなものはこの捺糸文である。

【押型文】 古い型式に多いが、鉛筆位の太さの円棒に彫刻を加えたもので、器面の凹凸をならして廻轉する廻轉捺型文やハイガイのような貝の背筋をつけ、貝殻の端で小さな波状のような突さし文を押しつけた「貝背文」、「貝殻突刺文」と

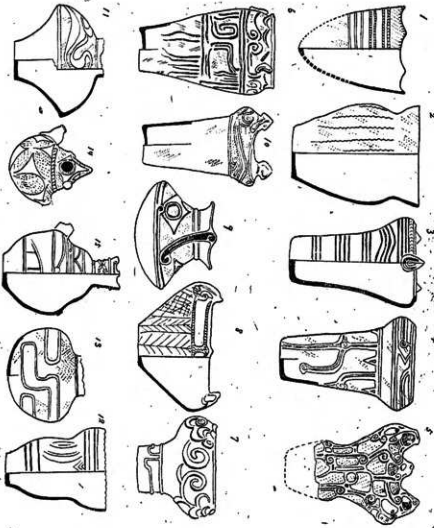
いわれる貝殻捺型文等がある。

【隆起線文と沈線文】 地文である縄文や捺糸文に加えて土器の面に粘土の紐をはりつけた隆起文と、土器面に線を彫つて現わした沈文との二天別の施文法があり、縄文の所々の面をすり消し（磨消文）文様の間や周囲を半肉彫にほるなど（彫刻文）の変化があり、文様をつける物によつて種々の種類があつて、これらが巧に交えて施されているが、施文は時代により繁装がある。

- 1 隆起文 a 紐状隆起線文
- b 口縁部隆起文
- 2 沈文 a 條線文 b 柵目文
- c 柵目文 d 格子文
- e 半竹割文 平行柵目文
- (瓜形文) 円文
- f 突刺文 連続瓜形文
- g 連珠文 連点文
- h 連文

【彩色などの装飾】 以上の施文の外に、口縁部や耳の中にも形や人面を現わした附加裝飾や、彫刻によつて文様をつけ、土器の面に彩色することがある。彩色した土器は従来から注意されているが、関東土器の中期からあらわれ、北では宮城縣の沼津貝塚、青森の亀ヶ岡に多い。本縣の例をみると小川貝塚や石城の大畑貝塚は後期の加舍利相當の土器から大洞式に多くみられる。耶麻郡岩月村入田付治里遺跡からは後期のかめ形縄文土器に朱を貯藏したのが発見され、又

①平形 ②三角 ③四角 ④五角 ⑤六角 ⑥七角 ⑦八角 ⑧九角 ⑨十角 ⑩十一角 ⑪十二角 ⑫十三角 ⑬十四角 ⑭十五角 ⑮十六角 ⑯十七角 ⑰十八角 ⑱十九角 ⑲二十角
 ①平形 ②三角 ③四角 ④五角 ⑤六角 ⑥七角 ⑦八角 ⑧九角 ⑨十角 ⑩十一角 ⑪十二角 ⑫十三角 ⑬十四角 ⑭十五角 ⑮十六角 ⑯十七角 ⑰十八角 ⑱十九角 ⑲二十角



河沼郡芥原郷にも、伊達郡川俣町にもこの例が報告されており、竹角器や白器の片等に彩色したものがあつた。彌生式になると特に彩色したものが多い。

文様の分類

- 主として沈文に多いが、文様の中には次の名でよばれる形式があるが、学者により稱え方が異なるものもある。
- 1 平行状文(直線文、工字状文、曲線文、同心円文)
 - 2 けさだすき文
 - 3 あや杉文
 - 4 鋸齒文(重ね鋸齒文、複線鋸齒文)
 - 5 菱形文
 - 6 三角かさね文
 - 7 結繩文
 - 8 絡線文
 - 9 波ノ文
 - 10 青海波文
 - 11 連環文(狐線文、追廻文、卍状文)
 - 12 渦卷文
 - 13 S字文
 - 14 X字文
 - 15 雲形文
 - 16 入組文(連続文)
 - 17 巴状文
 - 18 羊歯状文
 - 19 わらび手文
 - 20 隆起裝飾文

繩文土器の新舊

— 土器の編年の研究 —

繩文式土器は、北は千島、北海道から南は九州まで全日本から発見され、さらにいくらかの差異はあるが沖繩にも及ん

東日本における縄文式文化の變遷

地域	北海道 (渡島半島)	下北半島	奥羽北半	奥羽南半	関	東	新潟長野	縄文式文化
縄文式文化	(縄文式文化) 後北式 本輪西上層	浜尻屋 高野川 角 遼		大洞 A 大洞 C 大洞 B	野沢・女方・須和田 千		六野瀬 庄ノ埴	
晩		葛 沢 ハハ	亀ノ岡泥聚 新 城 藤 株 (倉 岡)	大洞 A 大洞 C 大洞 B	高野寺(安行) A 石神(安行) A 安行(安行) A 安行(安行) B			晩
後		荒 川 青柳町	嶋 沢 大沢下層	新 地 (倉 岡)	江原(合利) A 大 淵		上ノ段 内	後
中		花 冠	花 冠 上 玉 下 玉	大木 8 大木 7 大木 7	加曾利 E(新) 加曾利 E(旧) 阿玉合 勝 板 下小野・玉領合	尖 石		中
前		女 館	女 館 下 層	大木 6 大木 4 大木 2 大木 1	三坊合 上子 三坊合 下子 矢水 風 洞 浜 山	巖 場		前
早	石川野 トドホツケ 住吉町	ノツコロ ムシリ 吹切 物見合	洗堀田 常 武 館 山	宝 浜 茅 山 花積下層 野 子 田戸上層 田戸下層 田戸下層	大下菊 花輪合 井 草 井 鳥 稻荷合	串根名山 花輪合 井 草 井 鳥 稻荷合		早

(註 江坂輝嗣氏論文歴史評論5,6による)

五〇

ている。しかし近畿地方や四国、それに北九州地方は調査の不十分な理由もあるが、今までいくつも発見されないの縄文式文化の人々あまり沢山は住んでいなかったのかも知れない。また全国の分布状況を見ると、北海道地方を通じて北アジアの文化も入ってきているので、当時の日本文化の中心は少し東の方にかたよっていたとも考えられる。

縄文土器の研究は関東地方が最も盛で、わりあいによく研究されて縄文式文化の要諦を示す土器の編年的研究がすすめられている。しかし東北地方は東北大学が中心となつて宮城縣の調査が一時盛であつたが中国から絶えてしまつた。福島縣は地域が広く、いくつもの地域に分れているために調査がすすめられていないが、東北地方の型よりはむしろ北関東に近い文化で、今後の若い研究家によつて明にされるのも遠くないようである。

これまでの学者は厚手土器、薄手土器と青森縣の龜ヶ岡から発見される陸奥式(或は出奥式、奥州式ともいわれる)の三つに區別して新古の關係や文化の系統を考へていたが最近の學界では縄文式文化を大別して前期、中期、後期に分け、前期の上に早期(曙期、初期ともいう)と最後に晩期を加えて五時代とし、関東地方ではそれを各々土器によつて細分して二十余型式に分け、東北地方の縄文式土器は約三十の型式に分けて研究されている。これは東北地方の縄文式文化は遺跡分布の密度が濃厚で、遺物を含む層が深く、又土器形種の多様多様なものが発見されることにより、関東地方更に西日本の縄文式文化の時代よりも長かつたことを暗示しているといふことと、東北地方は日本海方面と、太平洋岸とは異つた型式が指摘できるし、北の津輕と南の岩代では別型式と見られるものもあるから型式数がぐんと増すのが実情である。

一、福島縣の古式縄文土器

五二

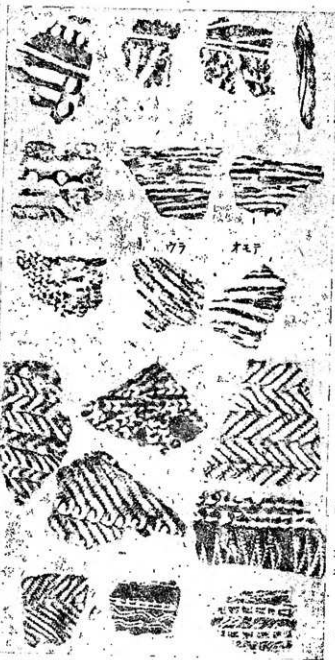
全国的にみて早期の縄文土器は、近年になつてようやくわかりかけてきたものであり、又當時の人類も少かつたらうし生活も簡單であつたので遺物の類も少く、第一時代が古いので遺物は深い所に包含されているので発見することが困難である。

第十四編

田戸式(館ノ山)

岡木上層(石台)

岡 女平



福島縣の古式縄文土器は、田戸式(館ノ山)の系統に属するが、田戸式といふのは福島県内の田戸川から発見された一群の土器を中心とする文化で、西に多い南方系の相模台式に対して東日本に多く発見される早期の縄文式文化である。

この系統は「楯目土器」といわれる大陸の北方に多い形式とにであり、北海道では釧路市吉町で発見され、住吉町式といわれ、又最近下北半島に田戸住吉式の重要な遺跡が発見され、長友江坂麻藤氏の手により本年八月尻屋岬の吹切沢遺跡が調査されている。田戸式は下層(一)、上層(三戸式)と三分されるが、田戸下層式は底部が平底の龜卵型深鉢で、口縁は平縁が主で文様は燃糸文、單斜行縄文が僅にみられ、アナタラ岬の貝による貝殻縄文、竹へら状工具の沈線文、半刺竹文がみられる。下層式になると田底が現われ、口縁部には波状や、疣状小突起の把手がみられる。縄文はみられない代りに貝殻縄文、貝殻縦縄文が普通となり、例によつて竹へら状工具でやや太い平行沈線文、楯目文が網状、格子目状、縞畫状に施される。土質は粗雑で、多量の砂をふくみ、時に纖維を含むものがある。

江坂氏の調査ではこの田戸式に相当するのは南奥州では常世、館ノ山式と命名している。常世式は本縣の耶麻郡駒形村の常世遺跡から発見されたもの、館ノ山式は石城郡川前村大字小白井の字字根尻の館ノ山遺跡から発見されたもので、同村には他に東ヶ城山北麓、宇志田名の白平遺跡等に前期の遺物が出土している。

この田戸式の石器は早期の特徴である礫核石器や局部磨製石斧、扁円形の打製石斧の外に無茎石鏃、横型石匕等がある南奥では常世、館ノ山式の次に規木下層式といわれる円筒式の早期縄文が最も多く、規木上層に位する素山、室渚式が前期初頭に位し、大木式となつて中期に接続する。これらの前期遺跡は双葉郡木戸村大字上小塩字女平に織維土器、信夫郡水原村字石内、上台、会津では耶麻郡にも発見されているので、この数年のうちには更に大量の古式の縄文が発見されることであろう。

二、晩期の縄文土器

古式縄文に対しては縄文土器の終末であり、彌生式直前の最も新しい縄文土器の型式について説明する。晩期の土器は関東では安行式（あんぎょうしき）というが、東北地方では亀ヶ岡式、大洞式（おほほらぎしき）といわれている。安行式というのは埼玉縣安行村の猿貝塚から出た一群の土器で、安行式の中頃から東北地方に特に盛んに使われた土器が青森縣館岡村の亀ヶ岡の泥炭遺跡から発見されている。これが縄文土器のうち最も豊かなもので、土器の製作は精巧で土質もよく、形も多様に変化にとんでいる。注口の付いたもの香炉型土器、台のついた土器、皿形、壺形等特によく発達している。地の文は細密な土器は細い縄文で、磨消文といわれる縄文のつけた部分とをぎへらしてよくみがき、つやを出し口縁部には瘤状小突起、透孔彩色が施され、隆起文は少く好んで唐草文やS字文の入組文をつけて、その周りをへらで磨りくぼめている。亀ヶ岡式土器にはこの外に文様の少い粗末な型式もある。別に陸奥式、奥羽式、出奥式とも呼ばれる。学者によつてこの型式は六或は七に細別されている。それは宮城縣氣仙郡赤崎村の大洞貝塚調査によつて明になつたもので、学界では大洞式と呼ばれ、古い方から大洞B、C、Aの順に三型式に分けられ、更に最下限に大洞Aを考ふる学者がある。

安行式は亀ヶ岡式とはかなり異なつてゐる型式であるが、その中に亀ヶ岡式の土器が混つてゐるのは、安行式に東北地方で発達した亀ヶ岡式土器が輸入され、又はまねて作つたものとみられる。関東の亀ヶ岡式の土器は東北の亀ヶ岡式の最初から中頃までさつと前半のものに相当してゐる。つまり東北の亀ヶ岡式と関東の安行式とは年代的に同じ時期であつたことを証明してゐる。この考え方から他の地方の晩期土器をしらべると中部地方では静岡縣の保美、吉胡貝塚は亀ヶ岡式の前半の影響をうけ、長野の佐野、富山の高岡、近畿地方では大阪府の日下貝塚、中国地方の岡山津雲貝塚もまた同じ時期と推定されるという。亀ヶ岡式土器の発達は東北地方で行われたのちがいない。関東以西の亀ヶ岡式土器は東



第十四圖 彌生土器（常盤）新米 三川原 新米 新米

北地方の亀ヶ岡式の文化地帯から伝わったか又はまねをしたものと考えられる。つまりこれはほぼ同じ時代に住民があつて直接又は間接の接触があつたことになる。即ち東北で亀ヶ岡式前半の時代には近畿地方まで確実に縄文式の時代であつた。その後半の時代にもおそらく中部地方は縄文式で、彌生式の時代ではなかつた。

東北地方では亀ヶ岡式のすぐ後に彌生式系の石器を伴ひ、穀物として稻を栽培していることが明になつた。それは土器の底に板の跡がはつきりついてきたからである。これは接陸式といわれた東北地方の古い彌生式である。東北地方の縄文式土器は大洞式、亀ヶ岡式と異なつた。同じことは中部地方でもいわれる。即ち前に記した亀ヶ岡式の影響を受けた縄文晩期のすぐ後に彌生式土器となつたらしい。この点から考えれば縄文式の終りは地方によつて大きな年代の差はなかつたことが考えられる。保美、吉川貝塚の例からみると静岡縣と東北の差は僅かに土器の一型式、近畿地方と東北の間にも二三型の差しかみとめられない。(1)

これまでの日本の古代研究には「文化は西から」という考が深く先入主になつてきた。縄文式は関西では早く彌生式におきかえられ東方ではいつまでも長く残つていたように考へられてきた。それは岩手縣大原町の先史遺跡から宋代の「龜ヶ岡式」という古銭が発見されたので、平泉を中心に藤原三代の文化が華を咲かせていた時、一山越した奥地にはなお石器時代の文化が営まれていたといわれる。(2)近時岩手縣湯木村「二俣藩藩の末期縄文遺跡から群行通宝が表面採集されている。亀ヶ岡式の泥炭遺跡である青森縣の是川遺跡からは木製品、漆器製品など数多く発見されたが、これは今をさる數百年前のものだという一部の学者があつたが、同時に発見された亀ヶ岡式の前半の土器と同じものが発見された大原町の日下貝塚の年代は「林何時頃」と説明したらよいものであるか。(3)縄文土器の最後は亀ヶ岡式土器(大洞式)をなかにだし、これから各地の末期の縄文土器を研究することによつて彌生式に移つた時代がわかり、彌生式文化のくわしい調査によつて古墳時代に入つたことが明にされて歴史時代と結びつけば、縄文式土器がどんなに古いかが明にされるのであるが土地によつては歴史時代まで縄文土器を使つてきたことも考えられて、縄文文化下限は大きな問題である。

福島縣の末期の縄文土器の研究は今ようやくはじめられたばかりであるが、亀ヶ岡式は全縣下にほぼ分布している。会津では盆地の東部の雄国山麓は比較的少く阿賀川を下るに従つてこの形式の出土量が増し、更に奥会津にも入つてくるので、この分布を追跡し、或は史跡指定地小川貝塚を再検討し、福島市東の湯地遺跡の研究を進め、或は阿武隈高原の川前村の早期と晩期の遺跡が接近している所の關係が明にされた場合、本縣の末期縄文式文化が明にされ、同時に古式縄文の研究が平行してすゝめば、福島縣・南奥の縄文土器の偏年的研究がうち建てられるのである。

(註) 1 山内清男著『日本遠古文化』

2 喜田貞吉氏遺稿及びアイエと縄文式石器時代人(文化四ノ一所載)

3 前記山内清男氏説

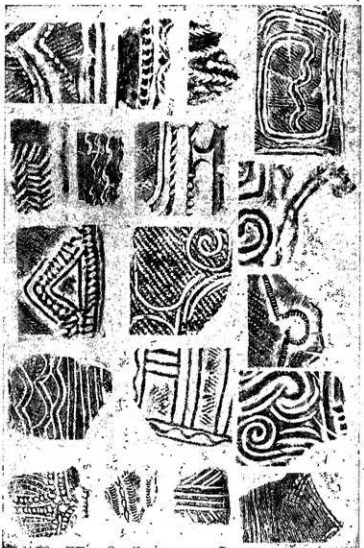
三、中期、後期の土器

早期の田戸式系と晩期の大洞式との中間は時間にして相当の狭い時期であり、地方的に多くの細別があるので、各期のくわしい形式をのべることは省略するが、東北の北半では前期中期にかけて円筒式土器というのが、上下二層に分けて數型式に分けられ、大木式と名づけられている。

円筒式というのは最初宮城縣相内貝塚で発見された繊維土器である。繊維土器というのは土器の壁の中にたくさんの植物の繊維を刺込んだものが粘土にまぜて焼かれていますので建物の壁土に藁片が刻み込まれると同じ理由から、縄文土器の古い形式である。胎土の繊維が表面に出ないようにし、よく粘土を固め表面を平にするために或る工夫を用いてやる必要がある。それが貝塚條紋文であり、丸い棒を轉した廻轉押型文等で縄文の発生した原因であつた。いすれにしても繊維を

混入した土器はたいして丈夫な円筒状をなし、器形が極めて簡單で、製作を注意してみると短い筒形のタガを二つ三つ別につくり、積み重ねて接合し、底はその筒へ粘土の円板をつけたもので、全体の輪廓には美しい緑の流れはみられない。文様は器面に變化のある單方向線文が施され、上方口縁部に沿つて細い紐糸をおした直線文、縞糸の並行線、特殊な繩文を横に走らせたような素材懸然とした文様帯がある。宮城縣の舟入島遺跡からはこの繩維をふくんだ土器層の上に、同じ円筒形であるが繩維の含まない厚手の土器が窺見されたが、これを円筒上層式と名付けられている。下層式は東北地方南半では大木Ⅰ・大木Ⅱを前期として関東の茅山式に続く関山、黒濱、諸磯式平行の時代と考へられているが、上層式は大木ⅦA・大木ⅦBで関東の下小野、五領ヶ台、勝坂等の阿玉台相當の中期前半とみられる。形は同じく円筒形であるが幾分上開きの傾向があり、時には胸が丸く張り出したものもある。一般に大尊厚手作りで全体の感じは前期の下層式になるが繩維がなくなり、色も明るく赤味を帯びて口縁部には山形の隆起が四個あるのが普通でその下に横にくまびつて隆線による單純な文様帯があり、半割竹文や隆起細線による曲線文もみられる。下部には比較的單純な繩文が施されている。福島縣にはこれに屬する中期土器が最近相澤例発見されているが、中でも会津の耶麻郡西部、信夫郡水原村及び伊達郡大木戸、石城郡の西郷貝塚、少し下つて相馬郡福浦村西白河郡西郷村カンバ山からもこの系統が出土している。この期にはどうしたわけか雲母が多くふくまれているのがあり、耶麻郡胸形村竹屋、信夫郡平田村菅母遺跡にその例がある。

中期の後半は大木ⅧA・大木ⅧBといわれ、関東の加曾利Eや姥山式に當り、阿玉台、勝坂式に多く現われた口縁部に渦巻繩文の大きい耳を立体的につけ、隆起文が施され、文様が複雑となり、器形も變化にとんでくる。この形式に屬する中期末の土器は縣内には数多くみられる。大沼郡原瀬、耶麻郡磐梯村大寺、同郡木幡村東原、白河市三十三間、西白河郡古園村内松、上ノ原、西郷村各地中、同追原、信夫村町屋東、安積郡富久山村福原、安達郡杉田村長者宮、同郡佐下村原瀬、信夫郡平田村菅母、同庭坂村矢細工、石城郡勿來町の郡貝塚、同郡夏井村下大盛貝塚は皆この期の代表的な遺跡で、



第十六圖 繩文土器 中期一 米 相 拓 本

中でも下大盛貝塚は加曾利Eの古い型と勝坂式に對比される特殊な形式で、江坂郡彌氏は「下大盛式」と命名してもよい

かと考えるといわれ、阿玉台式も若干出土し、石器、骨角器もよいものを出している。この期には一般的傾向として有蓋石椁が混じはじめ分銅型打釘石椁があらわれ、概して石器は精巧となり、大きい石棒や石皿が普及してくる。

中期の終り頃から敷石住居が現われ、後期のいわゆる関東東洋式併行のもの、は、かめ形鉢形の外に楕形、土甕型、注口台付土器等多くの複雑な形をなして沈黙文多く磨光文が見られ、隆起文が影をひそめ、底部には強靱な枝條であるだアンペラ様の網代文が多くみられ、又前期中期になかった蓋が現われるのは注意すべきである。石器はいよいよ精巧となり石劍、獨結石が生じ、耳かざり、首かざり等の装身具や骨角器が多くみられるようになる。この期の型式は各地に数多く発見されるが、小川貝塚の類の内、加曾利C式に類するものは「新増式」と命名されている。

福島縣には先史遺跡が多い。しかも地域的に多くのプロッタから成つてるので縄文土器の編年的研究は困難であるが関東地方と東北地方の中間に位置しているので、南奥の縄文式文化が明かにされることは、わが國の古代文化を研究する上に極めて大きい貢献することになる。

(二) 土 製 品

1 土 偶

土偶ドールというのは土の成形で、古墳時代の埴輪ハニワ土偶ドールとまごいる人があるが、先史時代の土偶は大きさは三十センチ以下で小さいのは十センチほどのものもあり、中には人形と思われないのがあるがふくめて土偶とよんでいる。土偶は近畿地方より西にはほとんど発見されない。東日本でも縄文式文化の前期土器に伴つて発見されたのが最も古く、多くは中期の末頃からつくられたようで、後期になると急に多くなり、彌生式文化時代になると姿を消してしまう。土偶には男も女

もあり、また両性いづれとも明でないのや、同じ系統に土偶、石版、動物土偶があつて何のために使つたかは明にされていない。しかし一番古い花輪台式土器や青森の中居貝塚から前期末の円筒下層式に關するものは頭や手が十分に表現されていなのに乳房や陰部を作つてゐるのが一番決定的な解決の鍵で、又妊娠してゐるようお腹のよくらんでいるのが多いのは幾群の豊さを祈る女神像とみられる。福島縣からも古い形式の土偶が昭和二十五年夏発見された。信夫郡平田村大字山田字音坊は縄文中期後半の遺跡であるが、ここから出土した土偶の數箇はいづれも頭部と腕、脚がない個平な土偶で頭部と思はれる所は頂上が水平にきられて、勿論目鼻口は表現されないで二箇の下げ紐を通す穴があるばかりで腕の部は僅に突起となつてゐる。脚は全くない座像で、頭部の如く一直線にきられて底部のように広がり、たておくことが出来る。そして乳房を高く盛り、下腹部がよくらんでいて、前後並に個平な側面に沈文が施してあるので、土偶よりはむしろ土版に近いものかも知れないが、乳と下腹部のみを表現して、物の上に立て又は下げるようになつてゐるのは土偶の性質を知る上に重要な手がかりとなる。ついでに記すが同時発見された土器の把手に頭は同様一直線になつてゐるが、竊に似た腹の面をした「眼面把手」とも名づけるものが発見されてゐるので、前記の土偶と比較研究するによい。又那山市附近の縄文遺跡で土偶を中心に向く石が並べてあつたが、この例は長野の矢石遺跡にもあつて、土偶が何か宗教的なものであることを証した重要なことであつた。時代が下ると土偶はいろいろに変化してくるが、第十七箇の土偶は会津の河沼郡上野尻から発見されたもので、原史時代の埴輪人物の如く中空に作られ、顔は簡略化され、眼口は表現されなく、亀ヶ岡又はそれと接触した彌生式にみられる不規則な條痕文があり、体部には晩期縄文の磨光沈文が施され、全身に朱を塗つた痕がみられる。このように中空で比較的大きいものは神奈川、長野、山梨でも発見され、特に神奈川縣の足柄上郡山田村の土偶の空洞の中に子供の骨が入つていたので、早産か早生の子供の骨壺とみられ、何か特別に埋葬されたものではないかとみられ、時代もこの式の土偶は接盤式の文化に屬することが明になつた。東北地方の土偶の編年研究には重要な手がかり

りとなるものである。(1)



第十七圖 土 偶
①信夫郡曹坊(破片による想定図) ②双葉郡百間沢
③太平洋系相馬郡小川 ④中間型伊達郡大核村 ⑤日
本海系河沼郡かまど原 ⑥ 中空につくられた特殊な
土偶(末期) 河沼郡上野尻

福島縣からはこれまで沢山の土偶が発見されて、縣の史跡名勝天然記念物報告書第三輯には「福島縣発見石器時代土偶圖版」の寫真集が出されて、中には學果に知られたものがある。

【土偶の形式分類】學者によつて色々に分けてゐるが大体的な上に考えられてゐる。

- 1 遮光器土偶 (しやうこうじゆど偶)
- 2 みみすく土偶
- 3 山形土偶

- 4 寫実的な土偶
- 5 厚手式土偶
- 6 陸奥式土偶 (A、B)

分布地域、形式などから分けられてゐるのであるが、前記報告書の編者小此木忠七郎氏は福島縣の土偶について

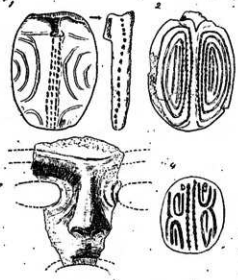
に分類してゐるが、學界ではとり上げられなかつたが、福島縣としてみる場合この分類は一應参考にするに便利である。太平洋型といふのは山形土偶に屬し立体的で、寫実風なところがあるが、どうしたものか頭部が粗大で腰部に直線と無齒文のあるのが特徴で、太平洋岸と中通り地方の北部に多く分布してゐる。日本海系といふのは、遮光器土偶の系統に含められ、陸奥式土偶に當つてゐるが、目がねの様なものをつけたのは少く、兩腕はワ冠状で足はかにかたのようになり、渦卷文や亀ヶ岡式に見るような入組文があり、全体的に扁平である。この型は南奥各地に分布してゐるか海岸帯は少い中間型といふのは兩者の各々を具へてゐるが、扁平で山形土偶に文様が多くなり、腹部の中央が縦一線状に隆起してゐるのが特に目につく。陸奥式Bに相當するもので類品は多く発見される。みみすく型は東北にはあまり見られない。

【石偶】へんな名であり、土偶とは系統が別であるが、口絵寫眞六上圖のような全長二十センチ、三カ月形の立休で一方に人面、他方に四つの田形が石棒頭部のように彫刻されたものが石城郡入道野村冷水から発見されてゐる。同地は石刷土冠、石斧などが出土してゐるが、第三期頁岩の磨製で手法から中期頃のものとされる。類品は付嶺より発見されてゐる。(2)

(註) 1 藤森榮一著「スグイル文庫」石器と土器の語へ、2 信濃考古学会誌二ノ五六

2、土版と土面

平たい板状で、だ円形又は長方形でその表裏両面に特有な批線文がある小形の土製品をいう。多くは中央に一線があつた位の左右に相対的な渦巻文や流水文があり、中央の一線は一端を小孔にとどめている。中には土偶に似た目、口、鼻がつけられ、またその退化したものが圖案化されているので、土版は人の形がだんだんと変つていつたものと考えられ、土版と同じ性質のものであるといわれる。同じ物で石でつくつたものがあり石版というが東北地方特に日本海岸に多い。土面とよばれるものがある。人の顔を現わした土製品で発見例は少ない。東北地方に限られ、土版又はだ円形の中高な直径十センチから二十センチ程の土版の表面に、陸奥式土偶に似た顔面があり、他に雲形文などが施されている。福島市向録田から発見された断片は寫實的で口と相対する孔があいている。

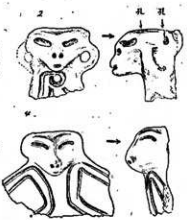


第十八圖 土版
 ①石城郡小名浜町富岡 ②北会津郡南御山
 ③土面福島市天神平 ④大沼郡新島村佐賀瀬川

土面とよばれるものがある。人の顔を現わした土製品で発見例は少ない。東北地方に限られ、土版又はだ円形の中高な直径十センチから二十センチ程の土版の表面に、陸奥式土偶に似た顔面があり、他に雲形文などが施されている。福島市向録田から発見された断片は寫實的で口と相対する孔があいている。

3、土 獸

動物土偶ともいう。種類は猪、熊が多く、他に猿、大、鳥と思われのがあつた。一般に小型である。河沼郡八幡村塔寺から猪が出土している。(1)は信夫郡飯坂町穴田からも猪が発見されている。この遺跡は石器が少くり連続した通点文がある。鼻部先端は猪鬃を思わせる二つの鼻孔があり、脚は表徴的で短い、極めて形式化されているが全体として猪の特徴をよく表現している。前記の八幡村から出土したと伝える馬の頭部殘缺があるが、遺跡、出土状態を再調する必要がある。南会津郡朝日村鳴崎からは猿と思われ動物土偶の頭部が発見されているが、面に三つの小穴があり、下緒か或は毛髪を生やしたのかもしれない。信夫郡音母からは土器のつつ手に朝日村の猪とよく似ている動物が彫刻されている。このように土器の耳に人面をつけるのが中期土器に多い。これらの土偶土器等はいずれも宗教的な所産とみられるので詳細は宗教の項でべる。



第十九圖 動物土偶
 ①猪土偶 信夫郡飯坂町小川字穴田 ②猿土偶 南会津郡朝日村 信夫郡音母
 ③河沼郡八幡村 ④猪?の顔面把手

4、その他の土製品
 土製品としてはこの外に土製装身具、紡錘車といわれる球状の土製品や土鏝等があるが別項で説明する。

(附) 口鏡瓦葺(三)の 片口付爐通用土器

河沼郡川西村かまど版の河川工事の中地西四メートルの所から写真のようなものが二箇発見された。高さ七、八センチで胴部がふくらみ、内部に数十箇の小孔のある風機のものがありつけられてあり、單方向通気がある。割の内式併行のものであるが、木の管等をつぶしてその汁を漉したものと考えられる。(一)は東北大学に、他は一飯沼氏が所有している。

(三) 石器

石器は「石器時代」とよばれるほど先史時代は土器とともにこの時代の道具であり、武器であつた。先史時代の人が一番最初に使つた道具は石器の外に木器もあつたろうが、これらは残るはずがなく何万年も前のものが現在もなお土中に包含されているので、石器はそれだけ早くから人々に注意されていた。

【打製と磨製】石器の分類には、大きく分けて用い方と作り方から分類され、さらに形の上から細分される。物が切れつきまじうに鋭い刃のあるものは武器としても、日常の道具としても必要なことである。「石ころ」を打ちかいて刃をつけたものを打製という。これには大きくがいたものと、英語の「フレイク」という小さくはがしたものと、又石屋のように面を叩いて物の形をつくり上げたものがある。これに対してと石のようなもので表面をなめらかにすべりへらして物の形にしたものを磨製石器という。一部だけ磨いて刃をつけたものは局部磨製という。

【石器の巧拙と材料】分業化していない縄文式文化時代には土器も石器も各自がそれぞれ作つたものであろうが、個人的な巧拙、好みがあり、また土地によつて出来の精粗がみられる。一般的にみて古い時代のは簡單な形で稚拙である。那覇郡北山村松音寺の遺跡は石器はすべて無蓋の遺式で石質も余り考えていないようであり、製作も無器用で数も少く、その代り石じの発見が多い。それに反して僅か離れた大字土合の矢の根塚は石器は精巧で美しい石質を使い、他に石斧、獨鈷石、槍、鏃とともに立派なものを共存しているのは時代の差と考えられる。

土器と同じく、石器も手近のもので作つたように想像されるが、調べてみると

そうではなく、石鏃、槍、鏃等は流紋岩、石英、玉髓、オパール、水晶、蛋白石、黒曜石、安山岩などの硬質の比較的美しいもので鋭く作られ、同じ打製でも石じや打製石斧等の日常用品は流紋岩を主とし隕岩、安山岩等で作られ美しい石は使われていない。磨製石器のうち石斧や細い石棒は安山岩、隕岩、玄武岩、スレート、流紋岩で、砂岩も稀にみられる。石斧でも小形のものには特に美しい石質で作られているのは注意すべきである。日常用品の石皿、たたまき石、凹石、大きい石棒などは石英粗面岩、砂岩、凝灰岩等であり、石彫丁はすべてスレート製であるのは用途の上からであらう。

石器の中にはその附近に産しないものが遠隔地から運ばれてくるものもある。黒曜石、めのう、玄武石、綠泥片岩、スレートの如きものはそのよい例で、特に黒曜石は内地では長野縣和井村の星ガウトより産するのが良質で、福島縣は六十里も離れた所であるが発見される。もつとも黒曜石に似たピツチストーンは安達郡岩根村五百川北岸の字矢沢にその原石産地があり、この分布も縣内に多い。飾玉として多く使用される翡翠(璽玉)は一時間内から産しないといわれたがその後日本アルプスに原石の産地があり、東北地方からも発見されるようになった。装身具の項で詳述しているが、分布上注意すべき石質である。こうした原石の産地と発見地の間には古代の交通、交易が行われていたことが想像され重要な手がかりとなる。

1. 古式の石器

最近日本にも旧石器時代の文化が発見されたといわれるが、今のところ明でないので、旧石器については何もふれることは出来ないが、縄文式文化の早前期にはかな身形の姿つた原始的な石器がある。石鏃は日本石器時代で最も早く形と性能が完成した石器で既に早期には二等辺三角形とその底辺を深くえぐつた形があらわれれている。

【深器】手に握れる程度の扁平な窪の両部を極く粗くばらんばんと打缺いて、不規則な刃を作つたもので、一見石器と



第二十圖 局部磨製石斧 東白川郡那倉
①局部磨製石斧 大沼郡沼沢村中川
②局部打製石斧

は思われぬのが、細術台式以後田戸式から前期末の諸磯式ころまで発見される。

【原始的な石斧】石斧といつても小形で斧の役にはたないが、扁平な礫片の刃部やその他の必要な部分だけを削いた「局部製石斧」や打製石斧の一番古い形式といわれる「子母口石器」桃の実を平べたくしたような打製の「扁桃形石斧」といわれる三種があるが、いずれも手で握つて使つたもので、木を切る斧でなく、必要に應じてたいたり、削つたり、はいたり、つついたり何にでも使つた原始的な石斧である。

【削片石器】前の二つとちがつて打製であるが刃を鋭くしたもので、石刃といわれる類で、平たい黒曜石や石英の母岩の縁を鋭に打ちかいて、一面は山形一面はキヤ凹形、断面が平たい三角形の器長の石器で、細かい物を切つたり削つたりするのに使つた。又石鏃を大きくしたようなもので先の方を鋭く打ち込んで尖らせたものを「尖頭器」といひに横型の石鏃や、石槍もあらわれてくる。

【礫石石器】いろいろの種類があるが定まつた名も用途も明でない。中には石皿と思われる径二十センチ位の平たい礫塊の上面を磨き凹めたものがあり、木当に盛になるのは中期であるが、いろ／＼に用いられたようである。又化粧石盤のような形をした楕円形の礫や、断面三角形で丁度草一杯で握れて一つの縁に平たくすりへらされた刃のついた、石器のすり切り用の鏃ともいふべきものやその他用途不明のものがある。古式の石器は一つの機能のため一つの器型がまだ完成していないものが大部分である。

2. 狩や戦いに使われた石器

人間も生物の一員である以上生存競争を行われた。昔の人々は安全な生活をするためにはあらゆる智えと力をあけて自然と戦ひ、動物を倒し時には利害を異にする人々とも争つたことであろう。この時に身を守り相手を倒す道具は自然の竹や木、石ころを使つたことであろうが、石器が最もよい狩の道具であり武器であつた。

一、石の 劍

あまり多く発見されていないが、南会津郡田島町長野向山からは第二一圖のような一目で劍とわかる崩製の石器が出土している。発見された状態や遺跡のくわじいことがわからないが、縄文末期か彌生式文化時代である。河沼郡野沢町芝草原からも刀状の石劍、安達郡下川崎村大字下川崎堂平からも発見されている。石劍にヤヤ似たものに石棒といものが、これは普通断面が丸いが、石棒の中には扁平なものもあるのが、これは石劍のなかまに入れた方がよからう(七八ページ参照)日本刀のようにそのある石刀というもある。また今まで槍といわれた物の中には柄をつけて劍に使つたものもあつたと思われる。



第二一圖 石劍 南会津郡田島町字向山一

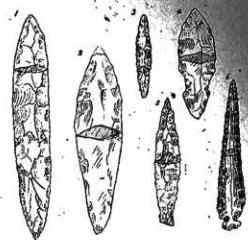
二、石の 斧

石やりは各地から多く発見される。西日本にはほとんど発見されておらず、東北や北海道にのみ出土するのは、この地方のけ物や狩のし方に特殊なものがあつたのにながらない、熊狩などはどうであつたらうか、大きさは五センチ位から二〇センチ位のものが多いが、全部打製で一面のみ細くフレイクしたものと、両面をフレイクしたものとがある。石槍の中には柄をつけて短劍やジャツクナイフ式のものもあつたと思われる。

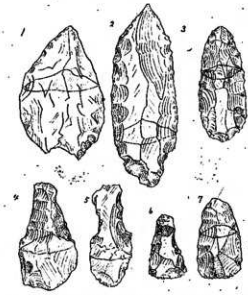
三、石の 槍

石槍に比べて小さく、短冊、バチ形、打製石斧を小さくした長さ六、七センチから十センチ以内のものに、石へらといわれるものがある。これも東部日本に多いものであるが、用途については明でないが、一面が大きく打かいた断面が三角形のものは石じに近い用い方をしたものであろう。

又同じ手法で更に大型の打製で、杏仁形とか半月状形をした大形石器もまた相当数出土している。



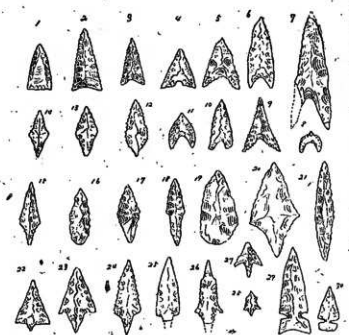
第二十二圖 【石槍】 ①立子山村入川 ②西白河郡藤木村下大越 ③榎木村東前 ④石城郡夏井村 ⑤伊達郡茂庭村 ⑥信夫郡松川町



第二十三圖 【大形石槍と石へら】 ①福島市小倉倉 ②松川町サツ原大塚 ③伊達郡大木戸村 ④磯田村 ⑤阿大川 ⑥福島市矢根塚 ⑦立子山村

四、石 鏃

矢の根石といわれている。石鏃には打裂と磨製とがあるが、磨製は彌生式文化時代になつてから造られたものである。石鏃の形式には茎、つまり矢竹のさきまたはめ尻部分のあるものとに區別して有茎と無茎とその中間型（柳葉形という）に大別される。更に三角形、四角形（菱形）五角形を元としていろいろの形になつてゐる。紡錘形（腰股形）おもだか形等特別な形をしたものがあり、アメリカ式石鏃の名で呼ばれてゐるものもある。これはアメリカ、インディアンがよく使つてゐるので名づけられてゐるが彌生式の天王山遺蹟からも多く発見されて注目された。石鏃は無茎



第二十四圖 【石鏃】 (1)―(11)まで無茎(12)―(21)まで柳葉形とその変形(22)―(28)まで有茎(29)―(30)いわゆるアメリカ型

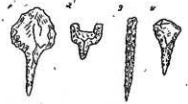
の方が古く有茎のものは縄文式文化の後期になつて東日本に多くひろがつてゐるが、普通の遺跡からは兩形式が共に発見されてゐる。耶麻郡北山村の松音寺遺跡は粗末な無茎の脇持形のみを出し、僅かに離れた矢の根石は兩形式があつて製作がすぐれてゐる。同じ事は大沼郡新鶴村の中江遺蹟でもいわれ、ここは薄い脇持形を出し同字の権現堂からは厚い有茎を出す。双葉郡長塚村寺沢や信夫郡水原村には無茎のみを出してゐる遺跡がある。石鏃には樹脂やアスファルトが附着したのが発見される例が東北に多いが、古代の人々は竹や柳の木等の先に石鏃をしり、前記のものをねばしつけて使つたものであろう。その他矢の根石には骨竹、木も用いたものであろうし、弓は丸木弓が用いられたことは青森縣の足川湯地遺跡から発見さ

3、日常生活に使われた石器

れてゐるが長さは短く、今のアイスの弓に似てゐる。

大きさ、形もやや石鏝に類しているが、身が細長く先がとがついている打製の石器で先史時代の人々が鏝とし、或は針として使つたものと考えられる。石鏝は三形式に分けられる。

- ① つまみの部分が扁平に広くなつたもの。② この仲間ですまみが甚だ大きくなつて先が僅に突起になつたもの。
- ③ 單に棒状のものがある。棒状のものは柄をつけて使つたものであろう。



第二十五圖 【石きり】① 榎木村 新田 ② 双葉郡百間沢 ③ 小川貝塚



第二十六圖 【石 匕】(皮はぎ)

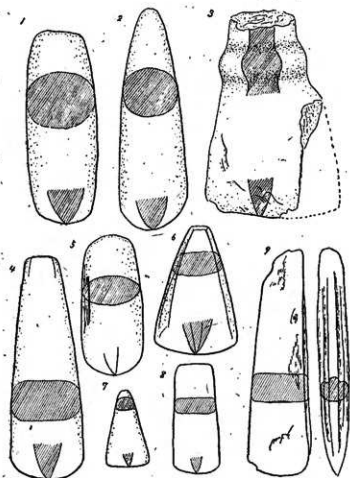
- 【たて型】①南会津郡江川村小沢崎 ②信夫郡麻坂村矢細工 ③福島市渡利中山 ④阿倍夫山 ⑤双葉郡幾世橋村百間沢 ⑥南会津郡籠岩村 ⑦石城郡【横型】⑧大沼郡須田村四十九院 ⑨伊達郡高松 ⑩北会津郡門田村南御山 ⑪伊達郡榎木村新田

「さじ」といふこともストーンに用いたのではなく、動物の皮をはぎ、肉を切りとるものを用い、或は小刀として使つたものかもしれないので「皮はぎ」と呼ぶ学者もある。多くはつまみがあつて一面は大きく打かいて平面に近いが、他面は中央が高く周囲をフレイクして鋭利な刃がついている。大別して横型と縦型に分けられているが、扇丁形又は銀杏形など、細別される程形がさまざまである。またつまみがなく、石鏝にしては大きく、石槍にしては小さいものや、楕形や三角形を基とする一群があり「石へら」「石かき」又は「石小刀」とよばれる。これらの石匕は多く柄をつけて用いたものと思われるが、中にはそのまま小刀のようにつまみを縦で結び、携帯用にしたものもある。石鏝と共にどの遺跡からも発見される石器で早期のものもあるが、どうしたのか彌生式文化時代には見当らなくなる。

石鏝について石器の代表的なものであり、縄文式文化時代の早期から彌生式文化時代にも使用されている。作り方から打製石斧と磨製石斧とに分けられるが早期のものには河原石の先に刃をつけた程度のもので局部磨製といわれ、その反対に一部分のみフレイクした局部打製の石斧と四形式に大別される。

【打製石斧】縄文式文化時代の早期から各期に用いられているが、早期や前期のものにはあまり人工を加えられていないので一定の形がなく無器用で、大きいものがある。中期頃から形がきまつて次の名で呼ばれている各種がある。

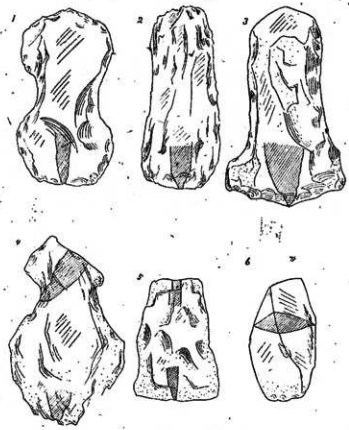
- ①局部打製 ②短冊形 ③ばち形 ④分銅形(島田形石斧ともいう) ⑤外に匙形 ⑥足形、皮判形といわれるものもある。この外注目すべきことは伊達郡の北部、阿武隈川下流に近い大木戸、大枝、山舟生、富野、乗川及びそれに近い相馬郡の一部から第一④⑤のような一種の皮はぎ形で大きい石斧が出土している。刃の部が大きく開いて上部にくびれが生じ頭部が斜に一種状に打かいている。安山岩質の打製石斧で私はこれに「伊達式打製石斧」という假の名をつけようと思つた。中期



第二十八圖【磨製石斧】①(第三型) 伊達郡半田村 ②乳鉢状(遠州型) 石川郡泉村 ③耶麻郡北山村漆 ④(定角式) 田村郡常葉町上町 ⑤東白川郡豊里村 ⑥西白河郡釜子村榑本 ⑦安達郡杉田村 ⑧瀬島市渡利 ⑨すり切石斧 双葉郡百間沢 ↓

形のもが普通である。定角式というものは兩側をよく磨き、角がちゃんとしているもので断面が中高の矩形に近いもので、

短冊形で始又、断面は四に近いもので彌生式に共存する。(1)局部磨製 (2)遠州形(乳鉢状形) (3)定角式(三味線型) (4)すりきり石斧 (5)小形石斧 (6)第三型(太い)



第二十七圖【打製石斧】①(分銅型) 瀬島市渡利中山平 ②(短冊型) 大沼郡横田村大塩 ③(ばち型) 大沼郡原谷 ④(伊達式石斧) 伊達郡大枝村 ⑤阿部五十沢 ⑥相馬郡筑野村八幡林 ↓

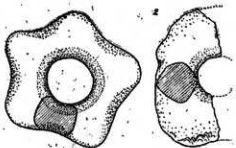
打製石斧は一般に扁平になり易い石質が選ばれるので強くうちすと石斧自身が折れてしまうので、岩石や木材のような固いものには不向きであるから恐らく木の柄をつけ鉄のような土掘り道具として用いられたものと思われる。

【磨製石斧】縄文式文化時代の中期からあり、後期頃から美しく磨かれた石斧が多くなる。形式は様々あるが夫の名で呼ばれている。

の終り頃から後期にかけての遺物を伴う。

これらが基礎として変化しているのが多う。「すりきり石斧」というのは形からいけば一種の定角式であるが、兩ふちをかたい石のこぎりですり切つて一度に二つ以上を作つたもので、中期のはじめ頃から北日本に多いといわれ、福島縣にはいくつかの例があるが金津は少ない。しかしこのすり切りの技術はペリヤ方面では新石器時代のかなり早い頃からあつたので、それが北海道に渡り、東北へ入りやがて日本海岸を新潟、長野、富山、岐阜の飛騨方面まで及んでゐる。又磨製石斧の形はしているが、三、四センチ程の小形でしかも美しい石質で作つたものと「石のみ」という人がある。石斧とは別の用途であるらしい。中には有孔石斧といふ小形の石斧に孔のあるものがある。

(註) 玉類の項参照。彌生式に伴う石斧はその項にゆずる。



第二十九圖 (石斧) ①福島附近 縣所蔵 ②南金津郡朝日村唱崎

石斧は「斧」という言葉から斬割り、木を切るもののような印象を興えるが、そうしただけの用もしたるうが「のみ」や「ちような」のように木をけづる火道具ともなり、鋤や鍬のような土を掘る道具として使われたものと思われる。大形の打製石斧は木の柄を直角につけると立派な農具に使われ、柄のつけ方によつていろいろの道具として使用されたものであろう。

四、環状石斧

運動具の円盤を小さくしたものの中央に丸い孔のある石器を環状石斧といふ、又周縁が數個に分れているものを「多頭石斧」といふ。発見例は少ないが第二十九圖①は福島附近発見の多頭石斧で、②は破片であるが南金津郡朝日村唱崎発見のものである。近時白河の天王山遺跡から彌生式土器と共に発見された。

五、独鈷石

石鋸ともいふ。佛具の獨鈷に似ているので名づけられた。これに二つの形式がある。(1)は獨鈷のよう

に中央がくびれて二カ所に節があり端がとがっているもの。(2)はくびれがあるが兩端は短く丸い。

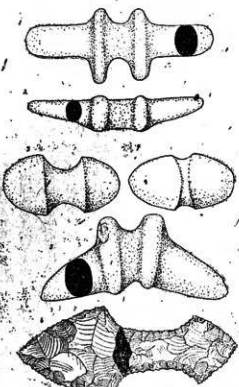
①は中央を片手で握るか石斧のよう

にこゝに木の枝をつけて物をつぶす用をしたものかもしれない。

中には兩端が斧のようになつてつたものや第三〇圖④のように特殊な形をしたものがある。③④は金槌のように用いられたものと思われ、石槌といわれる。獨鈷石の中には節の所が高く、突き出し必要以上立派に作られたものがあつて、実用品よりは何か宗教的、儀禮的なものかもしれない。⑤は福島市渡利中山から発見された打製石器で、兩頭石斧のようでもあり、中央がくびれている点から握るに都合よいので獨鈷にも共通点があるが扁平であるから実用品ではない。やはり儀禮的なものであろう。

六、石 棒

棒状をしているので石棒といわれるが、これには大きさまから三つに分けられる。(1)大型で一人では持てそうもない丸いもの。(2)細形で軽く上手に作られたものがある。この二種類は共に頭の形から次の三種に分けられる。



獨鈷石

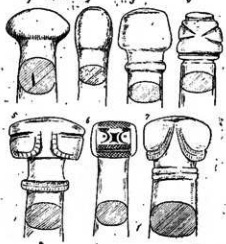
第三十圖

- ①信夫郡佐倉村大新田 ②相馬郡駒ヶ嶺村 富次前 ③④伊達郡大枝村 ⑤南金津郡朝日村曲尺淵 ⑥(美形石斧) 福島市渡利中山

(a) 無頭石棒 (b) 一頭石棒 (c) 兩頭石棒、筆者は中期後半の遺跡から太い粗製の石棒を発掘したことがあるが、破片であり凹石に代用されていたが、食料にする物をつぶす家具の一種であつたかもしれない。驚く程大きいものがあり、東白川郡竹貫村大字田口字戸神には全長一三五センチの片麻岩製の無頭式で明治初年まで字青柳の鰍川岸にあり、「すそみき神社」の神体として祀られ、現在他の一本と共にコンクリートの台石に建ててある。ここには更に大形のものがあつたといわれる。一頭式で大きいのは石川町北須川で発見された全長一五五センチ、兩頭式は福島大学、白河高校にある。細いものは比較的美しい石質をよく磨き、飾りの彫刻がしてある。無頭の先の鋭くあがつたものは一頭又は兩頭式の石棒とは用途が別で、一頭式のものには石剣に近いものもあつたろう。石棒や獨鈷石は田舎の神社にまつられて御神体になつてゐるのは注意しなければならぬ。



①明和村小林 ②福島大学所蔵品

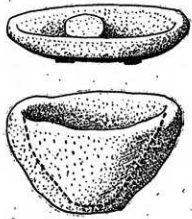


第三十一圖【石棒、石剣の頭部】①坂本村船橋 ②相馬郡八沢村 ③南会津郡蒲花 ④伊達郡大田村 ⑤阿大枝村 ⑥木郷村上林 ⑦橋原村豊成

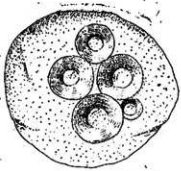
手頃の大きい石の真中をくぼめたものを石皿といひ凹みの深いのを石臼という。共に用途は同じで「たつき石」といわれる固い丸石を伴つて発見されることが

七、石皿、石臼とたつき石

あるが、これで木の葉などを押しつぶして粉を作り、團子でもつくつたものと思われ、早期の遺跡からも発見されるが古いのは粗末で後には定まつたへりがつき、うらに脚のついたものがある。耶麻郡奥川村で脚つきの石皿が石棒と共に神社に奉納されたのをみたことがあるが、附近の遺跡から掘出したものである。安達郡敷下村の原瀬小学校には裏の遺跡から掘つた石臼がある。長徑五七センチ、深さ二三センチでこれなら多量の粉が作られるわけである。北会津郡門田村大字根岸には「七すり鉢」という地名がある若松市の南、標高二八〇メートルの扇状地の小川に臨む遺跡の中央に高さ二メートル程の自然石に十個に近い凹みに火が入れられている。昔の人々がここに集つて共同



第三十二圖【石皿と石臼す】石皿(角丸の角形で凹脚) 耶麻郡奥川村上 石臼す 安達郡橋下村原瀬



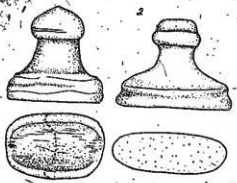
第三十三圖【くぼみ石】南会津郡橋下村下ノ原

で粉を作つたものかもしれない。今この石は若松市の某氏庭園に私有されている。適當な大きさの石に浅い小さな穴が五、六個、時には十数個もほられてゐるのがある。「雨だれ石」「蜂の巣石」とも呼んでゐる。筆者は東白川郡敷川村で炉の近くに四個の穴のある凹石と一個の穴がある手頃な小石を発掘したことがある。昔の人はこの穴に檜等の木の枝を錐のように磨擦させ或は簡單な装置で火を起したものと考えられる。凹石は太い石棒や石皿の廢物を利用する時も

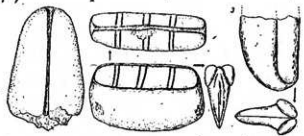
八、凹石

あり、又信夫郡庭坂村矢細工遺跡のように炉の周辺の石を凹石とし
たこともある。

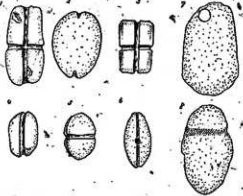
九、石のおもりと軽石のうき



第三十五圖【重石】①重石 出土地不明(野瀬)の土製 伊南村多石山



第三十六圖【石籠とすり切石器】①すり切途上の石籠 東白川郡源倉町 ②岡比丘尼堂 ③耶麻郡木崎村東原

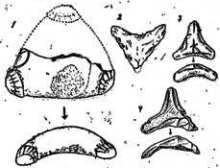


第三十四圖【おもりとうき】①②相馬郡小川貝塚 ③耶麻郡島村かに沢 ④耶麻郡百用沢 以上石製品 ⑤大沼郡旭村 ⑥かに沢 以上土製品 ⑦東白川郡源倉町比丘尼堂 ⑧信夫郡矢細工 以上軽石製

なものは小さな河原石の兩端をよつと打かいて糸をかけるのに都合よくしたものを、縦横十文字に淺い「あざ」をつけ
たものもある。細い石棒の破片をすり切りにして數多くつくつたものが双葉郡幾世橋村の百間沢から発見されている。「土
おもり」も同じような形で管形に穴をあけたものがある。又信夫郡矢細工遺跡からは長徑七センチほどの卵形の輕石に穴
を一つあけたものが発見されているが、これは網を浮かすに使つた「うき」であろう。

一〇、石冠と石籠

この石器も名前が悪い、かつて愛知縣邊美郡の貝塚から人骨の頭に伴つて発見されたので「かんむり石」と名づけられ
たが決して帽子のように頭にをかぶつたものではない。人によつては凡字形石器、凸字形石器と名づけられる通り頭部は手
に持つに適する弧形をしたところと、扁平な台部からなる。圖の(1)は縣の博物館にあるもの、(2)は南金津郡伊南村多石



第三十七圖【三脚石器】

- ①磨製 信夫郡菅坊 ②打製 耶麻郡岩月村
- ③土製品 信夫郡庭坂町小川 ④打製 信夫郡荒井村愛宕原

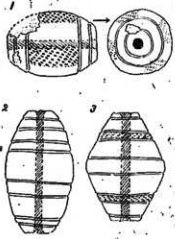
発見のもので土製品である。種又は物を磨くものよりであるが土
製品もあり、土器を作る粘土をつぶすに使つたともいわれ、本当の用
途は明でない。この種のものは北海道に多いといわれるが、次のもの
はこれと形が異り頭部が石庖丁のような型になり、反対に台部をつか
んで切断の具としたと思われる精製品がある。三六圖(3)は耶麻郡木崎
村の東原から発見された砂岩質の破片で(2)は東白川郡源倉町比丘尼堂
出土で台部にくぼみがある。この二品はすり切り用の石籠とみられ、
(1)のようにすり切り石斧の未製品も発見されている。

十一、三角石器

これらもかかし名前であるが用途がわからないので形状の上から名づけてある。三七四(2)は耶麻郡岩月村治里より出土したもので、一辺の長さ約五センチの打製品である。(1)は信夫郡平田村昔坊の中期末の遺跡から発見した破片であるが、一辺一センチの砂岩質の磨製品で三角の尖端には二重の複線があり、貝殻を思われる沈線が放射状に陰刻している。(3)は同郡愛宕原の表面採集で(4)は飯坂町小川発見の土製品である。三角石器については八幡一郎氏の人類学雜誌四七ノ一にわし。

二、紡錘車

むすかしい名前であるが、一種の「おもり」で簡單なものは箸など、精巧なものは着物まで織つたものであろう。縄文式文化時代に織物による衣料はないものと考えられるから織物をつた紡錘車「へそ石」は彌生式のところで記述することにする。ここでいう紡錘車は第三八圖のように球状といわゆる紡錘形との二つの形式に分けられる土製品で、類品は少いが伊達郡と相馬郡から発見される。縄文式後期から晩期にかけて現われている。多くは互行の沈線めぐらした帯があり斜行縄文、磨消文が全面に施されて中心に管状に穴があいている。同じような土製品は宮城縣の沼津貝塚、山形縣の豊里村から発見されている。沼津のは球状といわれるので用途は別のもであらう。



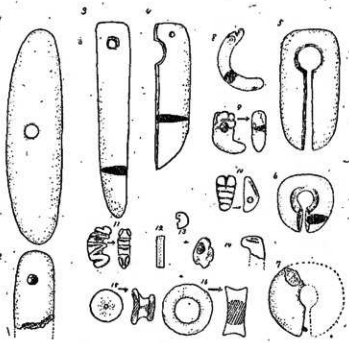
第三十八圖(紡錘車形立体土製品)
①伊達郡耶麻本村磨製 ②河郡大枝村
③相馬郡耶麻本村磨製 ④相馬郡耶麻本村磨製

(註) 1 人類学雜誌四九ノ二「紡錘車形立体土製品を中心として」角田文直 2 考古学研究所二ノ三 八幡一郎氏論文

一三、まが玉と耳飾

近代人も首飾や指輪、耳飾をつけているが大昔の人は好んで身体を飾つたようである。大昔の装身具にはその材料から玉器と土製品と骨角器などがある。

「玉」というのは美しい固い石のことで、硬玉、軟玉や碧玉などを一等品とするが外に、めのう、水晶、石英、かんらん石、オパール等の美しい石質や蛇紋岩、硅岩、綠泥岩、燧石、砂岩、粘板岩等各種の石が利用され、時代が下ると人工になるガラス玉等がある。硬玉は昔から「ひすい」とか「ろうかん」とも稱されダイヤモンドに次ぐ硬質の石で深い緑色をしている。近頃まで硬玉は中国南部からベル方面から運ばれたものと考えられていたが、先史時代にどうして東支那海を渡つたかが問題にされ、しかも大陸に近し九州地方からはほとんど発見されないで、中部地方から関東、東北に多いので学界の疑問にされていたが、最近になって富山縣の東部黒部川の奥の谷に硬玉の原石があることが明にされ、外に新潟縣の田海川溪谷、山形縣の東田川郡月山八合目三五六附近、それにわが相馬郡上真野村大字上柳窪の山地、青森縣、栃木縣等にも硬玉の原石の存在する可能性が強く、硬玉の遺物は数多く発見されている。製玉遺跡としてはこれら富山、新潟、青森、山形にその例があり、山形縣の東田川郡手向村松形遺跡はよく知られている。飾り玉の中には石器時代勾玉といわれるものがある。勾玉という、古墳文化時代の人々が好んだ英語のコンマの形をした美しい勾玉を考えるが、石器時代勾玉は第三九圖のように変つた形をしている。勾玉と同じように孔に緒を通して首飾として垂らしたのであろう。彌生式文化時代になると古墳時代の勾玉にてくる。北会津の門田村南御山遺跡からは古墳時代の玉類の祖型と思われる勾玉と管玉が多数彌生式土器と共に発見される。勾玉は古墳時代のものより小さく、円形を二つに分つてコンマ形にして孔をあけたようなものであり、管玉は碧玉で古墳時代の普通形と細形と二種類あつて太形はどうしたものの全部だかれてあつた。又白河の天王山遺跡からも彌生式土器と共に碧玉製の中細型管玉が発見されている。



第三十九圖【玉類と耳飾】

- ①大塚 ②石城郡夏井村下大越 ③玉へら ④信夫郡荒井村 ⑤郡山市桑野 ⑥杖状耳飾 ⑦伊達郡大枝村竹ノ内 ⑧信夫郡平田村北地野 ⑨石城郡田人村赤飯田 ⑩相馬郡大館村 ⑪双葉郡百間沢 ⑫菅王 ⑬北余津郡南御山 ⑭勾玉 ⑮同 ⑯同 ⑰土製耳飾 ⑱相馬郡眞野村八幡林 ⑲信夫郡曾坊

類というのが会津から一例発見され、信夫郡荒井村発見の玉へらは国立博物館に保管され、(註)玉へら 人類学雑誌五八ノ八 八巻一冊

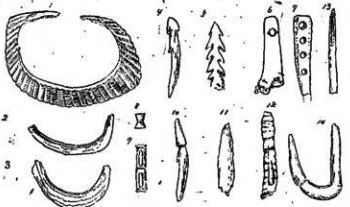
【杖状耳飾】先史時代の玉類の中には杖状耳飾という特殊なものがある。中国の古代の玦に似た形をした円形又は楕圓形の中央に穴がありその穴から一方に狭いままみのつてある美しい耳飾の玉で主として縄文前期頃からあらわれているが、その半分を飾り玉とすることもある。杖状耳飾は類品はそれほど多くない。西白河郡釜子村、信夫郡平田村北地野、伊達郡柱沢村、同大枝村、同桑川町、大沼郡新鶴村沼田字宮前等から発見された例が報告されている。その他幾もない自然の美しい石に孔を通したもので、有孔石斧とか鑿形玉(註)玉へら 人類学雑誌五八ノ八 八巻一冊

【土製耳飾】首飾は石製が主であるが、耳飾は杖状耳飾を除いては土製品が多い。土製耳飾には小形の滑車形耳飾(白形耳飾という)と漏斗形耳飾がある。朱色の彩色を施したものが多く、環状のやや大型のものもあるが、どうしたことが福島無には類品が見られない。最近信夫郡平田村曾坊から比較的大きい土製耳飾が発見されたが、装飾のない白形である。耳飾をしていることは土偶によく見られ表紙の土偶はその一例であるが松島湾の宮戸島貝塚から出た人骨の中三例には耳の部分に石製の小玉があり、その中の一例は特別に美しい硬玉製の小玉を使用していた。青島貝塚では土製の耳飾があり、大洞貝塚からは女人骨に貝輪と貝製の玉及び鹿角製の玉が人骨と共に発見されているのでその使用法が明にされた。

(四) 骨角器

動物の骨、角、牙でこしらえた器物を骨角器と名づけている。最も使われているのは鹿の骨と角で、外に猪、鳥類の骨、魚や鯨など海の動物の骨がある。

骨角器は有機質であるから普通の状態では壊つていないので、貝塚や特殊な包合地でないと思見されない。しかもその分布をみると東北地方が最も多く関東地方にいたると数が少くなり、四日



第四十圖【骨角器と貝輪】

- ①-③貝輪 ④-⑥小川貝塚出土 ⑦⑧⑨⑩もり ⑪耳かざり(朱ねり) ⑫⑬石城郡下大越貝塚発見の釣針

本には僅しか見られない。北海道方面にもあるが、変つた形になつていたので骨角器は宮城縣の貝塚と福島縣の小川貝塚附近が中心地という感じがするので、この地方に特殊に発達した技術として注意すべきものである。骨角器には釣針や、鋸などの漁具、きり、針、ヘヤビンのような裝飾、構、その他腕輪や腰飾と思はれる装身具があり、弓の先につける「ハナ飾」のようなものもある。その他に「貝輪」というのがあがる。サルホウや赤貝等の大きい二枚貝に孔をあけたもので、縄文式文化時代の人骨の腕にはまつたのが発見されたことがある。中にはその孔が小さく腕輪とは考えられないものもある。相馬郡新地村の小川貝塚の骨角器は学界に著名で、朱色の彩色を施した特殊なものや、精巧美麗なものが多い。

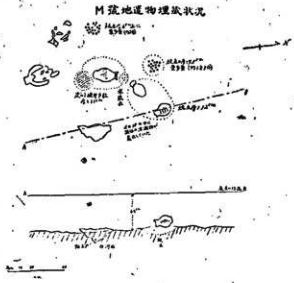


第四十一圖【こしき】石川郡泉村小高
(中に米がたくさん入つていた)

(五) 木製品と自然物

自然の水の炭や木製品、纖維等の植物質の遺物は同じ有機質でも骨貝等より一そう壊れないので、砂漠のような乾燥地や、泥炭層中か又は炭化した特殊な場合のみである。今までこの方面の研究が行われていなかつたため遺物も少いが、青森縣の是川の湿地遺跡や奈良の唐古、最近の登呂遺跡から数多く発見された。福島縣ではまたこの方面の研究がすすまないために前記の遺跡から出土したような農具や、家具、建築具などは発見されないが、後期の縄文土器の底に網代形の各種の「あみ物」のあとをついたものがあり、竹、わら、よし、藤つるのような纖維で網籠や、蓆、箆、あんべらのようなものが作られていた事は考えられる。又木の容器は炭化して遺跡から発見されるので調査をていねいにやればもつと発見例は多いと思はれるが、耶麻郡木柵町金原からはトチの実、河沼郡西村かまど原からは現存してい

い大型のくるみが沢山あり、東白川郡の耽川、福島市遺下遺跡、信夫郡矢細工遺跡からもくるみが炭化して発見されている。彌生式や土師式の土器と一しよに米が炭化して発見される例も多く、石川郡泉村小高からは土師式の「こしき」と一しよに米が大量に出土し、最近白河市天王山からは彌生式土器と共に多量の米、土器の底には同質の液体が炭化附着しているので或は古代の酒ではないかと思はれるもの、更に粟、くるみ、木皮或る種の草がいつれも炭化して発見された。この遺跡は彌生式の項にくわしくのべてあるが山頂の乾燥地にある遺跡である。米は長径六ミリで穂土の中に包含され、飯と思はれるものは表面は米の形をしていて内部は滑着圧縮されているが約八センチ程の塊状を呈して一見「おにぎり」を想像させる。木の皮は大部分炭化しているが大きな皮目がある。厚さ〇・〇八一〇・二センチで、幅九センチ、長さ二〇センチ程で三重又は四重に折り曲げられている。又別な箇所からは現存していない羊歯類の一屬であるといはれる纖維が発見されている。地形や埋蔵状況からみて單なる住居跡のみでなく祭祀物と共に火中して埋蔵されたもののように考えられる。



第四十一圖

彌生式文化

八八

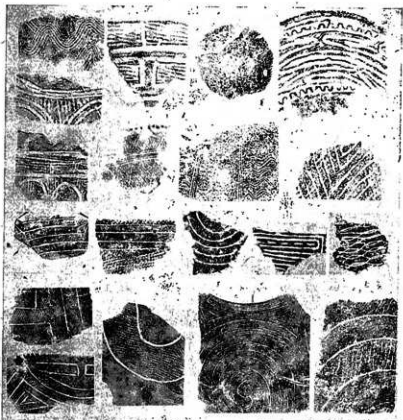
彌生式土器が主として使われた時代を彌生式文化時代というが、これは四世紀元前一・二世紀頃から数百年程続いたものといわれ、所によつてはそれよりもおくれて短かつたこともある。その最初は縄文式文化に続いて純然たる石器使用の時代であつたが間もなく金屬を知るようになり、金石併用時代といふよりは、むしろより便利な金屬器を主に使用し、またいくらか補いとして石器をも使つたという状態で、従つてかたんなる採集や冶金術も心得るようになり、金屬のうちでも鐵器の使用が盛になるにつれて木器、木製品が上手に作られ、農業が行われていた。縄文式文化とはおとそ異つた進歩した文化であつた。

(一) 彌生式土器

彌生式土器は広く九州から東北地方まで分布している。そして少しづつ、の地方差と時代の差とがあるので、一がいに説明することはむずかしい、特に東北の彌生式は縄文式の影響を多分に受けているので、彌生式土器の特徴を説明する爲に縄文土器とどのように異なるかを比較してみる必要がある。

(1) 彌生式土器の特徴

- (1) 色 縄文式土器は一般に黒褐色であるが彌生式は赤みのある黄、赭褐色で明るい。
- (2) 焼成 かまどが改良されているので焼成よく薄手である。
- (3) 成形 まき上げ式、簡單な手廻し、のくくも使つたらしい。
- (4) 器形 (a)各種あつて複雑となる。(b)注口土器がないのが普通(白河の天王山よりは二箇窺見されている)。(c)底は平底と丸底が主で台を有するものがあり、上げ底も少々ある。(d)穀物を調理するために土器の底に



第四十二圖 彌生式土器拓本

①上段及び二段の左二つまで天王山 内形は底部の稜痕 ②二段右二つは
 細田 ③三段左二つは大塚 ④三段右三つは附会津鴨崎 ⑤下段五つは鹿嶋山

孔のある特殊なものがある。孔のある特殊なものがある。(f)口縁部には突起や把手(耳)が見られない。(g)蓋があり土器を二個以上組合せて使うものがある。(h)貯藏用と、煮つき用の区別がはつきりする、前者は美しい形で文様がより、後者は一見粗末である。

【彌生式土器の文様】 縄文にくらべて飾ることは少く、簡單で形が美しくなつてゐる。地の文には縄文があるのといふと二様あるが、西日本の彌生式には縄文はみられなく、東日本の彌生式のみ細い縄文、細目の幾条文があるが隆起文は少い。東北地方になると一層縄文が多くなる。文様の大部分は沈文で、細いへら書で、幾何

学的图案が多い。縄文土器よりも朱色の彩文が多く、中には原始的絵画がへらがきされたものもある。文様の形式には次のようなものがある。

- (a) 楕目文 (b) 平行沈線 (c) あや杉文 (d) けさたすき文 (e) 鋸歯文(各種) (f) 菱形文 (g) 雷文 (h) 波文
- (i) 青海波文 (j) 扇形文 (k) 重文 (l) 速気文 (m) 渦卷文 (n) 花文 (o) わらび手文 (p) 七宝つなぎ文
- (q) 流水文 (r) 通点、連続文

(2) 彌生式土器の編年

縄文式土器文化は日本国土内ではあまり大差ない時代に終りをつけて彌生式土器の文化に置きかえられた。縄文土器文化の濃厚な東日本と、彌生式文化の中心である西日本との間では土器型式は數型式の差をこえないものとみられる。(1)

彌生式文化時代は前期、中期、後期に三大別し、それは更にいくつかの型式に細分されている。前期の彌生式土器は近畿以西から発見されて、畿内と九州に古い型式がある。中期の近畿の楕目土器は銅鑄、銅鐵と関係し、北九州の遊賀川式は銅鑄、銅鐵と関係があるので青銅器併用時代で、それは紀元前一、二世紀頃であるといわれる。中期になつて近畿地方のものが東日本へひろがり、後期には全く石器が委を消して古墳時代の土師と区別がつかなくなつてしまふ。彌生式の古いものは九州と近畿と二個所が中心になつて発達しているもので、中部日本と、関東地方を主とする東日本とに分けて研究すると便利である。

(註) 1 山内清男氏 日本諸古の文化

地域	北九州	畿内	近畿	東	四	南	吳	仙台附近	北半	奥羽
古墳文化				高	泉				土須	御懸
後期	水巻町	辻	西	和泉 前野町 彌生町	十五合					
中期	伊佐 須	沢津	新榮	久ヶ原 宮ノ合	見町	倉山 王御 天南	辨形園			
前期	下伊田 立	破古	瓜唐	須和 田	野沢	大洞A	大洞A	大洞A	亀ヶ岡式	
彌生式文化(晩期)	御領	下内 日竹ノ	高瀬 榎	彌 福寺	千原					

歴史評論40號所載江坂輝彌氏説を基礎とし南吳の分を挿入した試案である(1950,10,1 梅宮)

(二) 東北地方の彌生式土器

【接融式】前期の終り頃から中期にかけて東方にひろがつてきた彌生式は、東日本が縄文式土器の中心地帯であるので、それらの人々が彌生式の文化に要つても縄文式の色彩が多分に残つていて西日本の彌生式とはかなり異つた様式をおびている型式となつた。これを接融式の文化という。接融式とは簡単にいうと、後期、晩期の縄文式文化とその後の彌生式文化との接融によつて始まつた特殊な文化に属するので、その土器はいはば彌生文と縄文式の混血兒といふべきもので、混血兒であるだけになかなか美しい焼きのいい土器群を形成している。その分布は石川、遊賀、愛知の線から東、東北までの東日本で、大部分は縄文式後期の後半から晩期の文化と並行しているとみられる。即ち關西から濃尾平野をすぎ静岡、神奈川縣と

昔の東海道の平野を伝わつて南関東に入った彌生式は、須和田式、宮之台式、久ヶ原式、彌生町式、前野町式の五時代に分類される発達をとげた。静岡の登呂はこの中期の久ヶ原式に当り関東地方彌生式の最も華やかな頃に相当し、彌生町式をへて次の前野町式が後期と見られている。一方濃尾平野から分れて長野縣に入り、群馬を通つて伝わつてきたものと南関東から北進した北関東の彌生式はまた十分に研究されていないが、樽式、二軒屋、及び野沢式、女方式、龍見町、十王台式などがあるようである。さて関東地方から山を越して東北地方に入った彌生式はどのようなものであつたらうか。殘念ながら東北地方の彌生式文化の研究は白紙の状態といいたい程研究されていない。ただ東北地方の縄文式直後の土器は南関東とは様式が幾分かちがついて、縄文式手法が濃厚で一見彌生式とは見られない。陸前野の辨形式や南御山式というのがある。

1. 辨形 圓式

辨形式は大洞式の末期にすぐ続く型式であつて、皿、浅鉢、鉢、深鉢、漆等の器形をも、縄文が大部分施されている口縁部の突起などは大洞式からの伝統をつたえている。一方には鉢形、壺形土器の湾曲や、刷毛目文などに彌生式の傾向をみせている。伴出物はに第三型や有角石斧及び片石斧、石匙丁等があり、土器底部に根の圧痕があつた。これに続く彌生式としては仙台台南小泉によい遺跡があり宮城縣には九ヶ所が数えられ、それ以北には見られない。しかし青森縣にも亀ヶ岡式以後に縄文の多い別型式があるといわれ、岩手縣にもこの仲間があるといわれる。ところが縄文式の傾向が少く関東の彌生式に近い遺跡は福島縣には数カ所発見されており、中でも会津の南御山と白河の天王山遺跡は標準遺跡として十分検討する必要がある。

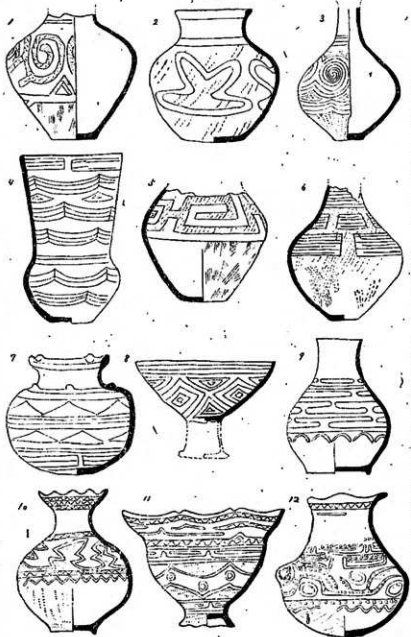
2. 南 御 山 式

北会津郡田村南御山遺跡については次の項で詳述するが、会津の彌生式最古の遺跡で、ここから出土する土器は瓶形、椀形、長頸壇、笠形があり、その中長頸壇と笠形の高杯は極めて大きいものがあるのが特徴である。文様は細部の沈線文で、懸垂文が多く、渦卷文、擬流水文、網目格子文、鋸歯文、三角重文、平行波文、波文等がみられ、細い縄文が施され磨消縄文もある。同時に晩期の縄文特にこぶ状突起のある注口土器があり打錫石斧等の石器が発見され、また古墳時代の管玉、勾玉が多数伴出している。總じて南御山式は辨形式もみられるが、関東の須和田式、越後の山草荷式に類した中期の宮之台式平行といわれる。

3. 天 王 山 式

白河市天王山遺跡から発見される彌生式は地理的にみても最も早く東北に入った彌生式で、縄文式文化の色彩が極めて濃厚である。大型のものや注口土器の如きは一見縄文式との識別が困難な粗縄文式に偏しているが、器形薄手の手法等に彌生式の影を認められる。中型及び小型土器は会津に入った南御山式と違つた沈文が主である。少数の小型器形に「けさたすき文、流水文、鋸歯文があり、銅器にみるような細部のすくれた十王台式の手法がみられる。他は重ね鋸歯文、形文、連文、楕圓文、平行沈線、沈文、工字文、連珠文、丸形文、菊光形文、突かし文、指先でおした指頭文等があり、地の文には縄文継承文及び磨消文が施され、縄文は縄文式と全く同じ車方向、羽状縄文であるが、平行線と網状の継承文が目につく。彌生式系の器形は瓶形か鉢形で、小型の高杯、杯状のものがある。南御山式器形に変化がみられないものも縄文式の影が多いからであろう。特に目立つ特徴は一種の波文ではあるが、これは沈線ではなく尖端が角形又は丸状の棒を横一線に交互に突刺した浮文状の細い波形文で縄文中期の五個ヶ台式にみられる明に縄文式の残存した文様である。主として口縁部近くか、腹部にめぐらされている。又連弧文の外は渦卷文のちなる曲線文がなく僅に破片であるが、磨消を施した彩文の入組文があつたのみである。二、三ヶ所離れた朝倉町比呂堂の野沢式にみるような曲線文の多いのとは対象的である点、東北地方中絶に最初に入った古い彌生式で辨形圓式よりもむしろ古式に近い標準として注意すべき型式で

第四三圖 福島縣の彌生式土器形式（大さ不明）
 ① 東白川郡磯倉町比尾丘墓 ② 西白川郡西村津尻
 ③ 北白川郡門田村南御山 ④ 南会津郡伊北村宮本 ⑤ 安部郡大野町原 ⑥ 西白川郡天王山



ある。

東北地方の彌生式の編年研究はまた誰も手を染めていないが、福島縣には次の項のように相当の遺跡があるので、東北地方彌生式の研究は本縣を基として研究されなくてはならない。

(二) 福島縣の彌生式遺跡

(1) 南御山遺跡 北会津郡門田村大字南御山字中丸

若松市の南方四キ、南北に走る山系の麓に西北に面したゆるい傾斜地の人家の裏にある。遺跡は面積一反歩程の小範圍でこの遺跡は会津風土記にも記されている古くから知られた遺跡で、數度にわたり濫掘されたが、昭和二十四年十一月五日より一週間明治大学助教教授杉原莊介氏一行により調査が行われた。この遺跡は地下約五〇センチ程の所に數個のピットがあつて、その中に土器が轉削して存在し、他に三〇センチ程の所からは小さな管玉、勾玉が數多く発見された。土器は甕形、椀形、長頸甕、笠形があり、中には水筒形の提甕があり、長頸甕と笠形には極めて大きいものがある。文様は細描の沈線文で、懸垂文が多く、渦卷文、擬流水文、網目格字文、斜書文、三角重文、平行沈文、波文等があり、磨細細文がみられ、口縁部にも細文、題帯文があつて辨形式の傾向もみられる。總じて關東の須和田式、越後の山草荷式にも似ていて中期の宮ノ台式平行のものと考えられ、東北における最古に屬する彌生式の遺跡である。この遺跡で注意すべきは多くの玉類が発掘されたことで、細型の管玉と太型の管玉が多く、細型はようやく孔をうがつことが出来る程極めて細いものがあり、太型は完全なものがなく全部細破されている。他に貝殻勾玉が二、三センチ程浅い所から発見されている。埋藏状況からみると、土器はピット内に横に伏し小型のものは比較的上面にあり、意識的に埋葬された玉類を伴出しているの

で普通の居住遺跡ではなく祭祀遺跡といわれる。しかし祭祀用の外に日常の煮たきする土器もあるので、埋蔵する爲に特に作つたものとは考えられない。この地からは曾つて土偶が出土し、磨製石斧、石匕が出土している。程近い館山には末期の縄文遺跡がある。この南御山と同じ細播の沈文の渦巻文、重文のある壺形土器は当地の南、大川の上流に臨む南金津郡椿原村豊成からも発見され、また新石器時代の北金津郡椿原村十六橋附近からも細沈文の三角重文が発見されている。

(2) 津 尻 遺 跡 河沼郡川西村津尻字西原

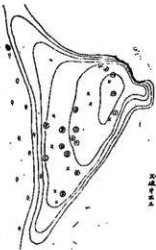
津尻の西原は阿賀川に近い低地遺跡で、昭和五年三月阿賀川改修工事中、地下六〇センチ程の所に南御山遺跡と同じように何れも轉倒して多くの遺物が発掘された。石器は全くなく、彌生式土器に交つて一個の亀ヶ岡式土器が出土している。この遺物は散失してしまつたが金津図書館その他に磨削文を施した管文様の平行沈文の小さな壺形土器が藏されている。これに似たものは津尻遺跡から直線六〇キロ、阿賀川の支流只見川の上流の南金津郡伊北村大字只見の磯神社前の縄文遺跡から管玉と共に一箇の彌生式土器が発見され、更にのびて朝日村鳴崎、富田村和泉田にこの種の破片が出土している。

金津には他に大沼郡新輪村立石田、荒井村三伏、喜多方町宇長内などに石器を伴わない彌生式遺跡があり、喜多方からは石彫丁が発見されている。

(3) 天 王 山 遺 跡 白河市久田野字豆柄山

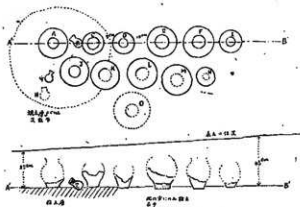
白河市の北方、阿武隈川の左岸一帯の平野中に獨立した一丘陵がある。通俗天王山といひ標高四〇七メートル、南も東西も急斜面で北西方に馬の骨なりに緩傾斜の芝地が覆っている山頂は二反三畝程は平垣地があり、芝地に松が若干生じかつては松樹がうっそうと茂つた共有地であつた。昭和二十四年十二月より開鑿され翌二十五年二月より四月にかけてこの山頂から数多くの彌生式土器その他が発見された。

天王山遺跡地山頂図



- 第四四圖 A アツボ製約16箇 A'1ツボ2 Bツボ1
 米、木炭 A'1土器破片 Cツボ3、米、栗 D破片
 E米、栗、木皮 F破片、米 Gハチ形彩文土器
 等數箇 Hツボ5 I彩文注口土器等 K破片L
 破片 M注口土器ツボ等5ヶ、栗、米 O底部ノミP
 破片 J高杯とその他

A 該地土器の出土状況見取図



第四十五圖

農夫による開鑿であるため遺物の埋蔵状態は確實ではないが、その後の調査によると遺物は数箇所にまとまつて発見されその層位も一定でない。E地点の精査によると表土から地山までは六三センチ、腐植土は三三センチ、焼土八センチ、木炭灰層三センチ、その下は轉土細末の層が五センチと測定される。A地点は最も北に位し、ここには土器が十五箇南北の是位では二例に底部を同じ高さ的口縁部を上にして並列し小型の壺三箇のみ横であつた。底部は五五センチから六五

センチで最も大きいもののみが底部を粘土中にさし込んだような配列で、この土器のみ大きくて不安底な爲に中に埋め、他は水平面においたものと解され、北端には焼土、木炭片が約五センチ程の層をなしていた。其地点はA点の南東に位し、Aと同じく南北に約五箇の土器が口縁部を上にして並列してあつた。その中最も大きい彌生式の瓶形土器は地表から約一メートルの深さの粘土層にうづめ、河原二箇が支え石のように底部においてあつた。この土器は側面に六箇所に小穴をあけて割れ目を皮か織維で補修していたらしく、従つて相当年数使用されたもので流体の容器ではなかつた。この地点にも焼土が六五センチ四方に厚さ七センチの層がみられ、土器の細片が多くみられた。

これに對じてM地点は数箇の細型の瓶が不規則に横倒になり、深さ六五センチの所に焼土の層が六センチから一二センチあつて、そこに炭化した多数の米、粟が散在していた。粟はササグりで二箇所から計三升五合以上あつたといわれる。又倒伏しなつた一土器の底部には水溶液が底に沈殿したまま炭化しているが、科學的に分析してみなくてはわからないが、酒かアワの煮沸したもののである。C地点からは六三センチの深さに三箇の土器と粟、糠の炭化したものが塊状になつて発見され、又地表から四五センチの所から三四重に折り曲げられた厚い木の皮が敷かれたような状態で見えられた。表皮には皮目があるので何屬のものが調査中であるが、幅は九センチ、長さ三〇センチの三重折、一は幅七、五センチ、長さ二二センチ四重に折り曲げられ、いづれも一枚の厚さは〇、〇八、〇、二センチで皆自然炭化している。他の地点からは別種の植物性繊維が出土し、胡枝子、藜殻も若干発見されている。この外注目すべきは沈文のある土製鋳車二箇の外若干の石じ、石鏝、石槍、碧玉製管玉、環状石斧が発見された。土器は前項に詳述しているので省略するが辨形開式より更に古く土師式、須恵器は全くみられなかつた。

この遺跡は平地より約八〇メートルの獨立した丘陵で、三方は急傾斜の小丘の間に念坂南山頂で、南には関山、西に那須連峯、東に八溝、矢祭山、北に烏峠を見渡せるは勝地であるので祭祀遺跡と考へられたが、二十五年十一月二十三日筆

者が地元の應援で小発掘をした結果、徑十センチ程度の河原石を積み重ねた炉が、K地点附近から発見され、各所にある焼土層は相当期間にたまたました跡であり、環石や補修した土器、煮たき用の粗製土器等の日用品も出ているので居住跡と考へられる。静岡の登呂に近い水子遺跡の如く比較的古い彌生式遺跡が山上にある例も多いので、ようやく農耕文化をと入れた彌生式文化人がこうした山頂に住居することも差支へない。しかしなお発見された樹皮や植物繊維のなぞを解き未開墾地点の大発掘調査により埋藏状況を正確にたしかめる必要がある。久田野第四小学校に近い阿丘陵の北東の山麓斜面に縄文、土師、須恵器の復式遺跡があるが、この土器形式と山上の天王山遺跡との土器形式には共通点は見られない。この附近には彌生式の遺跡は少く、僅に五箇村戸、春日から破片が発見された程度であるというが、鹿島神社、うたたねの森附近の土師器の出る遺跡や、附近に多い古墳分布地近傍を調査して天王山遺跡との関連地を発見する必要がある。

(註) この項は白河農藝高等學校教諭藤田定市氏及縣文化財調査委員越二郎氏の共同研究にまつ所が多い、なお挿入の實測図はいづれも藤田氏の原圖である。

(4) 比丘尼堂遺跡 東白川郡柳倉町字康ノ上

柳倉町の西南一キロ、八溝山系より流れる久慈川の上流に面した段丘に俗称比丘尼堂という畑がある。東白川郡沿革誌によると「古矢近坪ノアヲシ所ニエテ(中略)今畑トナリ地中ヨリ古カメ石劍矢ノ根管玉土製ノ曲玉等ヲ出ス」と説明され、明治二十一年九月に多くの発掘品を得たが、更に明治大学助教教授杉原莊介氏が発掘を行つてゐる。縄文末期の遺物と共に存して野沢式にみるような太拙の沈線、すり滑縄文の間に曲線文を多く描いているものが多く、柳倉町井上光雄氏藏の如き優れた大型の埴があり、磨製石斧、石鏝、石鋳等の石器を伴出する。明治大学考古学資料室に数多く保存されているが、その中に石鏝がある。この遺跡の南には塩村の台宿、羽黒館、近津村の高渡、下山本等に彌生式の遺跡があるとい

われるが、久慈川をさか上つてきた関東よりの彌生式文化の標準遺跡として、棚倉式といわれ東北地方彌生式の形式をみる上に重要な遺跡である。

(5) 針 生 遺 跡 安積郡大槻町

福山市の西方大槻町は安積郡内で最も古墳の多く分布している地点で、縄文末期から土師式、須恵式の土器が多く発見されるが、大字望木、雨原、針生の各場内からは平行沈線、波文、雷貫文、三角重文、楕円文等の沈文のある彌生式土器の破片が表面採集され、針生遺跡には時代は下るが須恵器のかま跡が発見されている。郡山市字下釜のアルミ工場敷地工事中に遺跡が発見されたことがあつたが、縄文土器の上層に彌生式土器が発見されたといわれる。郡山市の対岸田村郡守山町大字正直の古墳地帯の南部丘陵にも棚倉式の系統をひく彌生式が大洞A式の外土師器と共に出土する遺跡があり、石版がいくらも発見されるほか珍しい石器はない。

(6) 鎌田の館遺跡 福島市鎌田字町

福島市の北部鎌田小学校、鎌秀院のあるところはお口伝によると鎌倉期に築かれた小さな城館であるが、地形をみると八反田川と耳取川にはさまれた三角州でその中心に小丘陵があり、縄文末期の遺跡で今も附近の水田から土器片、石斧等が発見される。彌生式の土器は学校増築の際に出土したが現在も城館の地表より二メートルも下層からで、素文又は楕円線痕文が多く、縄文のみの粗製土器も混在している。恐らく往時は低い丘陵であつたのが、城館築工の際現在の高さに盛土されて遺跡は埋没されたものであらう。

(7) 金 原 田 遺 跡 伊達郡大田村金原田

大田村小学校の北、大字仁井田の旧阿武隈川(現在水田)に臨む北岸に点々と連続する小遺跡がある。多くは土師、須恵器を出すので大字大泉の古墳地帯と関係ある居住跡であらう。その対岸伊達郡伊達崎村上郡舟場大字下郡の長者畑附近

にも土師器を多く出す彌生式との混合遺跡がある。大田村の東部の山麓大字金原田からは縄文式の傾向の強い彌生式土器が発見され、塚本村の旧阿武隈川岸には縄文晩期の遺跡が多い。

福島縣の北部は彌生式遺跡が少く、極めて縄文式の傾向を強く帯びたものか又は古墳時代に接続する遺物を出し、多くは石器を伴わない。彌生式文化時代の代表的石器といわれる石燈石は福島市泉の道下遺跡、信夫郡烏川、伊達郡大枝村外敷える程しかなく、しかもそれは縄文晩期の土器、石器と共に発見されるので、この辺一帯の彌生式文化時代は極めて短かいものであつたらう。

(8) 後 田 遺 跡 石城郡植田町

植田町の北、丘陵端に植田農業高等学校があるが、同校新築中昭和二十四年に多量の土師、須恵器が発見された、ここは谷一つ隔てた大字後田丘陵には大前方後田墳、字東田にも四墳群があるので、これらに関係ある居住跡であるが、その中に楕円文、流水文、並行沈文、網状文等のある彌生式の破片と他に偏平な携帯用の変形土器、総麻石が出土している。又近時近く勿来町の郡貝塚附近からも発見されて湯本高等学校に藏されている。共に関東の十三台式の系統をひく重要な遺跡である。

(9) 北 神 谷 遺 跡 石城郡草野村北神谷字袖作

草野及び四倉駅から六キ、この附近には旧入江のある低い丘陵が起伏しているが、その中の小舌状の洪積台地が海岸平野につき出した探部に標高六十メートルばかりの丘陵がある。丘頂はチャン状であるが遺物の有無は明でない。多くは階段状の斜面から高杯、壺、甌形の楕円文、並行沈文、雷貫文及び磨滑文の曲線文を主としたものが出土し、中には磐城高等学校所蔵の大きな長頸壺形に朱を彩色したものと平素文もあり、他に須恵器及び縄文土器も見られる。ノミ形の小形石斧、片刃石斧が出土している。

有名な無銘電筒の塚塔の北、高平川の沖積地に近い台地にあり、田畑の耕作中に多くの土器が出土したが、完全なもの
は保存されていない。近くに縄文との混合遺跡もあり、又福島縣第一の大前方後方墳を中心とする円墳群がある。

(四) 彌生式文化の石器

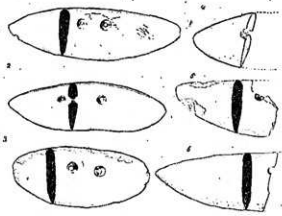
彌生式文化時代の遺物には大陸系のもの、縄文式文化時代から伝つたもの、彌生式において特有に発達したものと
がある。

(1) 縄文式文化時代からの石器

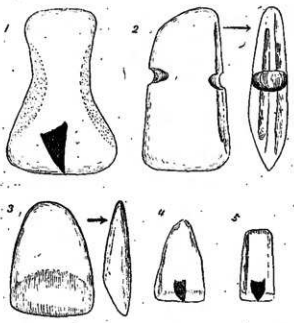
打製石斧は多く縄文式から伝つたもので、石鏃が先づあげられる。天王山遺跡からはアメリカ式といわれる形式が多く
発見された。この時代の石鏃中には磨製石鏃があるが、これは青銅器の影響があるので大陸系である。福島縣では郡山附
近から発見されたという明でない。磨製石斧や打製の扁平な大きい石斧もあり、その中には石鏃もあつたらう。石槍も
あるが数は少ない。又天王山から円形の環状石斧が発見された。どうしたことか石匕の数がへつてくる傾向がある。

(2) 彌生式特有の石器

前記の磨製石鏃がこれであるが外に石鏃、石盾丁というがある。
【石盾丁】は長さ一五センチ、短径五センチ前後の楕形で薄いスレート製である。鋭い刃がつけてあり刃のない方つま
り「むね」に近く二ヶの孔がある。滿州ではこの形の鉄製品があつて高粱などの種をつむのに用いている。このように鎌
に用いる石盾丁は大陸にもあるので、農具と共に伝つた農具といわれる。石盾丁には(1)盾丁型(刃が外にまがる)(2)
鎌型(刃が内に入る)(3)中間型(長方形)と三種類ある。東北地方から発見されるのは(1)の盾丁型である。全般的にみると西



第四十圖【石盾丁】①相馬郡石神村深野 ②阿部小川貝塚
③耶麻郡喜多方町字長内 ④伊達郡大木戸村光明寺
⑤信夫郡 鳥川村八幡塚 ⑥福島市直下



第四十七圖【片刃石斧など】①相馬郡新地村富倉 ②水入石斧
東白川郡城町上遊井 ③石城郡草野村神谷 ④東白
川郡柳倉町 ⑤西白河郡新木

日本に多く東日本に及ぶと次第に数が少くなり、東北では太平洋岸は仙台平野、岩手に及び日本海岸は米沢平野まで分布
している。福島縣では各地域から発見されるが一ヶ所から沢山発見された例はない。農耕が発達すれば石盾丁の如き農具
は数多く発見されてよいはずであるが事實は少ないのは石盾丁に代るに鉄鏃が既にあつたのではないかと思われる。同じよ
うに農耕用としての鋤も水鋸や鉄鋸が既にあつたものと考えられる。特に後期の彌生式遺跡からは全く石器が出ないこと

鉄器の存在は事実であつたろう。

【片双石斧】彌生式遺跡からは縄文式系の太形給及の第三型といわれる磨製石斧も時折発見されるが、鋭利な磨製の片双石斧があるのが特色としてあげられる。この種の石斧の退化形式と考えられる小形のものは「のみ形石斧」・「かんな形石斧」ともい、これも大陸型であるといわれる。



第四十八圖 磨石【紡錘車】

①土製石城郡藤田町埴田
②土製白河市天王山
③石製双葉郡百間沢

【紡錘車】円錐状の土製紡錘車が縄文末期にあらわれていることは前章において記したが、それと異り彌生式土器の分布内で二種の土製品又は石製の遺物が発見される一つは扁平円板状のもの、他は俗に「へそ石」といわれる上の方をきつた円錐状、つまり断面が梯形をなし中央に孔のある円形のもので、兩者とも大陸風の紡錘車で古墳からも出土する。南御山、天王山や郡山の彌生式遺跡からは平織の庄痕ある土器破片底部が発見されているので彌生式文化時代には麻等による平織の技術は相當進んでいたことが考えられ、農業と共に彌生式文化の大きな特色である。

【玉類】彌生式時代の装身具は縄文式程度複雑なものがなく発見例が少ないが、南御山遺跡から細形と太形の碧玉の管玉や古墳時代の勾玉に似たものが石器時代勾玉と共に多数発見され、最近天王山からも管玉が発見された。

【その他の石器】彌生式の石器には青銅器の形をまねた石槍、石剣や小刀ともいふべきもの等があるが東北地方には少く僅に石錫は宮城縣伊具郡金山町河原園から約二十センチの鐵錐型で柄のあるものと第二回を通り南会津郡田島町向上から全長三七、五センチの銅剣型の石剣が大正九年十月発掘されている。他に宮城縣からは青銅斧にた有角石斧が発見されている程度である。東北地方の彌生式文化が中心地より外れ、普及した時間が少かつたことを物語っているのである。

五) 彌生式文化の金屬器

後期の彌生式の遺跡からは石器が全く出ないし、古式の彌生式並に縄文式文化との接触遺跡からも限られたものしか出土しないのは既に石器以外に木製品は勿論金屬が使われていたと考えられる。事実西日本の彌生式遺跡からは青銅器が発見されるので彌生式文化は新石器時代の最も新しい時期で、金石併用時代といわれるのはこのためである。金屬器のうち青銅器が特に知られている。鏃、劍、槍、ほこ、鏡、銅鐸等がある。銅沢の分布は東は静岡縣・北は長野縣で、東日本には発見されない。おそらく伝わらなかつたものと考えてよからう。東北地方からは全々金屬器は発見されないが、鉄器は青銅器と同時に使用されたものと考えられるが、古墳時代の石室のような特殊な保存法がないために腐蝕して残らなかつたものと思われ。

彌生式文化概観

彌生式文化はその最初は純然たる石器使用の時代で伝統的な縄文式文化の影響を受けているが、間もなく金屬を知るようになり大陸文化が濃厚になつて、縄文式文化の影はいつしか消えてしまふが、貝塚は相馬の小川貝塚、石城の藤原川流域の諏訪神社裏、大原貝塚寺の例もあり時に貝類や鰻魚肉も食つて縄文式文化に似た生活が営まれていたようであるが、いつしか牧畜が行われ農作物を作る技術が入り、白河天王山遺跡のように米や酒が発見され、稷の庄痕のついた土器があることにより知られ、織物の術が進歩して衣服とした布が織られたとみえて土製の紡錘車があり、又縄文土器の底部には平織の細かい柔かい繊維の跡がついている。農耕特に水稲を栽培するようになつてからは彌生式の部落は水に便利な低

地へ進んでいるのは金津盆地や縣北の信達平野の遺跡にみる通りである。住居は同じく竪穴式であることは静岡縣の登呂によつて知られるが、平地住居式も高床式の木造建造物があり、又特殊な住居としては縄文式文化に少しはあつた洞穴住居が、彌生式にはむしろ多いようである。岩手縣や宮城縣にそのよい例がある。(註 縄文式文化の洞穴住居層のこと)

採銅治金の術も心得るようになり金屬器のうちでも鉄器使用が盛になり、木器木製品が多く、土器の成るものの形が木器として作られるようになり、その遺品が唐古や登呂から多く発見されている。この外貝器、骨角器もあつたことも考えられる。

【彌生式文化と大陸】

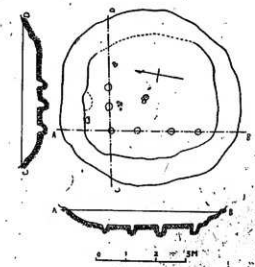
縄文式文化もわれ／＼の遠い祖先の文化であるが、とりわけ彌生式文化は現在の私どもの生活に近い、極く親しい間柄であるのでこの文化こそ日本文明の発祥を意味するものであり、われわれの生活にすくなくとも二千年以來の伝統のあることを教えてくれるものである。それのみではなくこの日本文化の黎明期には大陸との關係なしには説明出来ないものがある。広い意味でいば縄文式文化も東亞文化圏の一ではあるけれども、彌生式文化が縄文式文化とかなり異つた進歩した文化や生活をしていたのは直接或はより近い間接に大陸の影響が及んでいる。遺物の項でしばしばふれているが、石彫丁、紡錘車、青銅器(冶金術)みなそうであり、漆棺、漢鏡、貨幣、ガラス製品、漆器、各種の鐵器がそうである。九州の志賀島からは漢の圓から屈つた金印があり、これらは中國の漢代以前に行われたものが多いので彌生式文化時代は單に日本文化の曙であるばかりでなく、すでにその文化はすくなくとも東亞の文化圏内にあつた。

しかしすべてが大陸文化の直輸入ではなく伝統的な縄文式文化がかなり濃厚であり、彌生式文化にはわれわれ日本人の間にも、またアイヌ人の民俗にもいちぢる／＼共通したものがあるので、農耕を主としていた彌生式文化が何時頃どこに發生したかという文化の起源については今後の研究にまたなければならぬ。

先史時代の生活

前章までに、われ／＼の遠い祖先、古代の人々の生活した遺跡、使つた遺物について個々に説明したが、さて古代の人々はどんな生活を身につけていたかを総合的に説明しよう。

(一) 住居について



第五十三圖 【た穴】
相馬郡大野村塚部(土師器出土)

千古斧をいれない大原始林が野を覆ひ、山をおほひ、果しなく広がる大地は響をいたゞく高山に連り、さては波のきらめく海岸線までうら綴っている原野、その切私どもの遠い祖先はこの自然の中にあつて草をわけ、木を伐り倒して道なき山を踏み分け、谷川をよちて來る日も又くる日も食物と安らかな住居を求めますらつていたのでありまじようやがて水のはほとり出る。それが川縁であろうとも、山奥の池や沼の畔であろうとも、日当りのよい風の當らない山ふところに一先づ腰を落ちつけ、とうさの生活の根拠地としなければならぬ。先づあたりの木や草を刈り地面をならし、いくらか地中を掘りくぼめて土の室をつくり、それにくいつかの荒木の柱をつつたてて、やがて草の屋根をふく。こうした獨立小屋が古代人の最初の家であつたでしょう。

う。これを考古学では竝穴式住居といいますが、いつ頃からはじまつたのか今のところ早期の住居跡はつきり知られていない。発見された縄文式文化の前期になる竝穴をしらべると柱の穴があるから、柱を立て上に「はり」の木を横に渡しそれを台にして屋根の「下地」を組み、上には小さな千木もあつたことでしょう。屋根は地面までふき下していたのだ。こういう屋根のある竝穴を天堦根元造と呼んでいる。この形式の「いも穴」はどこかの農家でもみられるが、私は福島縣南会津郡の伊南村一帯に昔の竝穴住居と全く同じな「堆肥小屋」をいくつもみきました。縄文式文化時代の中期の竝穴のプランは凹形か楕円形で、柱穴が五つ六つ周囲にあり、屋根の形は凹錐形のように考えられる。いづれも縄文式時代には炉が中央にきつてゐるのが普通である。

彌生式文化時代も竝穴の家があり、平地の上に家をつくる人々も多く、登呂の人々は板を作っていますから板で床をはることも考えたことでしょう。彌生式の竝穴は矩形で、柱穴も左右に二つあるのが普通であるから屋根の左右両側にふき下し、前と後は草のかべにした「切妻造」であつたらうと考えられるので縄文式文化とは異つた形式であつた。又彌生式の人々は穀物をしまつておく倉庫があり、床は二メートル以上も高いので、はしごが使われているのが銅鐸の絵にみられる。床の高い倉庫は現在アイヌ人が使用し、又正倉院の校倉造もこの系統であるからこの建築は古くからわが國に行われていたものでありましよう。福島縣からは縄文式も彌生式も住居跡の完全なプランが見されていないので明でないが、南会津の只見川上流の山奥にある開墾地には竝穴住居に近い「出小屋」という開墾小屋がある。地面までふき下した切妻の小屋、立てば頭がつき当るような低い天井で、中には枯草をしまきその上に蓆を敷き、入口近くの土間に炉を切つた家がある。せいぜい三坪以内の小さい小屋で中では編物や藁仕事をす位の夜寝るだけの小屋でここに雪消えの六月から十月まで焼畑開墾をやる。ブナの密林の下草、樹木を切り拂い、大木の枝を切り落し、お盆前の乾燥した頃に火を放つこの焼畑を耕して栗やきび、そばを作つて雪の降る前に木村の檜枝坂村に燃るのである。草ぶきの屋根の代りにブナを一

メートル余の長さにつつたのを板に割つて段々に重ねて屋根とし、壁も同じものを破目板にしている所もある。今のよう
に鉄器がいくちでもある時代でもころした山奥では専門の大工がないので自分の力と仲間の手助によつて昔ながらの家を造つている。檜枝坂の本村にある倉庫は皆板倉で、屋根も壁も板側である。もつとも木村の板倉の破目板は鋸でひき、かんながかけてあるが、屋根は昔ながらの板である。手頃のブナを「メートル程に切り、鉄の刃物で年輪にそつて割れ目をつけ、そこに木の「くさび」を打ち込んで板にするのである。先史時代には鋸もかんなもなかつたが、工夫すれば石斧とくさびでも板は立派に作られたはずだ。この村は高冷地であるから米も作られないし、耕地が少いので開拓地に夏の間だけ「畑畑」を作り冬は本村に帰るのである。つまり冬の家と夏の家と二つ持つている。冬の家と夏の家で思ひ出されるのは日本書紀にある蝦夷の生活である。紀元六五九九年に唐の國(昔の中國)に蝦夷の男女二人を送つた時唐の天子と日本の使のとり交した問答が記録してあるが、それによると「えぞには家がなく深山の木の根もとに住む」とあり、又それより古い紀元一一一年の條に「えぞは冬は穴にねて、夏は木に巢くら」と書いてあるのは誇張しすぎではないが、えぞの住居は先史時代の住居に近い原始的なものであり、極めて簡單で温気が強く保護もよくない家であつたことが想像できる。

(二) 衣服と飾り

一【着物】 筆者の少年時代——つまり三十年位前は冬はもつと雪が降つたように記憶している。最近では冬が暖く雪が少いのは暖冬異変であるといつて太陽の黒点のせいだ、八十一年目にこうした暖い冬があると氣象学者は説いているが、考古学者の中には七百年周期説という、氣温の変化は七百年を一期として大きく変化している、と記録や植物の年輪考古学的遺物から假説をたてている人があるが、縄文中期はじめの大木式の頃は温暖であつたことは松本博士の大木貝塚

宮戸島鳥塚の研究によつても明な事案で、後期期になると寒冷となつたといわれている。原始時代の人間は自然の委と
して別に衣服がなくとも樂に暮せたことであろう。縄文式文化時代の土偶にパンツをはいた裸の人影があるのは暖い頃の
ものであろう、また遮光器土偶というのが有る。眼が極端に大きいので、エスキモー等が使つてゐる雪の紫外線よけの
眼鏡であらうという説が古くからあつたが、二百年程前の徳川時代末期の旅行家で、菅江真澄という人の記録に出羽の国
で夏の仕事には、ブユ、カが多くて作業が出来ないので眼鏡をかけてやつてゐることが書いてある。同じ頃の南金津風俗
帳には畑仕事をするのに、ブユが多いので腰に「蚊しぼ」というものを下げ腰をいぶしてブユ、カを追つたことが書いて
あるので大昔は特にブユ、カのように熱い時発生する害虫が多かつたように考えられるので、遮光土偶は雪の多い地方の
風習ではなく、反対に害虫の多い熱い季節が象徴された服装であるように筆者は考えております。

先史時代の人の服装を知るには遺物が残つていないので調査には困難であるが、土偶はその手がかりになるものです。
しかし土偶は極めて象徴的であり、又宗教的なものであるから、作られてゐるものの形態、文様は形式化され、必ずしも
実際の衣服ではないようです。日本書紀によると「えぞ」は「毛を衣とし血を飲む」と書いてあるが果してえぞが鳥獸の
毛皮や羽毛を着ていたかは疑問があるが、原始的な衣料は毛皮であつたことは事実であつた。毛皮はそのまま身体にひつ
かける場合もあつたろうが、今日の着物のように縫い合せの場合もあつたろう。冬になつて狩に出る時にはモンペのよう
なものが作られたものと考えられる。それは獸の脚をみれば別にむすかしい工夫ではなく、モンペの古い形である会津の
「猿はかま」はさうもそのような感じがする。そして上衣はゆつたりと腰の辺までできていたもので、上衣とズボンから
昔の衣服は出来ていたように思われる。

柔かい細い繊維の織物が先史時代のいつ頃からあつたかはむすかしい問題である。縄文式文化の末期頃には織物という
よりはむしろ絹物に近い綾織を主としたもので、布幅も僅か十七センチ足らずの小幅のものであつたろうといわれる。彌生
式時代の土器の底部に平織の織物の痕がついてゐるし、又糸をつむぐに用いた紡車「へそ石」というのがこの時代か
ら古墳文化時代にかけて発見されるので、彌生式時代には織物の技術もすすみ、幅も増して来たようである。絹や木綿
のない時代は、麻や「あかそ」に似た草や「かじ」とか楮とかの木皮からとつた糸で織つたのであろう。今でも農家で
はシナの皮やクス、フヂ等の繊維で織物し、餅つきの時「せいろ」の底にしく「あげの(あけ布)」はこうした古い織物が
現在に残つてゐるものと考えてよいでしょう。

着物の形式には、一枚の布を右か左かの肩から反対側の脇の下を通して背中を斜にもとの肩の上にもつてきてうちかけ
ておく「けさ衣」というのと、幅七、八〇センチで長さ二メートル位の布を二つ折に折目の中央に孔をあけ頭を入れて
着ると、二つに折れて身体の前後にたれる「貫頭衣」という二つの形式があるが、彌生式時代にはたしかに貫頭衣の着
物をきていた。この着物の脇の下をぬつて袖をつけ、波は袖を刺り脇の下をぬいげ今日の洋服や和服となるのである。

2 「髪とかぶりもの」 先史時代の人が頭の毛をどんなようにしていたかは明かでない。土偶によつて想像するより
外はないが、何度も説明したように土偶は必ずしも寫實的でないので確ではないが、女は後で丸めたようなもの、島田ま
げをつぶしたようなまげを結つていたようである。男は袴主題であるが何か帽子のようなものをかぶつてゐる風にも考え
られる。時には今の台湾島人のように獸の頭部の毛皮をそのまま帽子にしたようにも想像される。髪には骨や角で作つた
櫛やピンのようなものも用いたことは、骨角器の項で説明した通りであるが、竹の櫛や花などもかんざしにしたこともあ
つたろう、青森の是川の泥炭層からは竹櫛で朱漆のぬつたものが発見されてゐる。

3 「飾りもの」 遺物の項にもべたが、石器時代勾玉といわれる美しい石の玉があり、管玉や丸玉も首にかけたこと
であらう。土偶に玉かざりをつけたものがあり、土製の白形耳飾、丸形耳飾、貝の腕輪、腰飾などもあつて身体を飾つた
飾り物ではないが、先史時代の人が入浴してゐたのではないかといふことは色々想像され、中国の記録にも彌生式頃の

日本人が入居していたとあり、唐の天子がみた「えぞ」は異様な身体、顔つきをしていたとも書いてある。本書には時折蝦夷の風俗を出しているが、えぞは決して先史時代の人ではない、とうに鉄器を使っているのですから時代が違います。がえぞの風俗の中にいくらか先史時代の風習が残っていたらうと考え、想像の手がかりにしているのである。だからえぞが或はえぞに近いアイヌが入居しているから直ちに先史時代の人とも入居していたと断定するのはない。しかし土偶、土面、土版などの中には点線や曲線の模様がかいてあるので、入居していたのではないかと想像するだけで、実は稀に見られる人骨もあつても皮膚が残っているはずはないので確実なこととはわかつていない。

(三) 先史時代の食物

くさるものや廢物を残さないものは考古學では調べることがないが、貝塚や遺地遺跡又は特殊な遺跡から発見されるたべかすから考える。縄文式文化の人々は肉食を盛にし、彌生式の人々は植物食、ことに穀物を食べていたようである。

「縄文式文化時代の食物」原始的な頃は手近にあるものは何でも食べていた。といはれそれまでであるが、食物も自らある種の制限があつたらう。野山に自生している植物の果物はそのまま食べた。たらうが、山いもは焼いて食い、とじ、くるみ、しい、栗などは一應石具、石臼、石臼、石臼、たつき石でつぶして粉とし、それに若葉や若い葉、新芽などを入れて餅子として焼いたり、あぶつてたべたらうが、中期頃の土器では鍋に使つたようなものも発見されない。後期になつて餅に使つたらしい土器が発見されているので、煮たきするようになったのは進歩した食法であつた。口絵第三回(福島縣河沼郡川西村カマド原から発見されたもので、胴は太鼓のようにふくれ、底には木の葉のあとがある土器で、図の如く上部に多

くの小孔のある皿がついていて注口がある。植物質の汁をしぼつて注口から出す一種の濾過器のような役目をしたものであつた。

縄文式文化時代に最も好んで食べたのは肉類で、それも鹿、猪、兎、熊、狸、狐、猿などの獸肉で、それに魚、貝、鳥の卵なども多く食されていた。前期縄文式文化の貝塚の人々は主に浅い海にすんでいるハイガイ、ハマグリ、カキ、マデガイ等をたくさん採っていた。時代がすすむと魚の採集が盛になりワリ針やモリが発見され、網を工夫し、土や石製のおもりを作つてワシのようなものを難なく捕獲する方法も考へ、また相馬の福浦貝塚、石城の夏井村下大越貝塚等からは鯨の骨が発見されるので、遠洋にでて大きな鯨や、カツラ等をとる冒險もやつたようである。これらの肉は茹でやき、火にあぶつて食べたのであつたが、味付けはどうしたものであつたらうか。

海岸の人々は海の水をそのまま使われるし、少し進歩してくると天然の鹽からヒントを得て簡単に鹽を作ることを知つたらうが、山の中や海から遠い会津などではどうして味付の材料を求めたのであつたらう。会津には耶麻郡大庭村、大沼郡横田村、南会津郡伊北村等に鹽分の多い井戸水があつて今もそれから鹽をとつているし、山中には岩鹽がある。南会津の江川村の「高し」には岩鹽層が露出してあり、その近くに縄文式文化時代の遺跡がある。しかし先史時代の人々がこれらの鹽井や岩鹽層の附近で鹽を作つて利用したという証拠はない。そうすると、海岸から幾百キロも離れた山の國では必要な鹽は物々交換によつて求めたのではないかと考えられる。太平洋岸から阿武隈山脈の山中の谷川に添つていくつかの縄文式土器の分布が見られるので、或はこれらの地点が、山の國と海の國とを結ぶ大事なルートであつたかもしれない。しかし鹽を求めるといふことはよほど進歩した後の時代で、動物をかくもわかる通り鹽をたべるのは牛、馬等の大きな家畜のみで、野生の動物は鹽分の必要がなく、又動物の肉には自然の鹽分がふくまれているので、古代の人々は今の人類程鹽は要求しない時代もあつたらうと思われる。縄文式時代の末期頃から、ばつ／＼と原始農業が行われ、焼畑開墾によつて

ヒユ、キビ、アワや陸稻、麦が栽培され、米食や、植物性食料を中心とする頃になつて鹽分の必要が多くなつたものでありましょう。

2 【彌生式文化時代の食物】彌生式の時代は農業を行い、植物食をやつてゐることが第一の特徴であるが、肉食をやめたわけではなく銅鐸の餘のよりに狩もやつてゐた。しかし何としても新しく大陸から入つた農業に力を入れ、米だけではなく、アワ、ヒユ、大豆は稻よりも古くから作られ一般化してゐた。その外に、大麦や小麦も遺跡から発見されてゐるので栽培された主要な食物となつてゐた。福島縣河沼郡柳津近くの第三紀中新層の砂礫中に麦の先祖と思われる化石が発見されたことが報ぜられてゐる。この化石によると食料に供される程度の実もつてゐるが勿論人類が現われる以前のものである。現在の學説では麦は米と共に大陸から渡つてきたものとされてゐる上、筆者はこの化石をみてゐないので更に調査する必要があるが一應紹介だけしておく。(『観清堂』会津における石器時代参照)

米や粟はどんな風にして食べたかといふことは大きな問題であるが、「こしき」つまり「せいろ」の役をする土器で蒸して食べたのであるといわれるが「こしき」は意外に見られる例が少ない。福島縣内で発見された「こしき」は数箇のみでそのうち石川郡桑村小高からは炭化した米が沢山入つたまま発見されているが、いずれも古墳時代の土器に屬するものである。むしろ飯は後になつて大陸から伝わつた食法で、始めは土器のなべてたいた「かゆ」であつたようです。又米を「焼き米」にして食べたこともあるように思われる。ヤギノメは今も農家の年中行事のうちに苗代に種まきする時苗代の水神様に上げのお祝につくるので、水にひたした根をそのままなべに入れてかき廻しながら「こしき」これを臼に入れて親殺をとりさつたもので、昔もこれに近い方法で食べたこともあつたらう。こげた米が土器の中に入れて発見されることもまたあるのは注意を要する。白河の天王山からはたいた飯のようなものが発見されてゐる。

又粉食もやつてゐたが、彌生式の遺跡からは石皿は発見されないのは木製の臼や杵があるから、杵の脱皮、米の精白と行つ外に粉もこの方法で作られたことが想像される。植物性食料を食べるようになると、食鹽の需要がまし、又山椒のような辛いものも好んで食はられたと見えて青森縣の是川からは山椒の寒らしいものが土器に入つて発見された。食料と共に考えられるのは酒で、俗に「藤の栗酒」といわれる山奥の木のうちろに葉が栗をかみくだいて酒を作つてゐるといふ伝えられるが人類も偶然のことから果物の酒を作り農業が行われてからはアワやキビや米でも「どぶろく」を作ることが古代から行われていたようです。

(四) 先史時代人の生活

1 【縄文式文化人の生活】縄文式文化の人々は農業をやつてゐなかつたし、勿論商業も工業もなく、古い時代になればなるほど人は食ふことが毎日の生活であつた。海岸に近い人々は貝や魚、海藻をとり、川や沼辺の人は川魚やシミ貝を、そして野原に出ては木の葉や芋をとり、若草や新芽をつみ山菜に登つては動物や鳥を射、おとし穴を作つて大きな鹿や熊をとつてゐた。つまり自然界のものを集めて生活してゐたので、こういう時代を、採集經濟(拾集經濟、狩猟經濟ともいふ)の時代といわれる。

えものをとるためには石で槍や矢の根や斧等の石器をつくり、肉や木の實を貯藏し料理するために各自が土器を作る。このように古代の人は食物を手にするを中心として生活し衣料や住居を考えてゐたのであるから大部落をつくる必要もなく、むしろ大きい村では自然の食料をとるにはかゝつて困ることが多かつた。また農業をやつてゐないので個人的な土地の所有といつたこともなかつたであらう。何年かその土地で生活して、えものが少くなり、又生活に不便なことがあつると簡易な家財道具をもつて別の土地に移る。つまり同じ所に先祖から何代も住むという定住するものが少かつた。それが末期になるとヒユ、アワ、キビ、ムギ等の穀物が作られ、彌生式には陸稻や水田が作られ、他にモモ、カキ、ブドウな

どの果樹もあつたことは遺物として発見されるので、後にはこれらも農耕の対象となつた。農薬とともに牛や犬などの家畜も阿われ小規模な牧畜も行われていたことも考えられ、大畑貝塚や亀ヶ岡の史前泥炭層からは、日本犬の骨、宮城縣舞仙部の細浦貝塚からは後期縄文土器と共に馬の骨が発見されている。

2【彌生式文化人の生活】 彌生式文化時代は農業がはじめられていた。土地によつては縄文式時代の米にも米を食べていた証がある。彌生式の最初はまた石器を使つていたが、金属を使うことや農薬を嘗むという新しい農業が大陸から渡つてくると、急激に生活の様式が変り山野や海でかりをすることは同じく變つていたが、沼や川に狭く田には稲が作られ、その近くの丘の棚や家の周囲にはアワ、ヒユや粟等が作られ、秋になると刈りとり調整して倉に貯蔵することが行われた。登呂の人々は板千木の櫓で囲めた畦によつて六百坪又は四百坪ほどに区割された水田があつた。このように生産経済の世の中になると一定の土地が必要になり他の人との間に生活上の「まきてしをきめる」必要がある、共同作業を行う場合が多くなるので彌生式文化時代には大きな部落ができ、その中には力の強い、智えのある人が指揮をすることとなり縄文式時代の「かしら」よりは一そう強力なものとなり、村中の收穫の何分の一かをとりあげ、支配者は物質の富がますますふえる傾向が生じてきた。つまり歴史でいう氏族制度がここに芽生えて貴富の差、支配と被支配の階級の別が生じてくるようになる。次には分業が行われ、食物をつくる仕事をしないで色々の物をつくる仕事に目を送る人々が出来、鉄工業、銅工業や土器を作る専門家があらわれて、次第に整備された集團的な生活が発達して来た。

東北地方の農業はいづ頃始まつたか

1【寒冷地の稲作】 稲は神話によると設された神様の雨の眼から生じたといつているが、もともと稲は南アジアの原産で大陸から渡つてきたものである。古い學説では日本民族は南方系で稲もちかに南方からやつてきたように考えられていたが、古代の遺跡から発見される稲の形から考えると、北方に栽培されていた大陸系の水稲(朝鮮、滿洲米の如きもの)と南方系のものとの系統が見られる。彌生式文化時代の人人は新しい文化とともに稲を日本に移し、それが寒冷地の東北地方にまで栽培されるのには長い年月といろいろの苦心があつたことである。たとえ彌生式文化人であつたとしても萬人が皆この米を食べていたかは問題である。縄文式文化人は米を彌生式文化人からもらい受けると虎の子のように大切にしてくれをむさばり食べたのでありましよう。青森縣の亀ヶ岡遺跡からは米が三つの土器に入れて保存してあつたのはそのよい実例であつた。こうして縄文式文化人も稲をもらい、農耕の技術を習つて自分で稲を作るようになったのにならぬ。

筆者は今なお米の出来ぬ南会津郡檜枝岐村を観望したことがあるが、進歩的な青年は何度か苗をもらい、親をまいて稲を作らうとしたが海抜四〇メートルの高地では寒らないうちに霜がふり、雪に倒されてしまふ。檜枝岐の奥の團立公園で有名な尾瀬ヶ原には新海縣方面の人がこの濕地帯に稲を作つた、その丈五尺にのび実がたわむつたと思つたら一夜の霜で失敗してしまつた伝説があるのは、尾瀬ヶ原の池畔を「田代」とよんで稲田のような形をしているので生じた伝説かもしれない。それでも檜枝岐から二十八キロもはなれた大津波という十戸ばかりの部落や姫郷の部落では近年ようやく稲作が成功して小さい田圃が何枚か作られていた。こうした山間寒冷地帯にはそれにあつた品種が選ばれてゐる。徳川時代の品種に「ヨシシ(香し)」という品種が会津にあつた。田植をしてから四十八日で稲刈が出来るので俗に「六八」といわれた。この品種は收穫が少ないが香がよいので秋祭の初穂に用いられていたといわれる。大正のはじめ頃であるが南会津では在來種は收穫が少ないので品種改良をすることになり、南の栃木、茨城兩縣からよい品種を移したが失敗した。ようやく実のついたのは五年も経過後からで、しかも收穫は在來種と大した相違がなかつた。それで次には北方の山形

圃からもつてきたのはその秋には立派に実つた事実がある。北海道の旭川盆地や北滿洲の盛産帯地方に新しい科学の力を利用して稲を作るには非常な努力が行われたといわれる。まして二千年の昔、はじめて稲を作つた人々が自分の力で一握の米を手にすることが出来るまでにはどんなに苦勞したかは想像以上であつたらう。しかも縄文式文化の榮えた中期末の氣候は關東地方でさへ今の東北地方と同じような氣候であつたといわれる。当時の東北地方は更に冬は寒く雪が多かつたことであらう。幸に夏は高温多湿であつたので稻の成長にはよいがこの季節が最も忙しい農作期であつた。今も金津地方では那羅郡の鹽川辺が田植が最も早く、そして稲刈も最も早い地方である。その上古代は農業の技術が低かつた上數年に一度は必ず凶作におそわれているので、後に大和朝廷が東北開拓に多くの兵士や農民を送つてくるようになった(紀元七〇〇年頃)でさい國史には凶作の事が數多く見うけられる。福島縣や仙台平野はその点いづらかよかつたが、日本海岸はなかなか困難であつた。紀元八〇四年(延暦二十三年)に羽田國が奉つた報告によると「秋田城を作つてから四十餘年になるが、土地はやせて五穀がよく出来なから秋田城を捨てて河辺府に遷く」ということが記録されているので平安時代になつても稲作はまだ東北全土に及ばなかつたことがわかる。従つて原始的な生活をやつていた蝦夷は農業を知らないのが大部分で、そのようなまを「山夷」といい、農業を営んでいるまを「田夷」とよんでいた。歴史時代になつてもこの狀態であるから先史時代の米作がどのようなであつたかは想像されよう。

2 【稲作をしめす遺物と遺跡】 米や根を出土する古代遺蹟は最近數多く報告されている。温性遺跡や炭化した米の外に土器の表面に附着した痕などがこれであるが東北地方でこれまで知られていた発見例は次の通りである。

一、青森縣龜岡遺跡 亀ヶ岡土器三箇に米が保存されてあつた。外に亀ヶ岡式及び亀ヶ岡式直後の土器に根の痕のあるものがある①。

二、秋田縣仙北郡千屋村小森山堅穴 縄文式堅穴を二個発掘したが、一には穴の北側に根と大豆の自然炭化層があり

他の穴の南側には自然炭化した根があつた②。

三、秋田地方 土器に根痕の附着したものがあつた③。

四、岩手縣一方井村字今松堅穴 土師器底面に稻の莖葉と根の痕がある④。

五、宮城縣多賀村大字辨形園貝塚 辨形團式土器の底面に木の葉の痕と根の痕とがある⑤。

六、仙台市小泉遺跡 同じく辨形團式の彌生式土器に根の痕がある⑥。

七、福島縣那須木幡村字東原堅穴 一ノ戸川溪谷に臨む桑園に堅穴跡が発見されたが、根痕の残つたものがあつた。縄文末期と彌生式の混合遺跡である⑦。

八、阿東白川郡豐里村東郡大高平遺跡 福島縣の最南端茨城縣に接する久慈川の狭い平野に臨む吉状台地で、小学校敷地より発見された九溝手の素文縄文土器の側面に根の痕とがある⑧。

九、同伊達郡伊達崎村子上郡舟場遺跡 桑折町の西南阿武隈川畔に彌生、土師須恵器が多數発見された居跡があり

その出土品中土師器の深鉢形及び皿形土器に根の痕、禾木科植物の莖葉の痕がある。(口絵寫眞第五回参照)

十、石川郡桑村大字小高子高原の北の内 土師器の底部に小孔が一〇箇ある。「こしき」の中に自然炭化した米が沢山入つたまま発見された。(八六頁参照)⑨。

十一、白河市天王山遺跡 (九六頁参照)⑩。

十二、石城郡内郷町光明寺下遺跡 土師器三箇が発見されたが、その一つの底部に木の葉と共に根の残痕がある⑪。

十三、北金津郡南御山遺跡の彌生式土器に根の痕がある⑫。

以上僅かな資料であるが、これによつて東北地方の農業は縄文末期に、農業開始の條件がそなわつて一部は既に農耕文化に入つて稲作を行ひ、アワ、キビ、豆、麦等の畑物はそれ以前の——(縄文中期頃かし)——小規模な農耕を行つ

ていたことが想像される。⑩

【附】河沼郡八幡村発見の模造付土製品は縄文式文化時代のものではない。

河沼郡八幡村寺八幡宮を中心とする一帯は縄文より土師器を出す複合遺跡であるが、ここから長さ十センチ最大径三センチ程の円筒状の表面に模造の沢山附着した土製品が発見され、明星一号及び日本原始農業に掲載され、又福島縣史跡名勝天然記念物報告書第五輯に「彌生式の先行遺跡」とし石器時代の中期以前と鑑定し、土器製作の過程において輪状類似の作業中粘性防止の一方法として使用せる模造着痕の一例にして、又其着痕に興じて他の土製品と共にかまき内にて焼成せるものと記しているが、この土製品は果して伴出した土器により縄文中期のものであるかどうかは疑わしい。この類品は筆者の手もとに次の地点から発見されている。

- 1、伊達郡伊達町瓦焼場
- 2、信夫郡飯坂町鬼越
- 3、福島市腰濱字宿
- 4、安達郡二本松町萬古焼陶工所
- 5、田村郡守山町大善寺
- 6、同郡三春町本町熊田文一氏旧蔵。

右の六例のうち大善寺は古墳からも出土したというが信がおけなく、熊田氏のは出土状態不明である。飯坂は附近に縄文遺跡があるが発見ではない。腰濱は瓦出土地であるが古瓦との関係は明でない。しかし伊達町の瓦焼場は近世のかまど跡で「二本松萬古焼では今もなお摺鉢を多量にやく際、陶器の粘着を防ぐために柔い粘土に模造を附着させたものを間にはさんで重ねるので「覆だんご」と稱している。この例をもつても、八幡村の土製品が縄文式時代のものと断することは極めて早計である。覆だんごの使用の上限が明にされない現在、この資料をもつて縄文式時代に稱作が行われていた証拠とする事は危険である。

【註】① 森本六郎氏「原始發達新論」

② 小野武夫氏「日本農業起源論」

③④ 日本文物史

⑤ 長谷部言人、山内清男氏ら発掘、東大人類学教室藏品

⑥ 東北大学蔵伊東信雄氏教示

⑦ 二瓶清「全津における石器時代」

⑧ 岩越二郎氏採集

⑨ 阿武隈考古館蔵

⑩ 菊地康雄氏発掘調査

⑪ 梅宮茂「社会経済史学」復刊一號

(五) 先史時代の信仰

未開地の土人の風俗をみるとそうであるが原始時代にはすべて當時の才智では解決つかない自然現象や、人間界以上の力のあるものはずべてカミとしてあがめた。すべての物を明るく、なごやかにする太陽も、荒れ狂う暴風雨もそうであり、又生活に最も関係のある山仕事——狩については山の神への信仰は非常に強いものであつたらう——現在もなお山で仕事をする人は山の悪霊にとりつかれないよう、收穫が多くなるよう種々の食物をあげ、それぞれのあ守を肌につけていながら先史時代には特にそうした風習が強かつたのではないかと想像される。土版や岩版はそうしたものであつたし、熊や猪などの動物土偶は狩に関する信仰のあらわれであつたらう。古い人物土偶は奇怪な形をし、下げ紐穴のあるのも同じ意味の信仰的なものであつたかもしれない。安積郡下では土偶の周囲を手頃の石で取りまいていた遺跡があつたが、こ

れは土偶が信仰的なものであることを示す重要な遺跡であった。

1. 祭祀遺跡

「信仰遺跡」としてはそれらのカミを祭つた「祭祀遺跡」とよばれるものがある。秋田縣大湯町で発見された、ストーンサークル（環状石）やメンヒル（立石）などが北海道及び東北地方の日本海沿岸にあり、山形縣小郡山、同八幡原にもこの巨石文化がみられる。又別系統といわれるのが宮城縣氣仙郡細浦貝塚にあつて小規模な環状列石が人骨の周りにあつた。福島縣内にはこうした巨石文化に屬する遺跡はないが、立石といわれて古くから信仰されたものが幾つかある。相馬郡八幡村大字坪田字東越遺跡は早くから注目された所である。祭祀遺跡として注意したいのは彌生式文化になつてからである。北金津野門田村南御山の彌生式遺跡は、会津盆地を通して飯豊の高峯を眺める傾斜地であるが祭祀に使つたと思われる土器の外に意識的に破壊した管玉等が幾箇所か穴をほつて埋められていたし、白河市天王山遺跡は白河平野に孤立した小丘陵であるがその山頂に特殊な遺跡が発見された。（九九頁参照）

2. 先史時代人の墓

人骨がこゝろは貝塚のような特殊な場合で、他は発見された例がないので、貝塚の人骨の埋没状態から当時の葬風を知らなければならぬ。相馬郡駒ヶ嶺村の三ツ地貝塚には三編の屈葬体の人骨が発見され、宮城縣の宮戸島では老年の男が小児をだいた形で発見されたが、子供は好く可愛い玉飾をつけていた。その他小川貝塚、細浦貝塚、大洞貝塚にも人骨が発見されている。屈葬体というのは、遺骸の兩足を折りまげて、いかにもうすくまつているような姿勢に埋めるのである。これに対して伸葬という方法がある。次の古墳文化時代になると石室内から人骨が数多く発見されるが、多くは伸葬のようである。しかし筆者が調査した安積郡大槻町の針生古墳帯の大きな墓穴式の石室内からは奥壁にかたよつて屈葬の形で発見され、又又葉郡新山町郡山にも同じ例があり、古墳時代にも屈葬の風習があつたことが知られる。葦村では最近まで棺は立棺で屈葬されているので、屈葬は古くからの習俗で何か信仰的な理由があつたのかもしれない。葦村や先史時代の石棺は九州方面に多いのであるが、東北地方では青森縣の鶴岡村から屈葬したものが発見されているが他に類例は見当たらない。

先史時代の人類

古代日本人がわが國に移り住むようになったのは一休いつ頃からだろうか、人によつては地質時代から引續いて生活していたように考へるが、実證問題としてこの考へは信じてない。又先住民族はアイヌであるとかコロボクサスであるとか、となられた時代もあつたが、これも誤つた旧説として今は信じられていない。——では一休體文式や彌生式の土器を使つた人々はどうな人々であつたらうか。

(一) 古代人種の研究史

地質学の研究によつて古代日本人が日本島にすむようになったのは、インド象が死滅して間もない頃の比較的暖かつた時代であるらしい。インド象は福島市附近からも発見されている。それからでも数千年の年月がへている。學者の中には日本の古代文化の古いものの中には明にユーラシア地方の中石器時代文化のものがあつて、舊日文系統の早期繩文式土器の研究がすすめられているが、本当のところは何処からどういふ風な道筋を通つて日本に渡つてきたかは今もつて明でない。従つて先史時代文化の人々は如何なる人種であるかも確定した答は出ていない。この人種の研究といふのは人類学といふ

學問で精密な人体計測學により総合的に判断するので、極めて大きな、しかも微妙な問題であるから輕々しく結論が出せるものではない。

明治十二年頃、米人エドワード・シルグエスター・モールズ氏が、東京部内の大森貝塚から人骨を発見してから十年お明けて小金井長崎博士は北海道アイヌに比較して相通する点があることを指摘して、先住民族アイヌ説を根拠づけ、それから繩文土器をアイヌ式土器と呼ぶようになった。これに対して土俗學の方面から坪井正五郎博士は「コロボツクス説を唱出した。鳥居龍藏博士はアイヌ説を繰返して繩文文化人を原日本人、彌生式文化人を縄有日本人と區別していたが、現在これらの説はもう信じられなくなり「先住民」という言葉も使われていない。

現在は長谷部晋人博士や清野謙二博士らが生物學的或は生物計測學的研究により着々と調査の手をすすめられている。最近の清野博士は約一千年に近い先史時代人骨を統計的にみて

「日本の石器時代には繩文土器を使用した一種の人種があつた。この人種は日本人にも似ているし、アイヌにも似たところがある。然しまたどほどの現存兩人種とかけ離れたところがあるために、この人種は日本人とはいえないし、またアイヌ人ともいえない。もつとも血族的關係から強いていうなら日本人といつてもよいし、またアイヌといつてもよい。然し誤解をさけるためには、この人種には日本石器時代人と名づけるがよい。中部及び南部日本の石器時代人は新しくなるほどにくる。彌生式土器使用の初めの人骨はよほど現代日本人のそれに似てくるがなおまだ石器時代人の性質を留め、古墳時代人骨は更に現代日本人に近い。なお北方には別種の石器時代人が住んでおつた。これがアイヌを生じたかの疑がないでもない、然しアイヌの祖先と思われる別種の石器時代人骨は発掘されななし、南部及び中部石器時代人は日本人に似ている程度においてアイヌと似ているのであり、また北部における石器時代の末期貝塚から出土する人骨は非常にアイヌに似ているのであるから、やはり日本石器時代人はアイヌの祖先として有力なものに相違ない

アイヌが如何にも古代人そのままであるが如く見えるのは彼等が比較的多く古文化を保持しているからである。そして石器時代人から漸次現代日本人へと變つてきたのは近接人種との混血と自然の進化とによつて生じたものである」と。

(二) 繩文式文化時代の人人

以上は主として人骨の測定によるものであるが、文化の異つた流れからも考へる必要がある。最近旧石器時代の遺物が発見されたことが報告されているがまだ明ではない。早期繩文文化には西日本に多い稻荷台式と、北日本に多い田戸式との大きな二系統があるように見られ、それ後の文化をみて西日本と東日本といつて異つたものが多いことが今後の研究の手がかりになるのではないだろうか。

(三) 彌生式文化の人人

繩文式文化の人人と彌生式文化の人人とはかなり生活が違つているし、彌生式は西日本に濃く、大陸文化を早くとり入れているので彌生式文化人は大陸のどこから渡つてきたものと考えられがちであるが、彌生式土器をしらべると近畿地方の方が本家であるらしいと考へられるふしがある上に、大陸には彌生式文化の親なり兄弟と見られる同系統のものが発見されていないのでこの考へは正しくない。繩文文化は東日本が中心であるように思われるのは東日本の調査が数多くすすめられていて、西日本の繩文式文化はあまり進められていないという理由もあるが、或は西日本の繩文式文化の人人の中に彌生式文化になつたものがあつたのかもしれない。古代に大量の民族が東支那海を渡つてきたという事は断定出来ない上に大陸に彌生式系統のものがない事より、西日本の繩文式文化人の中に、大陸とのまじりを含め始めたところ、新しい大陸文化の影響を受けて生れ變つたのがにわか活動したのが彌生式文化の人々であつたかもしれない。しかし彌生式文

化の中國、朝鮮から海を越して西日本に渡つた少数の人人があつたことは認められる。

二六

(四) 大陸の影響

貝塚や石器を作つた人が超人間であるということは、世界各地にも行われた旧説であるが、いずれも事實に立脚したものでない。清野人類学研究室の算出によると岡山縣津雲貝塚人は男性は平均一五八センチ、女性は一四七・五センチで最小は一四五センチ、最大で一六二センチで日本人全体の身長平均に比べると小柄で男女とも二センチ低いわけである。もつとも古事記で名高い長すね彦の物語に出る生駒山に近い大阪府の園府人骨の中には身長一六九・七センチの者があり現代日本人よりも割合に大きい人もあつたが、それは混血による変化と考えられる。先史時代にもたえず異種族との混血が行われたが、石器時代後期から彌生式の時期にかけては濃厚に南洋の習俗が流行しているが、それは歴史の伝えるものではないので、南方のどの部分との交流であるかは知られないが高度の文化の交流があつて一定度の混血が行われた。又彌生式から古墳文化時代になつてからは、恐らく朝鮮を経路として農耕と工業特に進歩した金匱文化をもつた大陸の高文化が盛に流入し、又その方面からの移民も多くなり、混血が行われたが、さればと海外の異種族の同化は日本人口数から考えれば決して大した数ではないので、人類学の測定の上の特筆すべき大きな変化は見られなかつた。それは下つて飛鳥奈良時代前後の六朝から隋、初唐へかけて支那文化が盛に流入し、或は明治前後の西洋の文化、今次の大戦後アメリカ文化の流入が盛で、その文化は國民の生活を根柢から変える程の飛躍的な進歩をもたらしても、人種を變える程の混血が行われたものでないのと同じ文化の流入であつた。

(五) 東北地方の先史時代の人人

人類学の計測によつて日本の先史時代の人類は南と北では幾分かの差があり、北方の石器時代人の一部にはアイヌの祖先として有力な別種のものが進んで来たことは明にされているが、さればと東北の先史時代人はアイヌであつたと断定することは出来ない。明治まで青森縣の一部にアイヌ人の部落があつた事實もあるが、古史でいわれる「エゾ」かアイヌであつたことは前記の通り確な証拠はない。浮囚の長といわれ、北の荒えびすといわれた阿倍の宗兄兄弟は身の文衆にすぎた巨人であつたといわれ大宮人から梅の花をさし出して、からかわれて「わが国の梅の花」と三十一文字で答えたので、人が驚き、又浮囚の長といわれるのを恥じて大和文化の移入に汲々として平泉文化を築きあげた奥州藤原氏三代のミイラは近代科学のメスによつて調査された結果、アイヌとは人種的に一線を劃する現代日本人と變らないことが発見されて世の注目をあびた。これは歴史時代に入つてからではあるが、それより更に數百年の古い記録に現われる「エゾ」は東北地方は勿論關東地方にまで及んでいふ事があるが、既に鐵器時代に入つていたので先史時代の人ではない。東北地方の彌生式文化はまた十分に調査されていないが繩文式遺跡にくらべると遙に数が少く、北によるに從つて委を消し、次の古墳文化も岩手縣の北部、秋田、青森縣にはみられないので、これらの東北に住んでいた「エゾ」は繩文式文化から僅かに彌生式文化や古墳文化の接染を受けた人か或はその子孫で、大部分北辺の人人は繩文式文化から鐵器の文化に移り、數段階の文化を一旦よに飛ばして奈良、平安の新文化に飛躍したものであろう。紀元六六〇年頃そうした段階を経た「エゾ」に対して「遠きはツガルといひ、次はアラエゾ、近き者はニギエゾ」といふ名で呼ばれていた。ツガルは津輕で即ち青森等の北辺にいたエゾであり、ニギエゾのニギは「熊」と書かれていたが、ストーンリドルやメンヒルを建てた別の文化をもち、北海道方面とのつながりをもつ一派があつて太平洋岸の人人とは別系統の人人であつたかもしれない。これらの疑問を明らかにすることはこれらの若い研究家に課せられた大きな目標であり、するどい科学眼によつてちつくりと基礎調査からやつて行かなければならない。本書がその手がかりともなれば筆者の望外の幸である。

下川 大畑 (貝塚)

馬玉 大久保 (貝塚)

四郷 金山 (貝塚)

上湯長谷 城山

久矢口 保

假田 前曹子 (貝塚)

御代 若宮台 (貝塚)

同神白 網取 (貝塚)

下神白 網取 (貝塚)

同神白 網取 (貝塚)

諏訪神社裏 眞石 (貝塚)

南富岡 眞石 (貝塚)

住吉 眞石 (貝塚)

大原 眞石 (貝塚)

岡小名 川ノ上 (貝塚)

下高久 原 (貝塚)

神谷作 腰巻 (貝塚)

沼尻 板宮台 (貝塚)

内郷町 板宮台 (貝塚)

御台地萩田 板宮台 (貝塚)

中期縄文 土偶、石鏃、石斧、貝類、獸骨

後期縄文 石鏃、石斧、獨鈺石、獸骨、貝類

中期縄文 石鏃

縄文 石鏃、石斧、砥石

縄文、彌生 石斧

縄文、彌生 磨石斧

縄文 打石斧、獸骨、貝類、(竅穴柱)

縄文 石鏃、石斧、獸骨、貝類

末期縄文 石鏃、貝類

彌生、(土師) 貝類

彌生、(土師) 貝類

彌生、(土師) 石鏃

彌生、(土師) 玉類、石斧

(土師、須惠)

(土師、須惠)

高阪 櫻井

愛谷 古谷台

中平窪 熊ヶ平

同 横山

上平窪 眞似井

同 筑城高校敷地

下月台 立板

下片寄 長者平 (貝塚)

同 南作 (貝塚)

同 大乗坊 (貝塚)

同 寺(倉(野址)) (貝塚)

北神谷 柚代 (貝塚)

山田 水品 (貝塚)

長友 原高谷 (貝塚)

大浦村 旗落 (貝塚)

大野村 小崎 (貝塚)

上小川村 金光寺裏台地

三阪村 日向

差三 塚山

前期縄文 石鏃、磨石斧、凹石

彌生、(土師) 片刃石斧、磨石斧

彌生、(土師) 磨石斧、局部磨石斧

(土師) 石鏃、片刃石斧、磨石斧、凹石、石鏃、石匕

末期縄文 石鏃、石斧、石匕

縄文、彌生 石斧、局部磨石斧、凹石、石里、土鏃、貝類、獸骨

中期縄文 土偶、石鏃、石斧、土鏃、骨角器 (古墳、礎石、古瓦等あり)

中期縄文(土師) 石鏃、磨石斧、貝類、鹿角、獸骨 (大越式)

彌生、彌生 石鏃、片刃石斧、石里

彌生、彌生 片刃石斧、凹石

繩文 石鏃

繩文 石鏃、石鏃、土鏃

繩文 石鏃

繩文 局部磨石斧

繩文 石鏃、石鏃、玉類

繩文 石棒

繩文 石棒

繩文 石棒

繩文 石棒

川前村

小白井

同

上桶亮

下桶亮

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

精戈
鬼ヶ城山北麓

大平

小半田

板ノ橋

十三塚

石後前

御林

川下

桶亮路

小屋の平

横地

下の平

上屋敷

塚場平

とまら予や

葵平

見畑

伏平

縄文

早期縄文

縄文

縄文

縄文

縄文

縄文

縄文

縄文

縄文

縄文

縄文

縄文

縄文

縄文

縄文

縄文

縄文

縄文

縄文

石鏃

石鏃

石鏃

石鏃

石鏃

石鏃

石鏃

石鏃

石鏃

石鏃

石鏃

石鏃

石鏃

石鏃

石鏃

石鏃

石鏃

石鏃

石鏃

石鏃

川前

外門

五立

宇根尻

館の山

そらの平

藤平

中倉

山下谷

田代

サヂラ

サヂラ

サヂラ

サヂラ

サヂラ

サヂラ

サヂラ

サヂラ

サヂラ

白平

クローマボツケ

吉間田

鬼ヶ城山南麓

沼の沢

神樂山西麓

神樂山西麓

神樂山西麓

神樂山西麓

神樂山西麓

神樂山西麓

神樂山西麓

神樂山西麓

神樂山西麓

神樂山西麓

神樂山西麓

神樂山西麓

神樂山西麓

神樂山西麓

神樂山西麓

神樂山西麓

神樂山西麓

早期縄文

縄文

縄文

縄文

縄文

縄文

縄文

縄文

縄文

縄文

縄文

縄文

縄文

縄文

縄文

縄文

縄文

縄文

縄文

縄文

縄文

石鏃

石鏃

石鏃

石鏃

石鏃

石鏃

石鏃

石鏃

石鏃

石鏃

石鏃

石鏃

石鏃

石鏃

石鏃

石鏃

石鏃

石鏃

石鏃

石鏃

石鏃

(館の山式)

雙葉郡

久之濱町

田之網

久之浜

小久

大久村

大久村

大久村

大久村

平松沢

速野

中野

大野

大野

大野

大野

大野

縄文

縄文

縄文

縄文

縄文

縄文

縄文

縄文

石鏃

石鏃

石鏃

石鏃

石鏃

石鏃

石鏃

石鏃

大田和 川太田 塚田 馬場台 八方内 深野 (高座神社附近)

原町 西原 櫻井 押笠 牛越 竹中

高平村 上高原 西原 京町附近 北沢 堂坂 天神各地 具持 高松 村上

眞野村 江垂 小島田 寺内 西館 大谷地

縄文 土偶、有孔磨石器、石斧、石匕

縄文 彌生(土師) 石釵、石斧、石棒(石棒多數)

縄文 彌生 石釵、石斧、石匕(手長山に手長明神社にあり) 土偶、石釵、石斧、石匕、石庖丁 (際穴跡)

縄文 彌生 紡錘車、石庖丁 石庖丁、紡錘車 (彌生式が中心)

縄文 石器 石釵、石斧

縄文 石釵、石斧 石釵、石斧、石棒 石釵、石斧、石匕、石鏡

縄文 彌生 石釵、石斧、石匕、石庖丁、石棒

縄文 石釵、石斧、石匕、石鏡、石庖丁、石棒、土製身飾

(貝塚)

八沢村 海老 八幡林 鷺内 西原

大須村 永倉 中羽 白鳥

磯部村 磯部 川内 池内 原加 長沼 新田原

上真野村 小池 降居神社附近

同和田 茂手 堂前 御所内 榎内 竹花

角川原 今宮 竹花

八幡村 坪上 八幡社附近

縄文(土師) 石釵、石斧、石庖丁 石器 石棒

縄文 磨石斧 石釵、石斧、石匕、勾玉

縄文 彌生(土師須恵) 石釵、石斧 打石斧

縄文 彌生 石釵、磨石斧、石鋸、石匕、石棒、石劍

縄文 石釵、石斧、石匕、凹石、凹石

縄文 石釵、石斧、石匕、石鏡、石棒

縄文 石器 (石材採集地か)

(貝塚)

南堀切

縄文

石斧、凹石、石棒

馬捨山

縄文

砥石

北川農場

縄文(土師)

石鏃、石匕

大沼

縄文

石鏃、石棒、凹石

同

縄文

石鏃

水沼

縄文

石棒

芦口

縄文

石斧、石棒

久田野

彌生

石鏃、石棍、石匕、砥石、磨石

雙石

縄文(土師、須恵)

石鏃、石斧

借宿

縄文

石鏃、石斧、石鏃

板橋

縄文

石器

関和久

縄文、彌生(須恵)

石斧

北平山

縄文

石斧

島村附近

縄文

大磨石斧

深仁田

縄文

磨石斧、砥石

烏川

縄文

土偶、石鏃、石斧、石棒、砥石、石鏃

蓋子村

縄文

土鏃、石鏃、石匕、石皿、凹石、敲石等

合殿(鹿島神社附近)

九反田

行屋

谷地入

豆柄山

彌目城址

坊入

古内

新山麓

大明戸

潮知房

中島

藥師堂

清水ノ上

天上林

栃本

縄文

土版、岩版、石槍

同

縄文

珠狀耳飾、片双磨石斧

釜子

縄文

石鏃、磨石斧、片及石斧

千田

縄文

石鏃、石斧

上野田

縄文

石鏃

下野田

縄文

石鏃、片及磨石斧

松崎

縄文

土偶、小磨石斧、凹石

三神村

縄文(須恵土師)

石斧

川崎村

縄文

石鏃、片及磨石斧

信夫村

中、末期縄文(土師、須恵)

土偶、石鏃、打石斧、凹石、磨切、磨切り石斧

中畑村

縄文

石鏃

下新城

縄文

石棒

松倉

縄文

石斧、石棒

中畑

縄文(土師)

石鏃

沢田村

縄文

磨石斧

新屋敷

縄文

石鏃

赤羽

縄文

石鏃

石川郡

新屋敷、石船、權田上、繩文

三和村

川田山

白旗

縄文

土偶、石鏃、石斧、石錐

鹽積村

野田

並木聖地

縄文

石鏃

八幡

長井横岩

縄文

打石斧

多田野村

胸石屋

手代木

縄文

石鏃、石斧

河内村

河内

箕ノ内

縄文

石鏃、石斧、石匕

片平村

同平

丘ノ内

縄文

石鏃、石斧

大槻町

近内

名倉

縄文

石鏃、石斧

針生

東下

東前田

縄文

石斧、石棒

富田村

富田

氣掃壇

縄文

石鏃、石斧

郡山市

小原田

栗井

縄文

石鏃、石斧、石棒、玉類

赤木

鹿島浦

古亀田

縄文、彌生

石鏃、石斧、石棒、玉類

下釜

歌附近

薬師堂(アルミ工場)

縄文

土偶、石鏃、石斧、石錐、石匕、石棒

大島

矢ノ根石(旧名ひとね内)

縄文、彌生

石鏃、石斧、石錐、石匕、石帖、石棺

矢地内

春日神社前

縄文、彌生

石鏃、石斧、石錐、石匕、磨石斧

八頭

辰巳田(御前堂)

縄文、彌生

土鏝

同

谷

縄文

石鏃

清水内

阿良久

彌生(須惠器)

石鏃

西ノ内 繩文
桑野 繩文(須惠器)
横塚 繩文、石斧
北ノ町 石斧、石環、凹石
久保田 石環、石斧、石鏃
八山田 石鏃、石斧
横森 石鏃、石斧
堀之内 石斧、石斧、石匕
喜久田町 石斧、石匕
日和田町 繩文
富久山町 繩文
前田沢 繩文
玉類、有孔石器
土偶、石斧、石環、石鏃、石匕、玦狀耳飾
石鏃、石斧
石鏃、石斧、石鏃
石鏃、石斧
石斧
石鏃、石斧、石匕
石斧、石匕
石槍

關良村
赤津村

(猪苗代湖畔に記す)

田村郡

◎ (阿武隈川流域)

守山町 守山 繩文、彌生
德定 批把沢 繩文、彌生
御代田 正直 彌生
山田 彌生(土師器)
大善寺 繩文
石槍、打石斧、石匕、石笛

高瀬村 細田 繩文
太平 嘉成 繩文、彌生
横川 手代木 繩文、彌生
巖江村 根木屋 繩文
下舞木 繩文、彌生
小泉村 木村 繩文
造隈村 三町目 繩文、彌生
三町目 谷地 繩文(土師)
同 一ツ森 繩文
大綱 川下 繩文
鬼生田 菅ノ沢 繩文
石匕
石鏃、打石斧
石鏃、石鏃、砥石、獨鈷石
土偶、石鏃、石斧、石虱、凹石
石皿
石匕丁
土偶
土偶、石鏃、石斧、石槍、大珠
石鏃、磨石斧、獨鈷石、石槍
土偶
石器

◎ (谷田川流域)

谷田川村 谷田川 寺内加 繩文
箱屋 繩文
北田 繩文
北田 繩文
古表 繩文
中井 繩文
大花 繩文
御館村 下川 繩文
下枝 繩文
二瀬村 田母神 繩文
同 繩文
同 繩文
石鏃、打石斧、石匕
磨石斧
磨石斧
土偶
石鏃
石鏃
石鏃
石鏃
石鏃
石鏃、石槍、打石斧、石匕
磨石斧
一四九

◎(滝根川流域)

宮城村	高倉	羽窪	繩文	石器
中妻村	西	四方	繩文	石器
中郷村	新	田	繩文	石器
文珠村	縣	道筋	繩文	石棒(社室)
常葉町	錢	上平	繩文	
	山	田作	繩文	
山根村	上	眞上	繩文	磨石斧
	早	稻川	繩文	土偶、石匕
	菅	園本	繩文	土偶、石斧
瀧根町	谷	大瀧根山	繩文	石器
	廣	瀬	繩文	石器
大越村	上	大越	後、晚期繩文	土偶、石斧
	下	大越	中期繩文	石器
夏井村	湯	沢	土器	
		開墾地		

(牧野川上流)

七郷村

堀越	井堀	繩文	石斧、石棒、石皿、石筒(石棒は明石神社社室)
	大門原	繩文	
	高稻場	繩文	
	櫻久岡	繩文	
	大風	繩文	
	深上	後期繩文	
	山	後期繩文	
	栗出	後期繩文	

◎(小泉川流域)

高野村	上	鹿島館	繩文	石棒
	丹	伊田	繩文	
	並	山	繩文	石器
	中	ノ内	繩文	磨石斧
	◎(移	川	繩文	石器
	流	域)		

(鹿島神社社室)

移	石	村	繩文	石器
	瀧	川	繩文	石器
	瀧	川	繩文	石器
	瀧	川	繩文	石器

◎(甬部地方)

熱海町	熱海	繩文	石鏃、石棒、石劍
-----	----	----	----------

(五百川北岸附近)

岩根村 岩根 小屋館 一枚平

石巖 石巖 眞珠岩の露頭あり(ツチストーンといわれる石巖の原石)

荒井村 上ノ原 石ノ塚 小坂

縄文(土師) 石巖、石槍、石匕 縄文 石巖、石錐

◎(中部地方)

青田村 南之内 青田原

本宮町 玉ノ井村 大石 名倉

縄文 石燭、玉類 石巖、石燭 石巖、石槍 石燭

大山村 大江山 天ヶ沢 山崎裏 山崎崎

縄文 打石斧 土版、石燭、敲石 石巖、石斧、石冠、石錐、敲石

杉田村 箕輪 宮脇 護摩堂 新屋敷

縄文 打石斧 石燭、石槍 石巖、磨石斧、石槍

館野 南杉田 日向 落合 猫石 郡山台及長者宮

打石斧 土偶、石燭、石槍 中期縄文(須惠)石燭、石斧、石匕、石棒、凹石 (古墳、寺院跡と複合)

園入森 熊中野 稻荷山 藥師堂附近

縄文 磨石斧 石棒、凹石 石燭、石槍、石斧、石錐、石棒 後期縄文 中期縄文 (伊勢)

織下村 原 久保 菅田 分前

分前 分前 分前 分前 中期縄文 土偶、石燭、石斧、石匕、石棒、凹石 (伊勢)

◎(東部地方)

和木沢村 藤沢 塔ノ平

高木 高松 観音寺

縄文 磨石斧、石棒 石斧 石斧 磨石斧

白岩村 大平村 小浜町 安達ヶ原 下長折 黒塚

縄文(土師) 石燭、石匕、石棒 石燭、石斧、石棒 石燭、石斧

針道村 上長折 長者屋敷 塔平 三十三間堂跡

縄文 磨石斧 石燭、石斧 磨石斧

戸沢村 針道 北戸沢 赤馬館

縄文 磨石斧 磨石斧

旭村 田原 沢

◎(北部地方)

上川崎村 小沢 藤兵衛
下川崎村 下川崎 東北

堂平 なめつ

縄文

石器
石器
石器
石斧、石鋸

油井村 鹽沢村

金田(旧名カシ) 上原 冥聖沢 行人山

縄文 後期縄文

石槍
土版、石鏃、磨石斧、土鏝、石棒
土版、石鏃、石斧、石匕、石槍、石鏝、石棒、石皿
石器
石鏃、石斧

信夫郡

◎(南部地方)

松川町 古浅川 八丁目

サツ原

後期縄文 後期縄文

土版、石斧、土鏝
土版、石鏃、石斧、石棒、獨鈺石

小学校裏

(石棒は菅原神社宝物)

金谷川村

南沢開墾地 金沢 寺方

縄文 後期縄文 縄文

石器 土鏝 石斧

水原村

熊野神社附近

前期縄文 前期縄文

石器 石鏃、石匕 石斧

荒井村

愛宕原 地蔵原 石子 新田 中 長作 菅母 菅浦沢 鹿島神社附近

後期縄文 後期縄文(須恵土師器) 後期縄文

石鏃、石匕
土偶、石鏃、石斧、石匕、石槍、玉(へら)

鳥川村

下鳥渡

縄文

石器 石鏃、磨石斧、石匕

平田村

平石

中、後期縄文 縄文(須恵器)

土偶、石鏃、磨石斧、石匕、石皿、石棒、くるみ

佐倉村

山田

◎(西部地方)

縄文(土師)

珠状耳飾

土湯村

佐原

大新田 大木坂 陣場

石器 磨石斧 石鏃

石鏃、獨鈺石

余目村 上ノ町 古館前

飯坂町 小川 穴田

中野村 中野 鬼越

平野村 平塚 塚頭山

井佐野 明神野 五郎兵衛館

伊達郡 (河西地方)

湯野町 明神町 横町

幕野 塚 かけじ

大水口 志古屋 上岡

東海野村 増田 北岡

板谷内 板谷内 北向神社附近

磨石斧、石和

石和、磨石斧

石和、磨石斧、石槍、石匕、石棒、三角石器

動物土偶、石鏃、石へら

石鏃、石斧、石槍、石鏃、石匕、石棒

石鏃、石匕、石鏃

石鏃、石匕

石鏃

磨石斧、未成品

繩文 (須恵、土師)

岩版、石鏃、石斧、石匕、石槍、石鏃、石棒

石鏃、石槍、石斧、玉類

土偶、石鏃、打石斧、石槍

石鏃、石鏃、石匕、石棒、土鏃

磨石斧

茂庭村 田畑 三賀尻

伊達町 堂ノ前 金秀寺東

陸合村 松原 柳沢前

桑折町 南半田 高館、大櫃、天神森

半田村 南半田 七曲向

伊達崎村 上郡 常源寺

下郡 舟場 東方

桑折台地 長者畑 東方

森江野村 森野目 壇ノ越

德江 觀音寺 神明社上

沼田 沼田 沼藏山

石母田 石母田

繩文 石槍

後期繩文 石鏃

繩文 磨石斧

繩文 石鏃

繩文 土偶、石鏃、上成田に瑪瑙、玉髓、燧石の産地あり

繩文 土偶、石鏃、石斧、石匕、凹石、石鏃

後、晚期繩文 土偶、石鏃、石斧、石槍、石匕、凹石、土鏃、玉類

繩文 (須恵、土師、須恵)

石鏃、石斧

繩文 (土師、須恵) 石斧、石匕

繩文 (土師、須恵) 石斧、石匕

繩文、彌生 石匕、石斧

彌生 (土師、須恵) 曲玉

繩文 石鏃、磨石斧、曲玉

繩文 (須恵) 磨石斧

繩文 石鏃、石斧、石棒、凹石、石鏃

大木戸村

高城

明神前
原

学校附近

縄文

石鏃、石鏃、石斧、石匕
石鏃、石鏃、打石斧、石匕、小玉
石鏃、石槍、打石斧、凹石
石器

光明寺

中山原

縄文

土偶、石鏃、石槍、石斧、石鏃、石匕、石槍、石血、凹石、土鏃、石槍、玉類、耳飾
石器

大枝村

西大枝

取上
根岸

縄文(土師)

土偶、石鏃、石斧、石槍、石鏃、石槍、石匕、石血、凹石、土鏃、石槍
石器

西大枝

青木
築館
竹ノ内

(須恵)

土偶、石鏃、石槍、石鏃、石斧、石匕、石鏃、凹石、石鏃、小玉、玦狀耳飾
石槍、石匕、獨鈷石
石器

東大枝

櫻山附近(愛宕山)
寺前墓地
滑沢

縄文

石鏃、磨石斧
石器

小館

縄文

石鏃、磨石斧
石器

五十沢村

館ヶ森
寺田(地蔵田)
石高丸

(その他打越、矢洗、手沢に石鏃)

縄文
縄文(須恵) 石鏃、打石斧、石匕、(旧河川地下一米半)
打石斧、石匕
石器

◎(河東地方)

青ヶ作及三島前

石棒

山舟生村

首投

縄文

石鏃、磨石斧
石器

白根村

久根内(住居跡)
八景塚
白山川前

縄文
晩期縄文(土師)

石鏃、石槍、磨石斧、石匕、小玉
石鏃、磨石斧
石血、石匕、石斧、獨鈷石
石器

富野村

白合下
合波入
羽下
袖五郎

縄文
縄文
縄文

石鏃、石匕
石器

梁川町

町谷川
洞下

天神前

樋口橋南岸

縄文

石鏃、石匕
石器

北町

二反田
東前

後、晩期縄文(須恵)

土偶、石鏃、石槍、石斧、石匕、耳飾
石器

栗野村

柳田

後、晩期縄文

石鏃、石鏃、石斧、石棒、土石鏃
土偶、石鏃、石槍、石鏃、磨石斧、石劍、獨鈷石
石匕、土鏃、玉類
石器

坂本村

新田

大正寺
藤橋

後、晩期縄文

土偶、石鏃、石斧、石槍、土製紡錘車、土鏃
石器

大 四
船野橋
熊野脇
長ノ内
下ノ内

細谷
金原田
仁井田
桐ノ木

大田村
仁井田
上保原村
大柳

高子
京門

富成村
富成田
富沢

◎(東南部地方)

靈山村
掛田町
小園村

泉原
大石
下小園

竹ノ内
広畑
高尾敷

繩文(土師) 石槍

後、晚期繩文(須恵、土師) 石棒

繩文(土師) 石鏃、石匕、石槍

繩文 石鏃、石匕

繩文 石斧、石匕

繩文、彌生 石器

彌生(土師、須恵) 石鏃、玉類

繩文(須恵) 石器 石鏃、石槍、磨石斧、石棒、石匕、凹石、石笛、土製紡錘車、綠麻石、玉類

(土師器)

繩文 石槍

繩文 珠狀耳飾

繩文 石鏃、石槍、石錘、石棒、石斧

繩文 土銅、石鏃、磨石斧、石錘、石棒、石匕、土鏃、小玉

繩文 石器 石匕、石槍

繩文

月館町

川俣町

飯坂村

明治村

飯野町

富田村

立子山村

小綱木村

小学校畑
小学校附近

栗和田
阿彌陀堂
常泉寺附近

古町

萩田

砂田

西飯野

和合

町畑

東願沢

内ノ馬場

天館

入川

廣畑

大森山

繩文

後期繩文

後期繩文

後期繩文

繩文

繩文

繩文

繩文

繩文

磨石斧

石鏃、石斧、石匕、石棒

石鏃、石斧、石棒

石皿

石鏃、石斧

石鏃、石斧

石鏃、石斧、石皿、石笛、玉類

磨製石斧

石鏃、石斧、石槍

石槍

石槍

石槍

石槍

會津地方

◎猪苗代湖周辺

千里村 緊田 湖久保 土器

猪苗代町 緊根 賀沢 長濱 見福山 西峯 押立温泉 狛谷 開墾地 繩文

吾妻村 原 小田 小田 繩文

湊村 原 小田 繩文

共 和 西田 小田 繩文

赤井 湯 和 經田 西田 繩文

月形村 館 津沢 楳原 十六橋附近 繩文

福良村 舟橋 津沢 山神 下 繩文

福良村 良 打取 戰 繩文

(折局会津風土記)

石鏡、石鏢、土鍋 (石鏢多シ)

石鏢、石匕

石鏢、石斧、石匕、石皿

石器

石器

土鍋

石鏢

磨石斧

石鏢、石棒

和久 片岸前 伊羅沢 大久保 大將地 大栗生 四十房 若宮 長作 藤合 藤合 立 上山 堂ノ入 繩文

赤津村 馬入新田 繩文

猪苗代町 大寺 本寺 廣面 中期繩文(須恵)土鍋、石鏢

猪苗代町 大寺 法正 廣面 中期繩文(須恵)土鍋、石鏢

猪苗代町 中屋沢 竹屋 七ツ壇 長し芝原 繩文(須恵) 石鏢、石斧、石匕、石棒、凹石

石鏢

石匕

石斧

打石斧

繩文

繩文

繩文

繩文

繩文

繩文

繩文

繩文

繩文

繩文

繩文

繩文

繩文

繩文

新郷村 夏井

縄文 土偶 石斧

◎ (金津盆地中央部地方)

勝常村 勝常

彌生 石蔵

金上村 新開津台

(須忠壽)

川西村 新開津台

縄文、彌生

宇内 馬場

土偶、石蔵、石斧

津尻 西原

縄文

長井 長井

彌生

八幡村 八幡

彌生

見明 袋原

縄文

塔寺 松原

後期縄文、彌生

上ノ山

石蔵、石斧

動物土偶、石蔵、石斧、環状石斧、石匕、石土錘

石匕、石劍

土偶、石器

石蔵、石槍、磨石斧

石蔵

土版、石蔵、石斧、石棒

石蔵、石斧、片及石斧、石匕、石錐、玉類

石蔵

土偶、石蔵、石斧

石蔵

石蔵

石蔵

石蔵

石蔵

石蔵

石蔵

石蔵

石蔵

石蔵

石蔵

石蔵

石蔵

石蔵

石蔵

石蔵

石蔵

石蔵

石蔵

石蔵

石蔵

◎ 北會津郡 (金津盆地東南部地方)

一箕村 八幡

後期縄文

東山村 大塚山

縄文

院内 東

縄文

御山 八幡上

縄文

御山 南御山

彌生

根岸 館山

縄文

大戸村 上三寄

彌生

荒井村 三伏

彌生

玉路村 小谷

縄文

大沼郡

石蔵、石斧

大沼郡

石蔵

若宮村

縄文

新井村

和田目 石田 立行

繩文 石鏡、石斧

小沢

佐賀瀬川 中江 權現堂

繩文、銅生 土偶、石鏡、打石斧

米田

米田 米沢 富塚原

繩文、銅生 土版、石鏡、磨石斧

沼田

沼田 官前 觀音堂

繩文 土器 石斧、石匕

高田町

赤留 赤沢川畔 山王社附近

繩文、銅生 土器 土偶、石鏡、磨石斧

永井野村

長岡 長岡館 十五塚原

繩文、銅生 土偶、石鏡、石斧、石棒

千吹村

三津谷 右屋敷 河原田開墾

繩文 土偶、石鏡、石皿 土斧、石器 石鏡、石斧

片門村

天屋 八坂野 上中沢

繩文 繩文 繩文 繩文 繩文 繩文

東松村

飯谷 麻屋敷

繩文 繩文 繩文 繩文 繩文 繩文

柳津町

飯谷 麻屋敷

繩文 繩文 繩文 繩文 繩文 繩文

西方村

飯谷 麻屋敷

繩文 繩文 繩文 繩文 繩文 繩文

西山村

久保田 佐渡畑

繩文 繩文 繩文 繩文 繩文 繩文

宮下町

久保田 佐渡畑

繩文 繩文 繩文 繩文 繩文 繩文

沼沢村

大谷 鳥海 小和瀬

繩文 繩文 繩文 繩文 繩文 繩文

川口村

小栗山 新道傍

繩文 繩文 繩文 繩文 繩文 繩文

本名村

寺岡 小学校裏

繩文 繩文 繩文 繩文 繩文 繩文

昭和村

大矢原

繩文 繩文 繩文 繩文 繩文 繩文

横田村

横越川 四十九院

繩文 繩文 繩文 繩文 繩文 繩文

◎只見川流域地方

瀧田代 神社傍

繩文 石器 石匕、石斧

◎南會津郡

伊北村 瀧生 瀨ノ越 薬師寺境内

繩文 石器、石槌、石匕、石鏃、石斧、三角石器
末期繩文、彌生 石器、石棒

朝日村 瀧 瀧ノ川 曲尺瀧内

末期繩文、彌生 石器、石斧、片刃石斧、獨鈺石
獨鈺石、石棒、玉類

同 瀧戸 二荒神社境内

末期繩文 石器、石斧、石匕

長濱 石神

末期繩文 石器、石斧

明和村 大倉前田 唱崎

末期繩文、彌生 石斧、石匕、石斧、環狀石斧、獨鈺石、石皿

同 大倉前田 見張屋敷

繩文、末期繩文、彌生

富田村 坂田 上原ヶ岡

繩文 石斧 石斧、石匕、石棒

伊南村 和泉田 上原 立字賀

末期繩文、彌生 石器、石匕、石斧、石棒

檜枝岐村

小 多石

彌積開墾

香取神社下 繩文

石器、石匕、石斧

大戸沢

追分

繩文

石匕

下ノ原

役場附近

繩文

石鏃

松戸原

ベケ物清水

繩文

凹石

岩倉

中期繩文

土版、石器、石斧、片刃石斧、石棒

下瀧ノ下

末期繩文

石器、石斧、石匕、石鏃、石棒

保城

繩文

石器、石斧

◎大川流域 (阿賀川上流)

江川村 高し

繩文、彌生

石器、石斧、石棒

楡原町 豊成

繩文、彌生

石器、石斧、石棒

田島町 長野

繩文、彌生

土偶、石鏃

(鉄器伴出)

田島 (學校裏)
舟藤 下山
船海村 糸 沢

中期縄文 石礫、石匕、石斧、石皿、凹石
縄文 中期縄文 石礫、石匕、石斧、石皿、凹石

遺跡、遺物の発見届について

昭和二十五年五月三十日施行された「文化財保護法」によると、遺跡の発見、遺物(埋蔵文化財)の処理については次の通り規定されているので、発見届は必ず助行して下さい。

1. 遺跡を発見した際は現状をそのままにして縣教育委員を経由文化財保護委員会に十日以内に発見届を提出しなければならぬ(違反料五千円以下 (第八十四條、百十一條))
2. 埋蔵文化財(遺物)を発見した時は警察署に届け出て前項の通り縣教育委員を経由文化財保護委員会に届出て國が重要文化財でないと思ふ際は、発見地、地方公共團體の申請によつて譲與される。國家が保有する時は発見地又は土地の占有者に時價による價格が與えられる。(第五十七條、六五條、百十一條)

法律上左の通りであるが、重要文化財でない土器一片、石礫一箇の発見であつても學術上重要な資料であるから発見した時、又は発見者があつた場合は左記に報告願います。(届出様式は學校、役場又は教育委員会出張所に問合せ可)

福島市杉妻町 福島縣教育委員事務局社会教育課
文 財 調 査 保 存 係

昭和二十五年十二月十五日印刷
昭和二十五年十二月二十日発行
【非 売 品】
福島市杉妻町十六
発行所 福島縣教育委員会社会教育課
編集者 同文化財係 梅宮 茂
印刷所 福島市上町五十一番地
文化堂印刷株式会社